

總社市埋蔵文化財調査年報 11

(平成 12 年度)

2001 年 9 月

總社市教育委員会

序

総社市はすばらしい自然環境と豊富な歴史的遺産に恵まれ、歴史的風土の継承と現在の生活環境との調和のとれた街づくりを行ってきました。

吉備路風土記の丘を中心とした地域には作山古墳、備中国分寺、国分尼寺といった全国でも屈指の遺跡が見られ、近年では黒尾・奥坂一帯に古代山城の鬼ノ城をはじめ、新山廃寺、経山城といった数多くの遺跡が注目されるようになり、来跡者は跡を絶ちません。こうした全国的にも著名な遺跡を保護し、活用していくことを第一義と考え文化財保護行政に努めています。

また、本市の第3次総社市総合計画に掲示されております「吉備文化を継承し創造する共生と交流のまちづくり」という基本理念のもと、市街化や都市基盤の整備等により住宅都市化へと変貌しつつあり、漸増する人口は5万7千人に達しました。今後とも着実な増加が続くものと見られます。

こうした人口増を促す社会基盤整備や、各種の開発行為に伴う遺跡の記録保存を行うため、毎年数多くの発掘調査が実施されています。発掘調査によって我々の先人達が残してくれた生活の跡や、道具が地下の眠りからめざめ、私たちに古代の生活や文化を垣間見せてくれます。

この年報は教育委員会文化課が実施しました平成12年度の事業活動の概要をまとめたものです。皆様の文化財に対する理解を深めていただきますと共に、文化財の保護ならびに活用の一助になれば幸いです。

最後に当教育委員会の文化財行政に御指導、御協力をいただいた関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

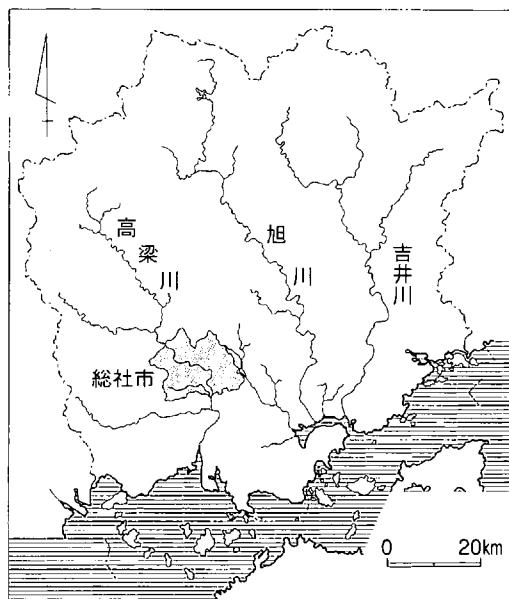
平成13年9月

総社市教育委員会

教育長 乗田交三

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成12年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会・確認調査についてその概要をまとめたものである。
2. 本書は、各調査の担当者である谷山雅彦、武田恭彰、平井典子、前角和夫、高橋進一、松尾洋平、埋蔵文化財学習の館 館長村上幸雄が執筆し、それを編集したものである。それぞれ文末に執筆者名を記し、文責とする。全体の編集は松尾が行った。
3. 遺物整理及び資料の整理にあたっては、近藤雅子・田中富子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は、国土座標の入っているもの以外は磁北である。
5. 本書に関する実測図、写真、遺物等は、総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。
6. 本書の刊行にあたり、御指導・御教示を賜った関係の皆様に厚くお礼申し上げます。



第1図 位置図

目 次

序 文

例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2000年度埋蔵文化財行政の概要	1
------------------	---

2. 立会および確認調査の概要

分譲地造成工事に伴う立会調査	5
事務所建築に伴う立会調査	6
総社運動公園体育館新築工事に伴う試掘調査・立会調査	7
分譲宅地開発に伴う立会調査	9
体育館建設に伴う立会調査	10
病院増築に伴う立会調査	11
校舎増築に伴う立会調査	12
市道拡幅工事に伴う試掘・立会調査	13
共同住宅建設に伴う確認調査	14
作山下水路改良工事に伴う立会調査	15
携帯電話基地局設置に伴う試掘調査	17
店舗建設に伴う立会調査	19
井手地区の共同住宅建設に伴う試掘調査	20

3. 発掘調査の概要

東総社中原本線改良工事に伴う発掘調査（三須地区）	23
岡山納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告	29
真壁遺跡	35
吉備路観光センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（切土部分）	38
山田地区県営ほ場整理事業に伴う発掘調査(6)	40
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	52
県営ほ場整備事業原地区に伴う発掘調査概要報告（付・B区試掘調査）	55
鬼ノ城登城道および新水門の調査	58

目 次

第1図	位置図	
第2図	立会・確認調査位置図 (S = 1/80,000)	4
分譲地造成工事に伴う立会調査		
第3図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	5
事務所建築に伴う立会調査		
第4図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	6
総社運動公園体育館新築工事に伴う		
試掘調査・立会調査		
第5図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	7
第6図	トレンチ配置図 (S = 1/2,000)	8
第7図	(S = 1/80)	8
分譲宅地開発に伴う立会調査		
第8図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	9
体育館建設に伴う立会調査		
第9図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	10
病院増築に伴う立会調査		
第10図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	11
校舎増築に伴う立会調査		
第11図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	12
市道拡幅工事に伴う確認・立会調査		
第12図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	13
共同住宅建設に伴う確認調査		
第13図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	14
第14図	土層断面図 (S = 1/40)	14
作山下水路改良工事に伴う立会調査		
第15図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	15
第16図	土層位置図	16
第17図	下水路北壁土層柱状図	16
第18図	7層出土遺物 (S = 1/4)	16
携帯電話基地局設置に伴う試掘調査		
第19図	調査地位置図と遺跡分布図 (S = 1/10,000)	17
店舗建設に伴う立会調査		
第20図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	19
第21図	土層断面図 (S = 1/40)	19
井手地区の共同住宅建築に伴う試掘調査		
第22図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	20
第23図	土層模式図 (S = 1/40)	21
東総社中原本線改良工事に伴う発掘調査(三須地区)		
第24図	調査区位置図 (S = 1/4,000)	23
第25図	観音堂遺跡・牛神遺跡遺構配置図 (S = 1/500)	24
第26図	区画溝推定域 (S = 1/5,000)	25
第27図	中所1区遺構配置図 (S = 1/400)	26
第28図	観音堂遺跡・区画溝出土遺物 (S = 1/4)	28
岡山納整センター造成事業に伴う		
市後遺跡群の発掘調査概要報告		
第29図	調査地遺構配置図 (S = 1/5,000)	30
真壁遺跡		
第30図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	35
第31図	遺構配置図 (S = 1/400)	36
第32図	東端建物基礎断面図 (S = 1/80)	36
吉備路観光センター建設に伴う		
埋蔵文化財発掘調査(切土部分)		
第33図	調査地位置図	38
第34図	遺構配置図 (S = 1/500)	39
山田地区県営ほ場整理事業に伴う発掘調査(6)		
第35図	調査地配置図 (S = 1/5,000)	40
第36図	遺構全体図 (S = 1/400)	43・44
第37図	第3調査区遺構配置図 (S = 1/400)	45
第38図	第5調査区遺構配置図 (S = 1/400)	45
第39図	炭窯・鉱石焙焼炉 平・断面図 (S = 1/30)	46
第40図	2区大溝・3区SH01出土遺物 (S = 1/4)	48
第41図	第2調査区大溝最下層出土遺物(1) (S = 1/4)	49
第42図	第2調査区大溝最下層出土遺物(2) (S = 1/4)	50
駅南区画整理事業に伴う発掘調査		
第43図	位置図 (S = 1/5,000)	52
第44図	惣善寺遺跡 第1遺構面遺構配置図 (S = 1/200)	53
第45図	惣善寺遺跡 第1遺構面遺構配置図 (S = 1/200)	53
第46図	下川田地区 土層断面図 (S = 1/40)	54
県営ほ場整備事業原地区に伴う		
発掘調査概要報告(付・B区試掘調査)		
第47図	調査地位置図 (S = 1/5,000)	56
鬼ノ城登城道および新水門の調査		
第48図	鬼ノ城平面図 (S = 1/8,000)	59
第49図	調査地全体図 (S = 1/2,000)	60
第50図	西門付近平面図 (S = 1/400)	61
第51図	T 1 平・断面図 (S = 1/150)	62
第52図	列石平・立面図 (S = 1/80, 40)	62
第53図	T 2 断面図 (S = 1/120)	63
第54図	T 3 平・断面図 (S = 1/120)	64
第55図	T 3 烧土面平・断面図 (S = 1/40)	64
第56図	T 4 石積遺構平・断・立面図 (S = 1/80)	65
第57図	T 5・6・7断面図 (S = 1/80)	66
第58図	T 9~22配置図 (S = 1/800)	67
第59図	T 9・T 11 (S = 1/100), T 10 (S = 1/80), T 12 (S = 1/60) 断面図	68
第60図	T 16・18・19・22 (S = 1/100)	

T 21 (S = 1/60) 断面図	70
第61図 石垣 1 平・断・立面図 (S = 1/60)	71
第62図 石垣 2 平・断・立面図 (S = 1/60)	71
第63図 石垣 3 平・断・立面図 (S = 1/60)	72
第64図 石垣 4 平・断・立面図 (S = 1/60)	72
第65図 高石垣～第 0 水門付近平面図 (S = 1/300)	74
第66図 T 23断面図 (S = 1/120)	75
第67図 T 23～25木器出土状況 (S = 1/40)	76
第68図 T 23土壙平・断面図 (S = 1/60)	77
第69図 第 0 水門立面図 (S = 1/80)	79
第70図 第 0 水門断面図 (S = 1/100)	79
第71図 第 0 水門前面平・断面図 (S = 1/40)	81
第72図 T 28平・断面図 (S = 1/60)	83
第73図 T 27断面図 (S = 1/60)	83
第74図 T 29 (S = 1/80), T 30・T 31 (S = 1/60) 断面図	84
第75図 T 32～34 (S = 1/100), T 35 (S = 1/80) 断面図	85
第76図 第 1, 第2水門トレーニング配置図 (S = 1/400)	86
第77図 T 37平・断・立面図 (S = 1/60)	87
第78図 T 38平・断面図 (S = 1/60)	88
第79図 第 1 水門 T 40平・断面図 (S = 1/60)	89
第80図 T 44断面図 (S = 1/100)	90
第81図 出土遺物(1) (S = 1/8)	94
第82図 出土遺物(2) (S = 1/8, 1/4, 1/2)	95

図 版 目 次

総社運動公園体育馆新築工事に伴う 試掘調査・立会調査	
第 1 図版 T - 1 西壁	8
第 2 図版 T - 3 東壁	8
分譲宅地開発に伴う立会調査	
第 3 図版 調査地遠景	9
第 4 図版 土層断面	9
体育馆建設に伴う立会調査	
第 5 図版 西側丘陵法面遠景	10
第 6 図版 西側丘陵法面近景	10
病院増築に伴う立会調査	
第 7 図版 基礎北壁	11
第 8 図版 基礎東壁	11
校舎増築に伴う立会調査	
第 9 図版 基礎部分 (東から)	12
第10図版 溝状落ち込み	12
市道拡幅工事に伴う確認・立会調査	
第11図版 中央トレーニング (河道?)	13
第12図版 東擁壁部分 (北から)	13
共同住宅建設に伴う確認調査	
第13図版 試掘擴土層断面	14
携帯電話基地局設置に伴う試掘調査	
第14図版 調査地近景 (東から)	18
第15図版 土層堆積状況 (北から)	18
店舗建設に伴う立会調査	
第16図版 調査地遠景	19
第17図版 措置層断面	19
井手地区の共同住宅建築に伴う試掘調査	
第18図版 出土遺物	21
東総社中原本線改良工事に伴う発掘調査 (三須地区)	
第19図版 牛神遺跡観音堂遺跡全景 (真上から)	27
第20図版 観音堂遺跡 C 区全景 (真上から)	27
第21図版 観音堂遺跡区画溝 (真上から)	27
第22図版 観音堂遺跡区画溝 遺物出土状況 (西から)	27
第23図版 中所遺跡 I 区全景 (南から)	27
第24図版 中所遺跡 I 区全景 (西から)	27
第25図版 中所遺跡 II a 区全景 (東から)	27
第26図版 中所遺跡 II a 区土壙 遺物出土状況 (南から)	27
岡山納整センター造成事業に伴う 市後遺跡群の発掘調査概要報告	
第27図版 西尾根の遺跡群	31
第28図版 牛塚古墳群	32
第29図版 製鉄炉 2	32
第30図版 緩傾斜地の遺構 1	32
第31図版 緩傾斜地の遺構 2	33
第32図版 土壙墓	33
第33図版 弥生の遺構と遺物	33
第34図版 牛塚古墳出墳出土遺物	34
第35図版 覆屋のある製鉄炉	34
真壁遺跡	
第36図版 防火水槽調査区	37
第37図版 防火水槽調査区・溝	37
第38図版 南擁壁部分	37
第39図版 増築建物基礎全景	37
第40図版 西端基礎部分検出状況	37
第41図版 東端基礎部分検出状況	37
吉備路観光センター建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査 (切土部分)	
第42図版 調査区全景 東から	39
第43図版 鍛冶炉 - 1 北から	39

第44図版 鍛冶炉－2・3全景南から	39	(平成9年度調査時)	79
第45図版 鍛冶炉－3北から	39	第81図版 第0水門と前面の状況	80
山田地区県営は場整備事業に伴う発掘調査(6)		第82図版 水門前面の状況(上から)	80
第46図版 砂子遺跡遠景(東から)	51	第83図版 第0水門(西から)	81
第47図版 1区全景(北から)	51	第84図版 第0水門前面(東から)	81
駅南区画整理事業に伴う発掘調査		第85図版 T28版築と敷石	83
第48図版 石原遺跡全景(東から)	53	第86図版 T27	83
第49図版 溝切り合い状況断面	53	第87図版 T30	84
第50図版 惣善寺遺跡 第1遺構面	54	第88図版 壓掘状溝	85
第51図版 惣善寺遺跡 第2遺構面	54	第89図版 T33	85
第52図版 調査区遠景	54	第90図版 第2水門	86
第53図版 土層断面	54	第91図版 T37	87
第54図版 土層断面	54	第92図版 T38	88
県営は場整備事業原地区に伴う		第93図版 T39	88
発掘調査概要報告(付・B区試掘調査)		第94図版 T40(南から)	88
第55図版 上：製鉄炉、下：東炉本体	55	第95図版 T40(北から)	88
第56図版 B3土層断面	57	第96図版 T44	90
鬼ノ城登城道および新水門の調査		第97図版 T45	90
第57図版 西門と列石遺構	62	第98図版 T44断面	90
第58図版 列石と裏込めの状況	62	第99図版 T42	90
第59図版 列石と砂防石垣	62	第100図版 T43	90
第60図版 T1断面	62	第101図版 T43	90
第61図版 T2	63	第102図版 第8区間高石垣	90
第62図版 T3焼土面	64	第103図版 T43	90
第63図版 石積の南面	65	第104図版 T46	90
第64図版 石積の西面	65	第105図版 T47	91
第65図版 T5	66	第106図版 T48	91
第66図版 T8	66	第107図版 T49	91
第67図版 壓掘状溝の下部	68	第108図版 T50	91
第68図版 壓掘状溝の上部	68	第109図版 第3区間高石垣	92
第69図版 T9・T10	68	第110図版 第3区間高石垣左側	92
第70図版 T18	70	第111図版 第3区間高石垣右側	92
第71図版 溝2の下部とT16	70	第112図版 盤	94
第72図版 T16	70	第113図版 木器6	96
第73図版 石垣1	71	第114図版 木器9	96
第74図版 石垣4	72	第115図版 有袋鉄斧18	96
第75図版 木製品出土状況(1)	76	第116図版 木器2	96
第76図版 木製品出土状況(2)	76	第117図版 木片	96
第77図版 木製品出土状況(3)	77	第118図版 木器3	96
第78図版 外側列石と敷石	78	第119図版 木片	96
第79図版 外側列石と版築	78	第120図版 木器4	96
第80図版 水門背面側の状況		第121図版 木器5	96

表 目 次

表1 平成12年度立会・確認調査一覧表	3	表3 調査区各区間の長さ	91
表2 発掘調査一覧表	3		

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2000年度文化財行政の概要

本市の文化財行政は教育委員会文化課文化財係が担当しており、課長、埋蔵文化財担当職員6人、事務担当職員1人の計8人が在籍している。文化財係では埋蔵文化財調査のほか、一般文化財の保護・啓発活動を執り行っている。

<組織>

教育長	秋田 皓二（9月30日退任）	主 事 高橋 進一
	乗田 交三（11月24日就任）	主 事 笹田 健一
教育次長	守長 建尚	主 事 松尾 洋平
文化課長	加藤 信二	
係 長	谷山 雅彦	[埋蔵文化財学習の館]
主 任	武田 恭彰	館 長 村上 幸雄
主 任	平井 典子	臨時職員 近藤 雅子
主 事	前角 和夫	臨時職員 田中 富子

埋蔵文化財

平成12年度の埋蔵文化財発掘調査は依然として続く経済活動の低迷を反映して、大規模な民間開発事業は減少したままである。しかし本市における積極的な企業誘致活動や小型店舗、住宅建築等の開発申請により遺跡の有無、発掘調査の必要有無などの照会作業は増加の一途をたどっている。

また、個人消費に対応したサービス産業の拡充は著しく、特に総社駅前線一帯の小規模開発は増加傾向にあり、市街地の宅地化に伴う共同住宅等の建築に伴うものが確認・立会調査の大半を占めている。本年度の発掘調査件数は7件である。内訳は公共事業であるほ場整備2件、区画整理事業に伴う発掘調査1件、市道建設に伴う発掘調査1件、観光施設建設に伴うものが1件であった。また、鬼城山整備事業に伴う発掘調査では西門に至る登城道、ならびに城壁の一部を確認調査した。

民間開発では久代のスズキ自動車株の岡山納整センター造成事業に伴う発掘調査が1件である。

こうした発掘調査の成果を一般に公開すべく現地説明会を2回開催している。1回目は久代の市後遺跡で、岡山納整センター内において発掘調査された牛塚古墳の説明会が12月3日に開かれた。5世紀代の古墳の構造や、被葬者の身につけた貝製の腕輪等が見学できるなど当日は200名の参加者を得た。2回目は平成13年2月24日に山田の砂古遺跡において説明会があった。6世紀代の製鉄遺跡・集落等が公開され、300名の参加者が熱心に遺跡の説明に聞き入った。

文化財保護

現在、史跡整備を進めている鬼城山では平成12年10月15日に第11回鬼城山整備委員会、つづいて平成13年3月1日に第12回鬼城山整備委員会を開催し、学識経験者・県教委ほかの各委員から、整備に関する御指導を頂いた。第12回の整備委員会ではかねてからの懸案事項である「史跡鬼城山環境整備基本計画」が承認され、13年度から開始される史跡整備の指針が示された。

また、鬼城山整備委員には新たに国立歴史民俗博物館の濱島正士氏に就任して頂き、古建築の見地から西門・角楼等の復元・設計の御指導を頂くことになった。

鬼城山の関連事業としては平成11年度に岡山県と総社市の合同調査が城内で実施され、岡山県の担

当者より7月8日に阿曾分館にて地元を対象とした報告と、9日に総社市総合福祉センターにてスライド報告会があった。9日には120名もの参加者あり、鬼城山に対する関心の高さが窺えた。

また、職員有志により制作された西門・角楼の精巧な復元模型が市役所玄関ロビー、総合文化センターに展示され、市民の関心を呼び、現在、総社市埋蔵文化財学習の館にて展示されている。

鬼城山遊歩道に設置している遺跡解説パンフレットは、今年度に11,769人以上の利用があり、平成8年度から平成13年3月現在まで利用総数は、すでに約64,000人を突破した。鬼城山来跡者は過去5年間の総計により、総社市の人口約57,000人をはるかに凌駕していることがわかる。

文化庁主唱の「歩き・み・ふれる歴史の道」中国ブロック大会が総社市、山手村、清音村の1市2村で実行委員会を立ち上げ、吉備路風土記の丘周辺において5月14日に実施された。当日は天候にも恵まれ244名の参加があった。

8月27日には岡山県立大学にて吉備路再発見シンポジウムが開催され、文化財係も当日スタッフとして参加した。基調講演やシンポジウムでは総社市を中心として吉備路の魅力あふれる歴史文化財が紹介され、また県立博物館の誘致も議題にあがるなど、盛況を博し600名以上の参加者があった。

今年度も岡山県立大学生を対象にした博物館実習が、総社市埋蔵文化財学習の館にて実施された。実習内容は出土遺物の土器洗い、接合、拓本など文化財の基本的な取扱い作業である。

学習の館の過去5年間の年間入館者数は、平成8年度365人、平成9年度601人、平成10年度633人、平成11年度487人、平成12年度826人を数え年々増加傾向にある。これは学習の館の知名度と共に、教育の場として活用されるケースが表れたとみられ、県内を始め遠隔地からの来館者も少なくない。

指定史跡の下刈り清掃は鬼城山、経山城、作山古墳、宮山墳墓群、栢寺廃寺、江崎古墳、秦原廃寺、について実施し、見学者の利便を計った。

史跡整備関連では第27回全史協中国地区協議会大会が7月13～14日に広島県千代田町で開催され、10月5日～6日には第35回全国史跡整備市町村協議会大会が長崎県長崎市で開催された。各大会では史跡整備の現状や事例が紹介され、それぞれ職員2名を派遣している。

10月には本市の文化財専門委員の研修として熊本県の装飾古墳館、古代山城の鞠智城等を視察した。特に鞠智城は近年史跡整備が著しく進展し、鬼城山の整備を考える上でも参考となるものであった。

貸出遺物の主たるものを見ると下記のようなものがある。

- ・吉備路郷土館「吉備の古代山城－鬼城山・大廻古廻山城発掘パネル展」
鬼城山写真と模型の貸出。
- ・鳥取県立博物館 12年度特別展「むきばんだー弥生の王国ー」
宮山遺跡出土特殊器台レプリカの貸出。
- ・大分県歴史博物館 12年度特別展「古代王権への道－再発見九州島－」
宮山遺跡出土特殊器台レプリカの貸出。
- ・岡山県立博物館 12年度特別展「あおによし－奈良国立文化財研究所収蔵 平城京跡出土品展－」
三須河原遺跡墨書須恵器・土師器の貸出。

最後に、総社市の発掘調査数の増加と反して、著しく報告書の刊行が遅滞している。報告書の刊行をもって発掘調査の完了という原則からすれば、整理期間や整理作業の組織的な取り組みが今後の課題である。

(松尾)

表1 平成12年度立会・確認調査一覧表

番号	所 在 地	調 査 原 因	種別	調 査 期 間	調 査 所 見	報告頁	担当者
1	井手972	分譲地造成	立会	5/29	遺構・遺物なし	5	谷 山
2	井手606-1	事務所建設	立会	6/30	遺構・遺物なし	6	谷 山
3	三輪	体育館新築工事	立会	8/8随時	遺構・遺跡なし	7	平 井
4	中原字馬場上	分譲地開発	立会	8/18	遺物少しあり	9	平 井
5	秦540	体育館建設	立会	8/31	遺構・遺物なし	10	谷 山
6	門田78-1	病院増築	立会	10/3	遺構・遺物なし	11	谷 山
7	美袋	下水道工事	立会	10/12	遺物なし	-	平 井
8	富原422	校舎増築	立会	10/19	遺構あり?	12	谷 山
9	久代	市道拡幅工事	立会	10/24, 11/2	新本川の氾濫原	13	谷 山
10	井尻野38外	共同住宅建設	確認	11/10	高梁川の氾濫原	14	高 橋
11	中央一丁目4-104	共同住宅建設	立会	11/10	客土中で掘削止まる	-	高 橋
12	三須	下水路改良工事	立会	11/15外	遺物あり	15	平 井
13	刑部306	携帯電話基地局設置	確認	1/9	遺構・遺物なし	17	前 角
14	総社三丁目	店舗建設	立会	1/16	遺構薄い	19	高 橋
15	井手560-3外	共同住宅建設	確認	3/5	近～現代の散布地	20	前 角

表2 発掘調査一覧表

	遺 跡 名	調 査 原 因	頁
A	東田遺跡、觀音堂遺跡、牛神遺跡、中所遺跡	東総社中原本線改良事業	23
B	市後遺跡	岡山納整センター造成事業	29
C	真壁遺跡	工場増築	35
D	天満遺跡	吉備路觀光センター建設	38
E	砂子遺跡	県営ほ場整備事業	40
F	石原遺跡、下川田地区惣善寺遺跡	駅南区画整理事業	52
G	中組遺跡	県営ほ場整備事業	55
H	鬼城山	史跡整備事業	58

第2図 立会・確認調査位置図 ($S=1/80,000$)



2. 立会および確認調査の概要

分譲地造成工事に伴う立会調査

所在地 総社市井手972

調査期間 平成12年5月29日

調査概要

今回の調査地は国道180号線から南東に清水へ入る、市道近くである。この近辺では、国道429号バイパス工事が300m東で行われ遺跡の存在が明らかになっている。しかし、遺跡の広がりは主にバイパス東側にあり、西側は低位部になっていくようで、遺構は少ないと考えられる。

調査地から、墓石が出土しているとの通報があり、現地を調査することとした。現地にあった墓石は表面に戒名が刻まれており、現地で聞くと畦近くにあったものを工事で移動したとのことであり、近接地に墓地が存在することから、この墓地の広がりを示すものか、何らかの要因で移動したものと考えられた。そのため、現場の責任者に墓石であることから、取り扱いについて配慮する必要があることを伝えた。

今回の工事は、主に造成が目的であり、工事も擁壁部分であった。立会ではこの部分を調査したが、掘削が浅く表土下の床土下部までであったため、遺跡の存在を確認することはできなかった。

その後、この地で再び掘削が行われている通報があり、現地調査を行った。用地中央部分に大きな穴が掘削されていたため、断面観察を行ったが、現地表から55cmで礫層となり、その下層は砂層で、遺物の混入は認められなかった。

(谷山雅彦)



第3図 調査地位置図 (S=1/5,000)

事務所建設に伴う立会調査

所在地 総社市井手606-1

調査期間 平成12年6月30日

調査概要

調査地は市街地の東部に位置し、商店が急速に建設されている場所になる。ここでは、市道総社駅前線の工事に伴い遺跡の調査が行われている。この遺跡は中世の遺構を中心で、周辺への広がり明確ではなく、工事時に立会調査を行っている。

今回の調査地は、既に造成が終了しており、また建設される建物が用地の南西部と市道からやや離れるが、遺跡範囲に入る可能性もあったので、基礎工事の掘削時に立会することとした。

工事は、比較的浅いもので、地中梁部分の掘削は表土下の旧水田層で止まっている。また柱部分の掘削はこれよりも下がるが、遺物・遺構は認められなかった。今回は、建物の構造から掘削及びその深度が限定されたためか、遺跡の確認はできなかった。(谷山)



第4図 調査地位置図 ($S = 1/5,000$)

総社運動公園体育館新築工事に伴う試掘調査・立会調査

所在地 総社市三輪

調査期間 2000年8月8日, 2000年12月～2001年3月随時

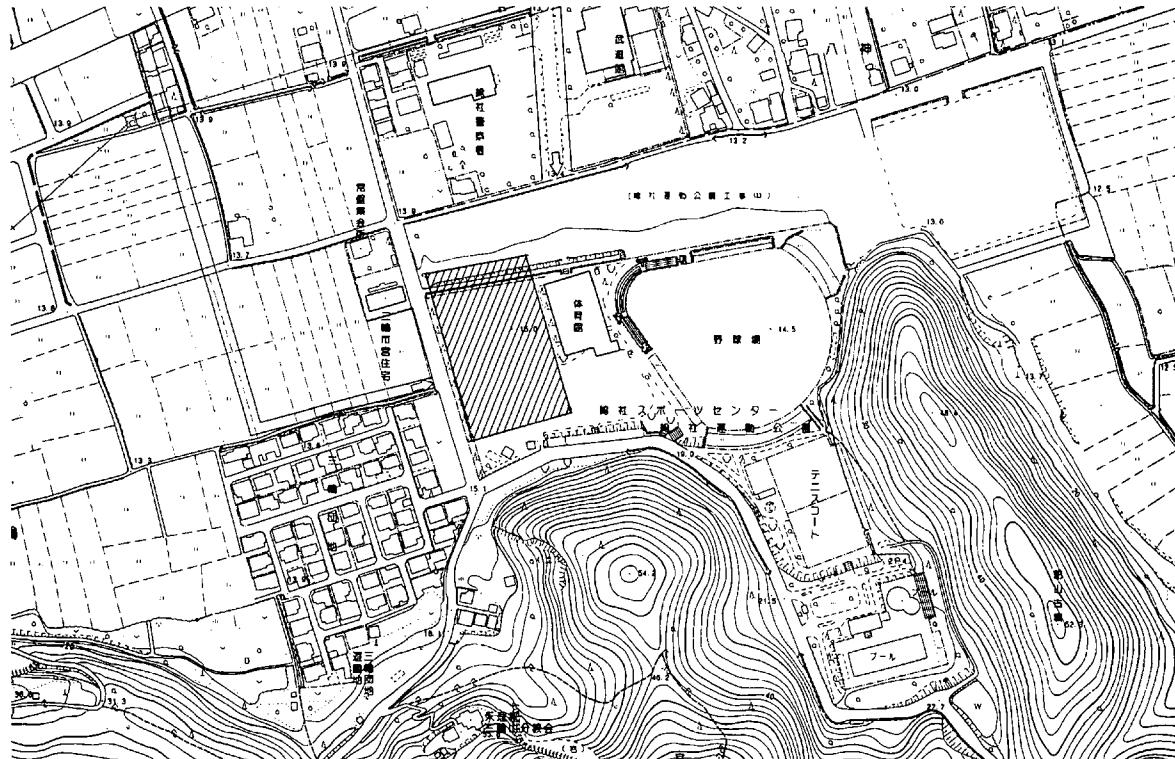
調査概要

近年、体育施設は競技スポーツだけでなく、スポーツ情報の収集や講座の受講、健康保持増進のトレーニングなど、年代を問わず多様なニーズが求められている。そのような中、市民のニーズに応えるには、既存の総社運動公園体育館では面積も狭く老朽化も進んでおり、かねてから要望のあった新体育館の建設が具体化した。

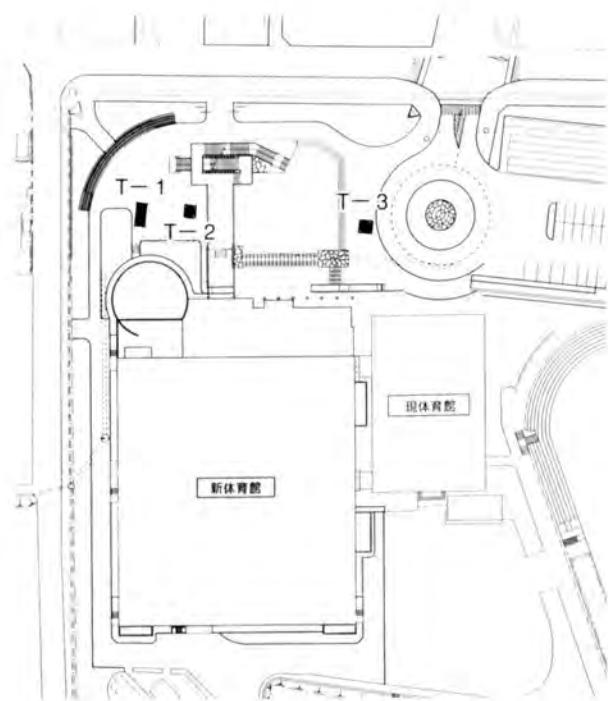
当該地は、地形から低位部と考えられ、北東約200mに位置する武道館建設の際にも遺構は確認されず低位部の様相を呈していたことから、遺構は存在しないものと考えられた。しかし、今回の工事に伴う土質のボーリング調査によると、2m前後の盛土下に2～4mと厚く堆積した沖積粘性土層中の一部に有機質土層がみられ、この層が駅南区画整理事業に伴う発掘調査で発見された屋毛手遺跡、惣善寺遺跡、中通遺跡等でみられる縄文時代の包含層の可能性もあるため、事前に試掘調査を行い、遺構等が確認された場合は発掘調査を実施することとした。

有機質土層は、建設予定地のほぼ西半にのみ存在するが、建設予定地が現在のグランドにあたり市民の利用多いため、まずグランドのフェンス北側にトレーニングを入れ、ここで有機質土層が確認できなかった場合は、グランド内にトレーニングを掘削することにした。

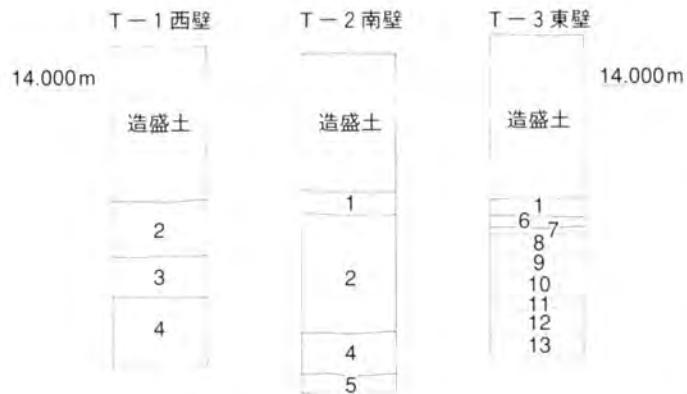
トレーニングは3本掘削したがいずれも低位部の様相を呈し、問題となった有機質土層はT-1及びT-2において地上下3m付近で確認されたが、遺物はまったく検出されず、堀り上げた土も精査したが、自然木の破片が若干確認されたにすぎない。



第5図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第6図 トレンチ配置図 ($S=1/2,000$)



第7図 ($S=1/80$)

グランド内でも同様の状況と考えられたが、基礎の地中梁が盛土を越えて掘削されるため、工事に入った段階で地中梁部分を立会調査することとした。

工事中隨時立会を行なったが、試掘トレンチの結果と同様、遺構遺物は発見されず、土層からも低位部と考えられた。(平井典子)

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 暗青灰色土
(旧耕作土) | 8. 暗灰色粘土 |
| 2. 淡灰茶色砂 | 9. 淡灰褐色粘土 |
| 3. 青灰色粘土 | 10. 茶灰褐色粘質土
Mn多 |
| 4. 黑灰色粘土 | 11. 暗灰黑色粘質土
Mn多 |
| 5. 黑灰色砂質土 | 12. 青灰色粘質土
Mn多 |
| 6. 淡灰茶色砂
(2層に同じか) | 13. 暗青灰色粘質土 |
| 7. 暗灰色粘質土 | |



第1図版 T-1 西壁



第2図版 T-3 東壁

分譲住宅地開発に伴う立会調査

所在地 総社市中原字馬道上884-1, 885-1, 886-3

調査期間 8月18日

調査概要

9区画の分譲住宅地開発が計画された。当該地は現在の高梁川から東へ約200mの地点に位置し、高梁川の氾濫原にあたるものと考えられた。しかし、申請地の南には古い集落がみられ、中世以降の遺跡が確認される可能性もあることから、開発地の一画に平面8m×2.6m、深さ2.5mの防火水槽を掘削する際に立会調査を実施することとした。

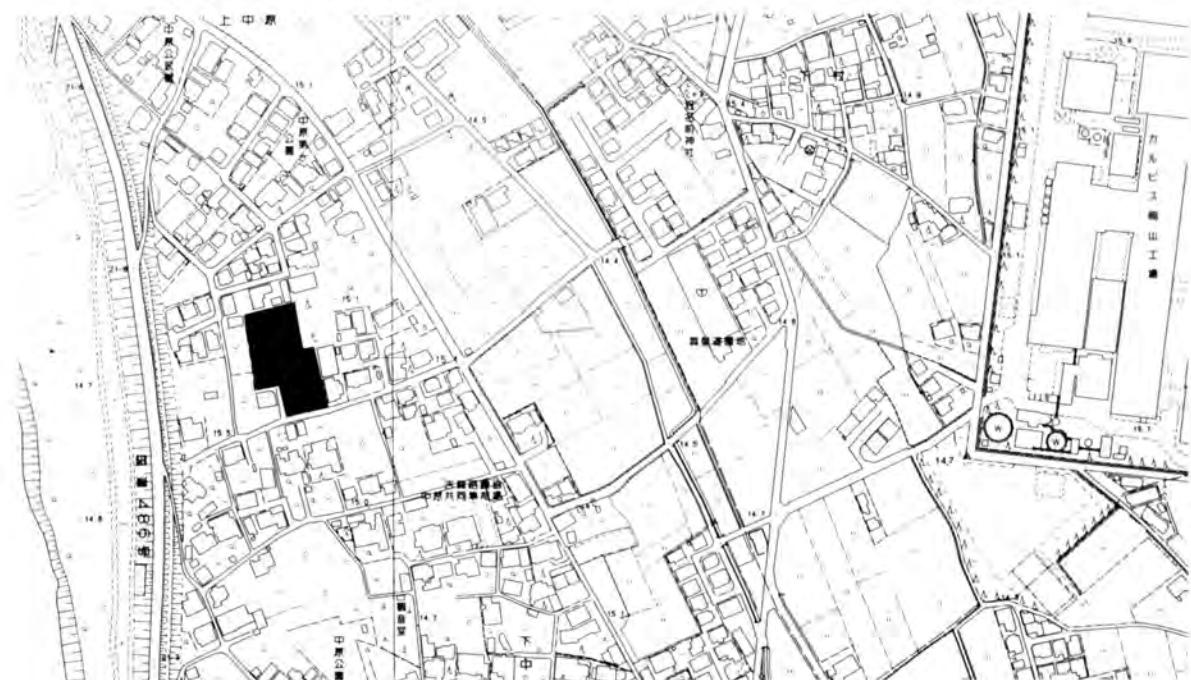
砂質の強い耕作土層の直下には、ほぼ純粋な砂層と厚さ20~30cmの砂礫層が互層になって厚く堆積していた。約2.5mの深さまでこの状況は変わらず、掘削する先から壁が崩れ、土層の固化はしえなかつた。遺物はほとんど認められなかったが、吉備型甕の小片が出土している。この遺物に磨滅がみられないことと南側の古い集落の存在から、当該地が高梁川の氾濫原ではあるが、南に微高地が存在する可能性もあり、今後の開発に留意していきたい。(平井)



第3図版 調査地遠景



第4図版 土層断面



第8図 調査地位置図 (S=1/5,000)

体育館建設に伴う立会調査

所在地 総社市秦540

調査期間 平成12年8月31日

調査概要

この地は、総社市西部にあたり東西に延びる主尾根から南に舌状に延びる尾根の東斜面にあたる。ここでは既に谷を造成して体育館が建てられていた。今回はその建物を撤去して、新しい体育館を建設するもので、基本的には既存の造成地での工事であった。今回新たな掘削が行われたのは、西側の丘陵斜面で法面を擁壁で積むためのものである。北部は全て地山であり、遺構は認められなかった。また、南部は淡黒色の堆積土が認められたが、谷地形の堆積と考えられる。遺物なども認められなかった。

(谷山)



第5図版 西側丘陵法面遠景



第6図版 西側丘陵法面近景



第9図 調査地位置図 (S=1/5,000)

病院増築に伴う立会調査

所在地 総社市門田78-1

調査期間 平成12年10月3日

調査概要

調査地は市街地の北部に位置し、吉備線と国道180号線に挟まれた場所になる。この地周辺では遺跡の存在は明らかではない。工事の規模が大きく基礎が深いことから工事時に立会調査を行うこととした。立会の結果、盛土が140cmと厚いことから田面が低かったことが判明した。また、基礎工事で基盤層まで掘削するのが柱部分のみで梁の掘削は旧水田層で止まった。基盤層の下層もグライ化しており、地下水位が高い場所であり、包含層なども認められなかった。(谷山)



第7図版 基礎北壁



第8図版 基礎東壁



第10図 調査地位置図 (S=1/5,000)

校舎増築に伴う立会調査

所在地 総社市富原422

調査期間 平成12年10月19日

調査概要

この地は総社市西部に位置し、高梁川に近接した地区である。かつて同じ小学校のプール建設時にも工事時に立会調査を実施したが、遺跡の存在は確認されていない。しかし、この近辺は遺跡の分布の状態が不明であるため、工事など機会があれば立会を実施する必要がある。このため、今回も工事時に立会調査を実施することとした。調査の結果、造成土が厚く基礎工事は堆積層20cm程度の掘削で止まったため、遺構の存在を明確にできなかった。しかし、南東隅で溝状の落ち込みがあり、時期は不明だが南部には遺跡が存在する可能性がある。

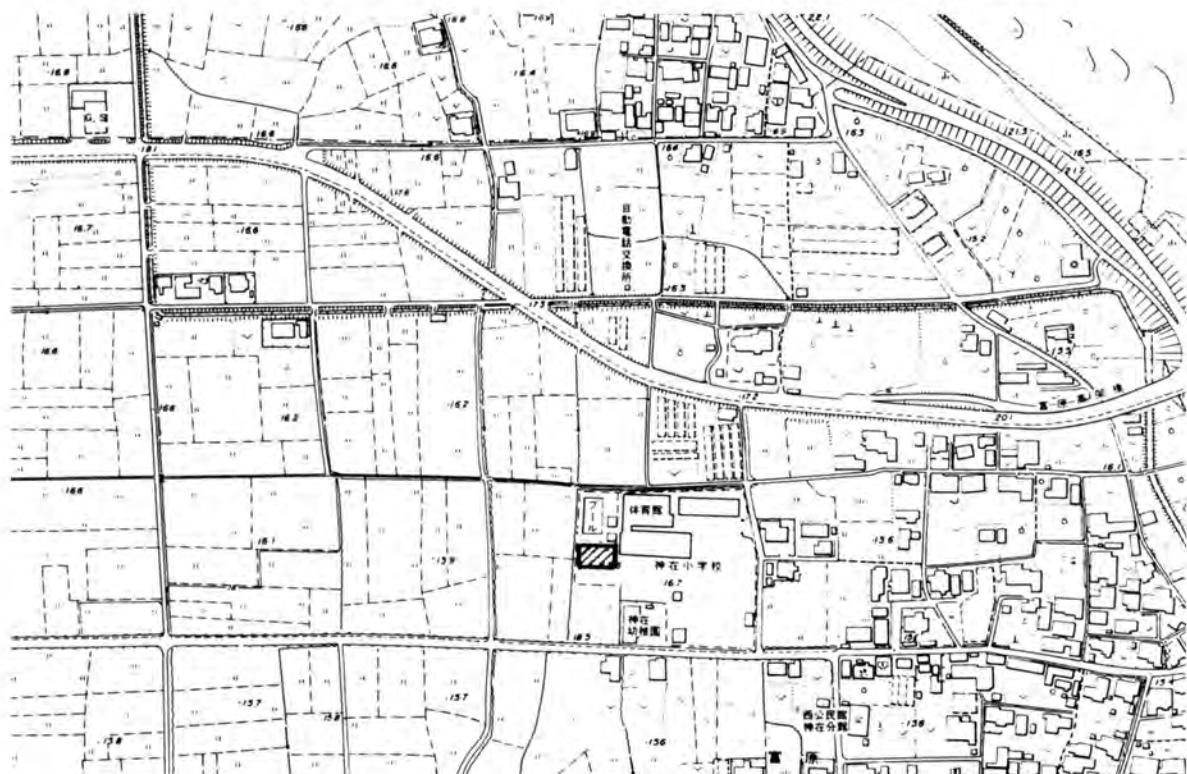
(谷山)



第9図版 基礎部分（東から）



第10図版 溝状落ち込み



第11図 調査地位置図 (S=1/5,000)

市道拡幅工事に伴う試掘・立会調査

所在地 総社市久代

調査期間 平成12年10月24日・11月2日

調査概要

本調査地は、総社市西部に位置し、東西に流れる新本川の北にあたる。工事は新本川南の市後地区に車の納整センター建設が計画され、その進入路として道路が拡幅されることとなった。工事に先立ち遺跡の有無を確認する試掘調査を重機を用いて実施した。その結果、この場所は予定地中央付近から南は大きく傾斜し、砂が堆積する新本川の氾濫地であることが明らかになった。また、その北は安定した基盤層があるものの粘質が強く、また遺構も確認できなかった。工事時の立会においても遺構は認められなかった。

(谷山)



第11図版 中央トレンチ（河道？）



第12図版 東擁壁部分（北から）



第12図 調査地位置図 (S=1/5,000)

共同住宅建設に伴う確認調査

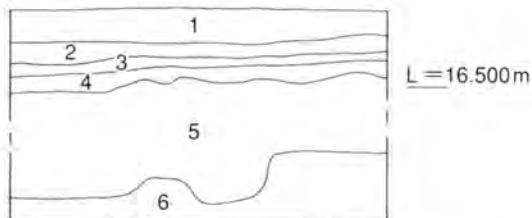
所在地 総社市井尻野38番地ほか

調査期間 2000年11月10日

調査概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴う事前の確認調査として実施した。調査地は、総社市街地の西方に位置しており、現堤防の東側に近接する。

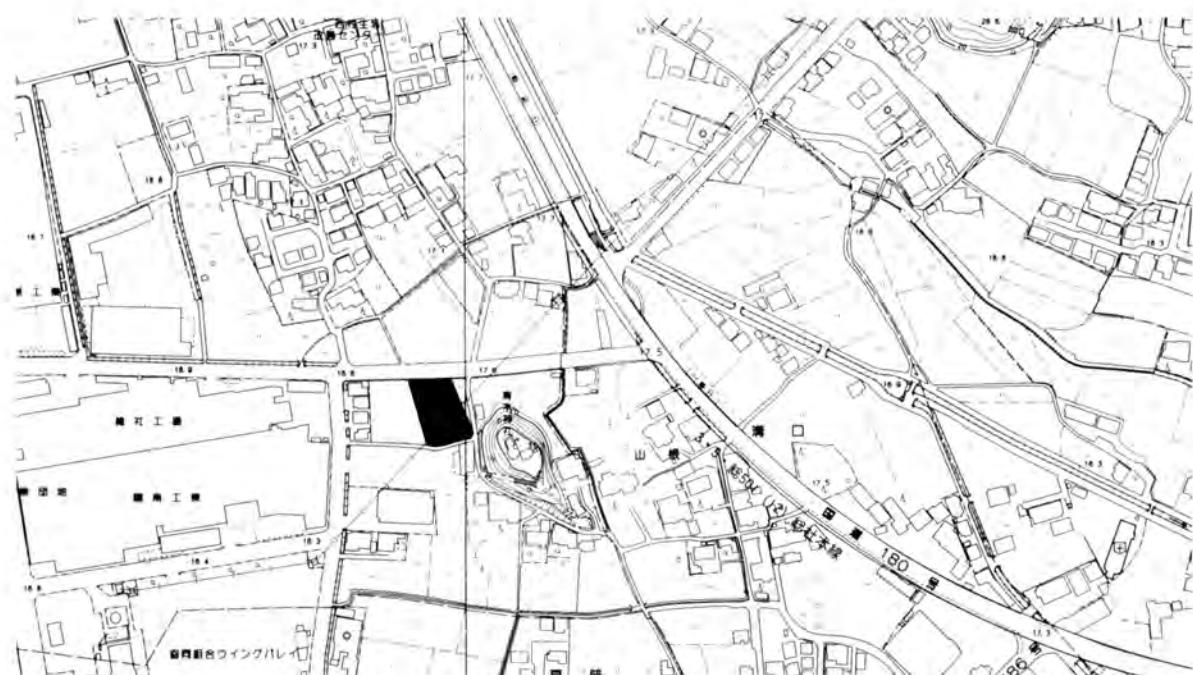
調査対象地の近辺では、発掘調査が行なわれておらず、遺跡・遺構の有無が不明であった。調査は、共同住宅の建設部分に重機によって試掘場を掘削した。その結果、調査地の基盤層は砂層であり、その上に茶褐色土層と砂質の土層が交互に堆積している状況が明らかになった。これらのことより、本調査地には、遺構は存在せず、高梁川の氾濫原であったと考えられる。
(高橋)



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 耕作土 | 2. (淡) 灰 (茶) 色土層 |
| 3. (淡) 茶 (灰) 褐色土層 | 4. 淡茶灰 (褐) 色砂質土層 |
| 5. (暗) 茶灰褐色土層 | 6. 淡灰 (黄茶) 色砂層 |

第14図 土層断面 ($S=1/40$)

第13図版 試掘場土層断面



第13図 調査地位置図 ($S=1/5,000$)

作山下水路改良工事に伴う立会調査

所在地 総社市三須

調査期間 2000年11月15・17・20日，12月5・8・15・16・18日

調査概要

作山古墳の前方部南東側に位置する集落において、生活排水用の下水路が浅く狭いため、少量の降雨でも水があふれることから、地元より付け替えの要望が上がっており、今年度工事に着工することとなった。

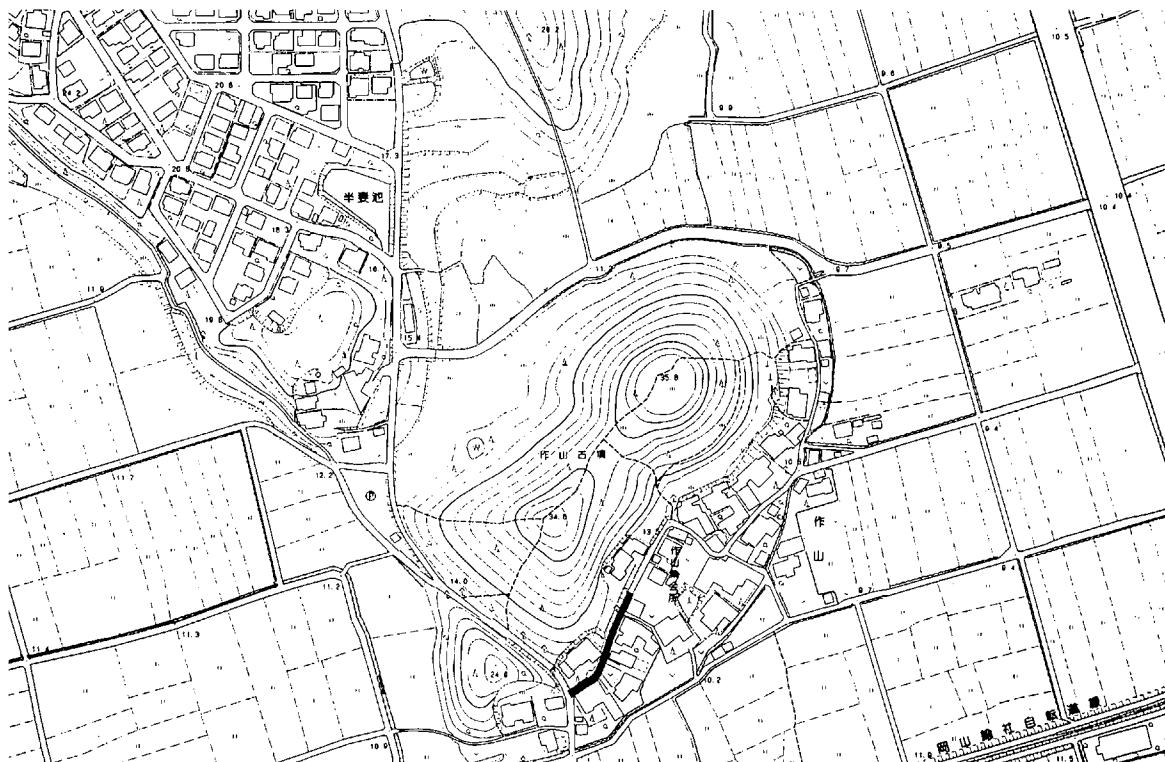
新しい下水路は一部上水道にかかるため、上水道のパイプ付け替え工事も実施することになったが、下水路、上水道ともに幅約80cm、深さ50cm～1mを掘削する予定であった。いずれも現在の道路内で納まり、この付近は家屋等により相当改変を受けているため、作山古墳の遺構に新に影響をおよぼすものではないと考えられたため、工事時に立会調査を行なうこととした。

図示した土層は下水路北壁の一部であるが、図示していない箇所、上水道部分もほぼ同様で、道路造成土の下部は流土、地山からなり、攪乱を受けている箇所も多い。また古い時期の地山整形痕跡は認められなかった。

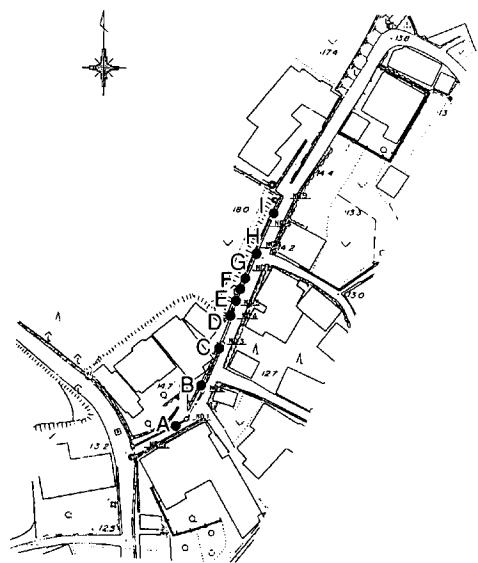
ここで特筆すべき事は、E～G付近に暗黒灰色の遺物包含層が厚く堆積することであり、この層から弥生時代中期後葉の土器が出土している。作山古墳周辺の田面は低く、現在の水田地帯に集落が存在した可能性は少ない。また、当該期の遺跡は丘陵上に分布が多いことからも、これらの遺物を廃棄した集団の生活拠点が、作山古墳が造られた独立丘陵上にあった可能性は高い。

以下、出土遺物について若干の説明を加える。

1～7は壺形土器である。1は、頸部に突帶が数条施されるもので、残存状態は悪いが口縁部と突



第15図 調査地位置図 (S=1/5,000)

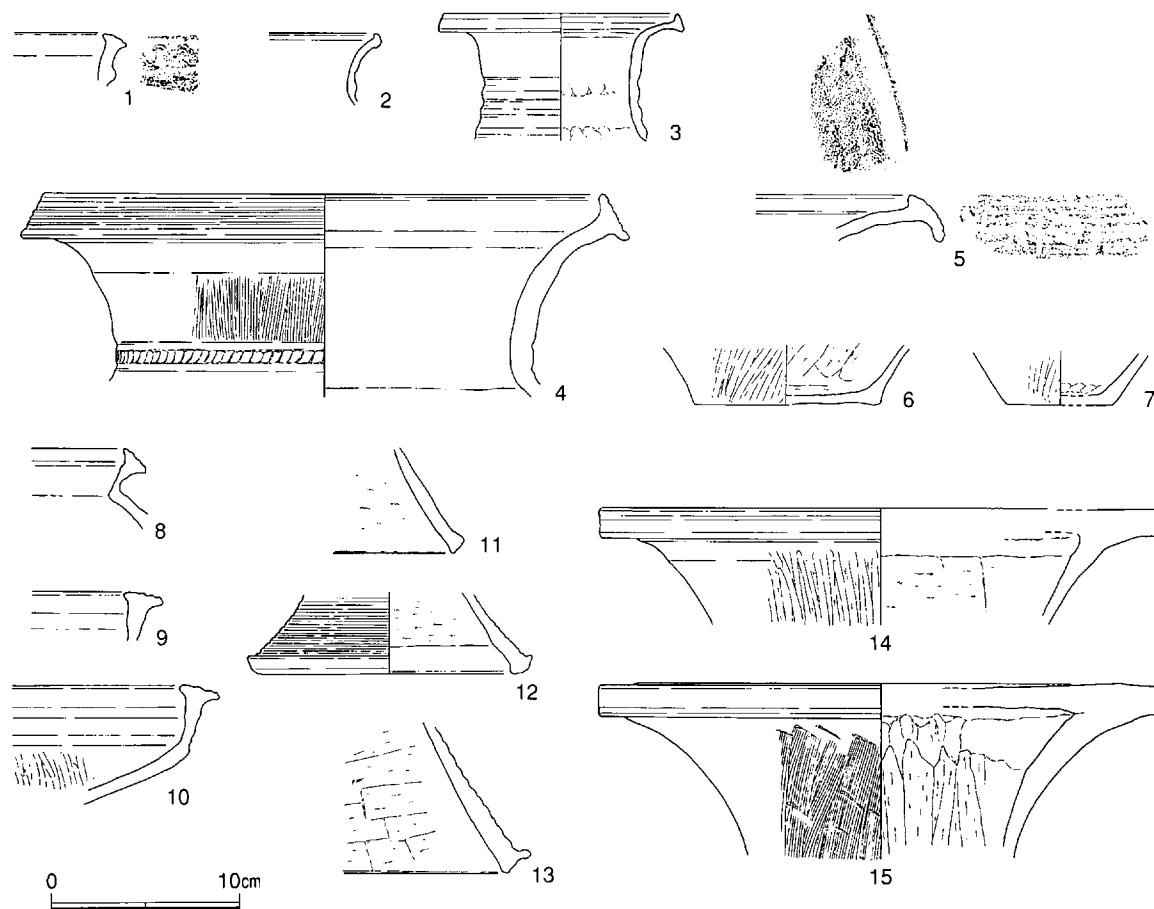


第16図 土層位置図

G.L.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	G.L.
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	2	4	4	6	6	7	7	8		
	3	5	5		7		8			

1. 道路造成土 3. 橙褐色土 5. 灰茶色土 7. 暗黒灰色土（弥生中期包含層）
2. 橙灰色 4. 暗灰橙色土 6. 暗灰褐色土 8. 黑灰色土

第17図 下水路北壁土層柱状図



第18図 7層出土遺物 (S=1/4)

携帯電話基地局設置に伴う試掘調査

遺跡名 遺跡なし

所在地 総社市刑部306番地

調査期間 平成13年1月9日

調査概要

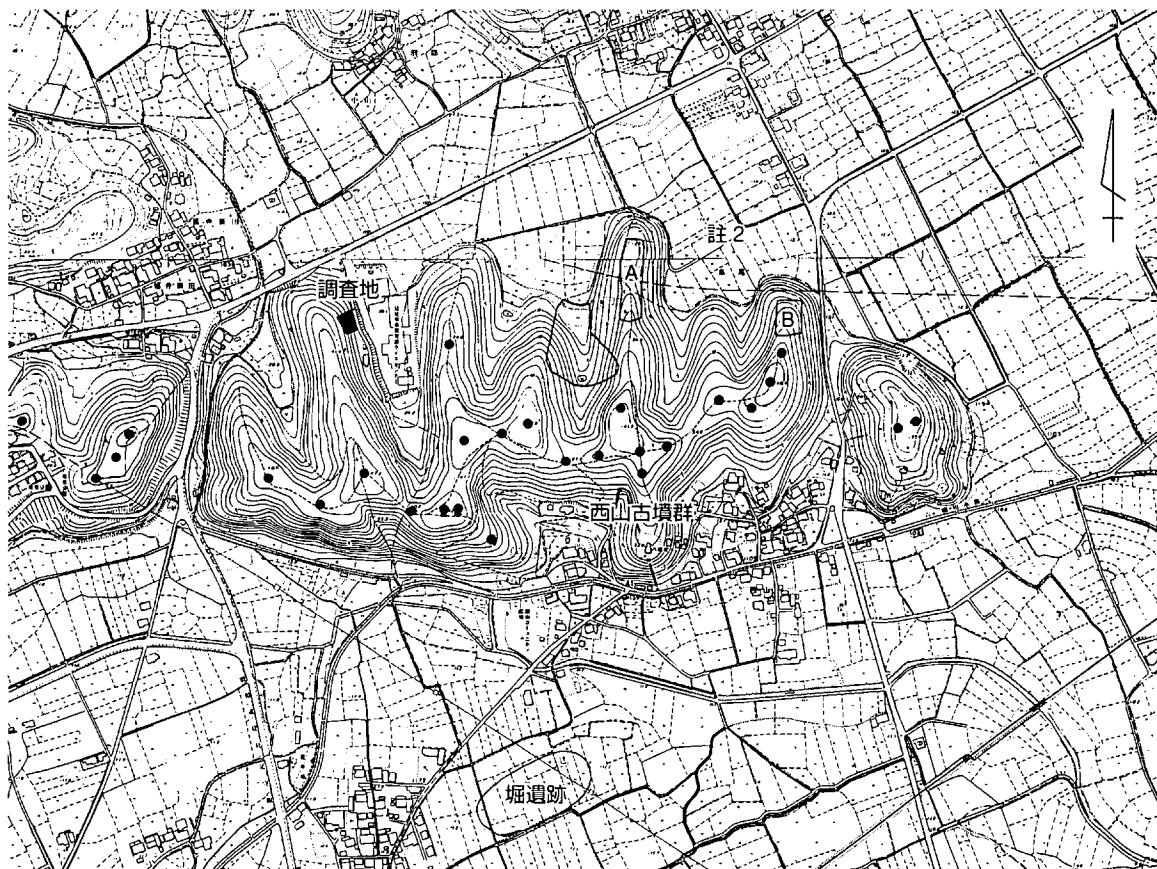
(調査経緯)

調査は、携帯電話基地局の設置にともない、事業者が文化財の所在確認を行ったことによる事前審査である。

調査地は、総社平野をすぐ南に望む、東西に細長く伸びた低丘陵上にあり、その稜線上には数多くの古墳の所在が知られている。しかし、南にむかって丘陵はあまり派生しておらず、その斜面傾斜も急で、真下に河道も流れている。対して北に向かっては多くの小尾根を派生させており、またその尾根線も平坦部の多く認められる地形となっている。

周辺での調査例はほとんどなく、調査地の谷ひとつとなる小尾根とその谷部において遺跡が確認され^(註1)、さらに東の小尾根で中国横断自動車道建設にともない古墳や弥生集落の発掘調査が実施されている^(註2)。

調査地の小尾根には、集落遺跡、古墳群、いずれもこれまで知られていなかったが、まったく存在しないという断定もできなかつたことから、事業の実施にあたって、試掘調査を実施することとしたものである。



第19図 調査地位置図と遺跡分布図 (S=1/10,000)

(遺構・遺物)

調査は、重機を用いてのトレンチ調査で、開発面積がさほど広いものでないことから、開発地中央部に1本のトレンチを設定した。トレンチは小尾根に直交している。

調査前の状況は、段状の平坦面が等高線に添うように数段認められており、かつての畠地と推測された。幅が非常に狭いことから急な傾斜地である。対して丘陵頂部は平坦面となり、今回は開発範囲外であるが、踏査を行ったものの墳丘となるような高まりや遺物は確認できなかった。



第14図版 調査地近景（東から）



第15図版 土層堆積状況（北から）

(まとめ)

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。土層断面の観察からも平坦地の造成に表土層が確認される以外、いずれも地山かその崩落土、しかもかなり古い時期の堆積土と判断した。また、調査地がやや丘陵頂部より下がることから、上方に集落の存在する痕跡もうかがうことができなかった。

なお、調査地に接する山道は、さきの大戦において軍部が武器庫を設置するために敷設されたものといわれ、開発範囲の北端において天井の崩れ落ちた防空壕跡とみられる落ち込みも残されていた。

（前角和夫）

註1 谷山雅彦「残土置場建設に伴う確認調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』8 1998）

2 植 真治・柴田英樹「第7章 西山遺跡・西山古墳群」1（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 1997）

店舗建設に伴う立会調査

所在地 総社市総社三丁目字十王堂東961-7, 968-1, 968-2, 969-1, 969-3

調査期間 2001年1月16日

調査概要

本調査は、青山商事株式会社による店舗建設に伴う立会調査として実施した。

調査地は総社市街地の南端に位置しており、南接する総社東中学校体育館建設に伴う発掘調査の結果等より、遺構の密度は薄いと推定された。調査の結果、土層の基本的な層序は、約40cmの真砂土客土～旧耕作土～灰褐色砂質土層～茶灰褐色土～暗灰色砂層の順であった。いずれの層も砂質が強く、微高地として安定していないことが推定された。



第21図 土層断面図
(S=1/40)
(高橋)



第16図版 調査地遠景



第17図版 措置層断面



第20図 調査地位置図 (S=1/5,000)

井手地区の共同住宅建築にともなう試掘調査

遺跡名 遺跡なし

所在地 総社市井手560-3ほか

調査期間 平成13年3月5日

調査概要

(調査経緯)

調査は、共同住宅の建設にともない、施工業者が文化財の所在確認を行ったことによる事前審査である。

調査地は、総社宮のある旧街道（松山往来）筋から約200m南で、市街化区画整理事業地区の東端に面している。調査地に接して南北に走る県道があり、街道筋から調査地のすぐ北側まで住宅地が広がるが、調査地以南では井手の伝知行所跡付近を除いてはかつての水田地帯である。しかし、この県道は山手村との往来道として古くより存在していたものと推測される。

小字は小沼。

周辺での調査は、東約200mの総社東中学校舎増築等にともなう早溝遺跡の発掘調査が実施された^④以外、試掘あるいは立会調査等あまり多くない。早溝遺跡では、弥生～近世までの溝群の調査であり、集落の縁辺部と推測される。また早溝遺跡のすぐ北の共同住宅地においては古代以降の耕作地としてさらに低地部となっているが、西側に向かって高くなっているが、遺跡の所在する可能性が高いと思われた（調査番号98115）。その地点においては紳士服等販売の出店計画が進行しており、事前審査も実施され、立会予定となっていることから詳細な状況が確認できようか。また、西に2ヶ所、これは工事中に遺物が出土したといわれるもので、その遺物の一部が教育委員会に寄贈されている。弥生後期の土器を主としていたと思われるが、保管管理システムの不備から実見できておらず、詳細は不明である。なお、調査地の東に接し商業店舗があるが、1階建てのため建築確認申請の合議とはならず、調査は行われていない。

建築は、2階建ての共同住宅であり、設計GLよりマイナス1mまでの地盤改良



第22図 調査地位置図 (S=1/5,000)

が行われ、鉄骨基礎はマイナス70cmという内容であった。

事前審査の結果、工事の掘削深度が旧水田面よりわずかに深くなることや、これまでの調査例や小字名から遺跡の存在する可能性が低い地点と推測されるものの周辺を含めて充分な調査がなされていないことから、試掘調査を実施することとした。

(遺構・遺物)

調査は、1m角のトレンチを1ヶ所設定した。

層位は、I層～IV層を確認し、I層がかつての造成土、II層が旧水田床土でIII層にその影響が認められた。全体的に土層断面観察からは低湿地状に近い印象を受け、III層中からは湧水が生じる。

遺構は、検出されなかった。

遺物は、I～III層中より近世～近代の陶磁器・瓦が出土している。陶磁器は、見込みに蛇ノ目釉ハギのある伊万里・高台付皿片、備前系擂鉢片、唐津系小碗片、鉄釉の小徳利片、土管が植木鉢片である。瓦は、燐系と土師質系の平瓦片である。

(まとめ)

調査の結果、遺構はなく、遺物も近世以降のもので、かつ少量であることから混入と考えられ、また土層断面の観察からも遺跡は存在しないもの判断した。

小字や、40年ほど前に水田から宅地への変更、湿気が非常に多いとの聞き取りからも、調査地は低地部にあたるものと考えられる。この低地部は早溝遺跡の南に推定される旧河道に続くものと推測され、早溝遺跡はこれに沿って左岸側に展開し、さきの店舗出店予定地まで広がるものか、新たな遺跡が発見されるものか。いずれにせよ北西から南東のラインに沿った方向で、調査地が低地部、東へ向かい早溝遺跡、つづいて低地部（耕作地）、西へ向かい散布地、つづいて低地部という地形復元が可能であろうか。

（前角）

註 武田恭彰・高橋進「早溝遺跡」（『総社市埋蔵文化財調査年報』3 1994）

I	茶褐色～灰褐色 粘質シルト
II	青灰色粘土
III	灰褐色粘質土
IV	淡茶褐色粘質土

第23図 土層模式図 (S=1/40)



第18図版 出土遺物

3. 発掘調査の概要

東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）

遺跡名 東田遺跡、観音堂遺跡、牛神遺跡、中所遺跡

所在地 総社市三須

調査期間 2000年4月2日～2001年3月31日

調査面積 5,300m²

調査概要

(調査経緯)

昨年度の継続事業として三須地区の発掘調査を実施し、調査中であった現道の北部分（B区）から着手した。

当初、現道部分の調査は除外していたが、土壤の置き換えをすることになり急遽調査を行なうことになった。しかし、この道路は現在も生活道として使用されているため、現道の南部分（C区）の調査が終了した後、仮設道を付け、調査に入ることとなったが、工事の関係上2回に分けての調査となつた。まず国道429号線に接する現道部分東半を手掛け、その後家屋の移転が終了した中所遺跡I区の調査に入り、終了後現道部分西半の調査を実施した。終了後一時調査を中断し、家屋の移転を待つて1月22日より中所II区の調査に入ったが、着手が遅れたため一部来年度に繰り越すことになった。

(調査概要)

東田遺跡（B区）

昨年度に引き続き調査を実施したが、遺構の密度はきわめて低く、東半は微高地の下がりが確認されたが、遺構としては土壙等がわずかにみられるにすぎない。西半も地形は西に向かって上がっていくにもかかわらず、柱穴や土壙がまばらに検出されたものである。

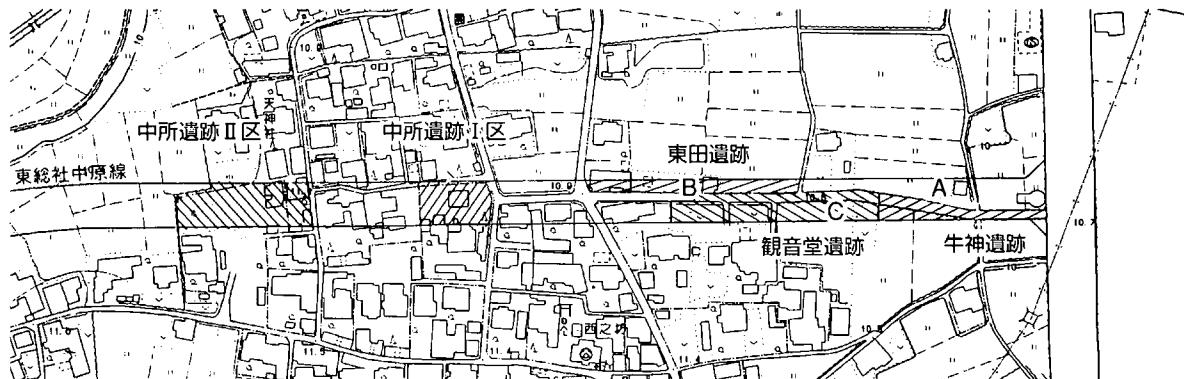
遺物は、微高地の斜面から古代の瓦、土師器、須恵器、弥生土器等が出土しているが、弥生土器以外は量的に少ない。また、西半からの出土遺物もきわめて少ない。

牛神遺跡（A-C区間現道部分、C区・東端）

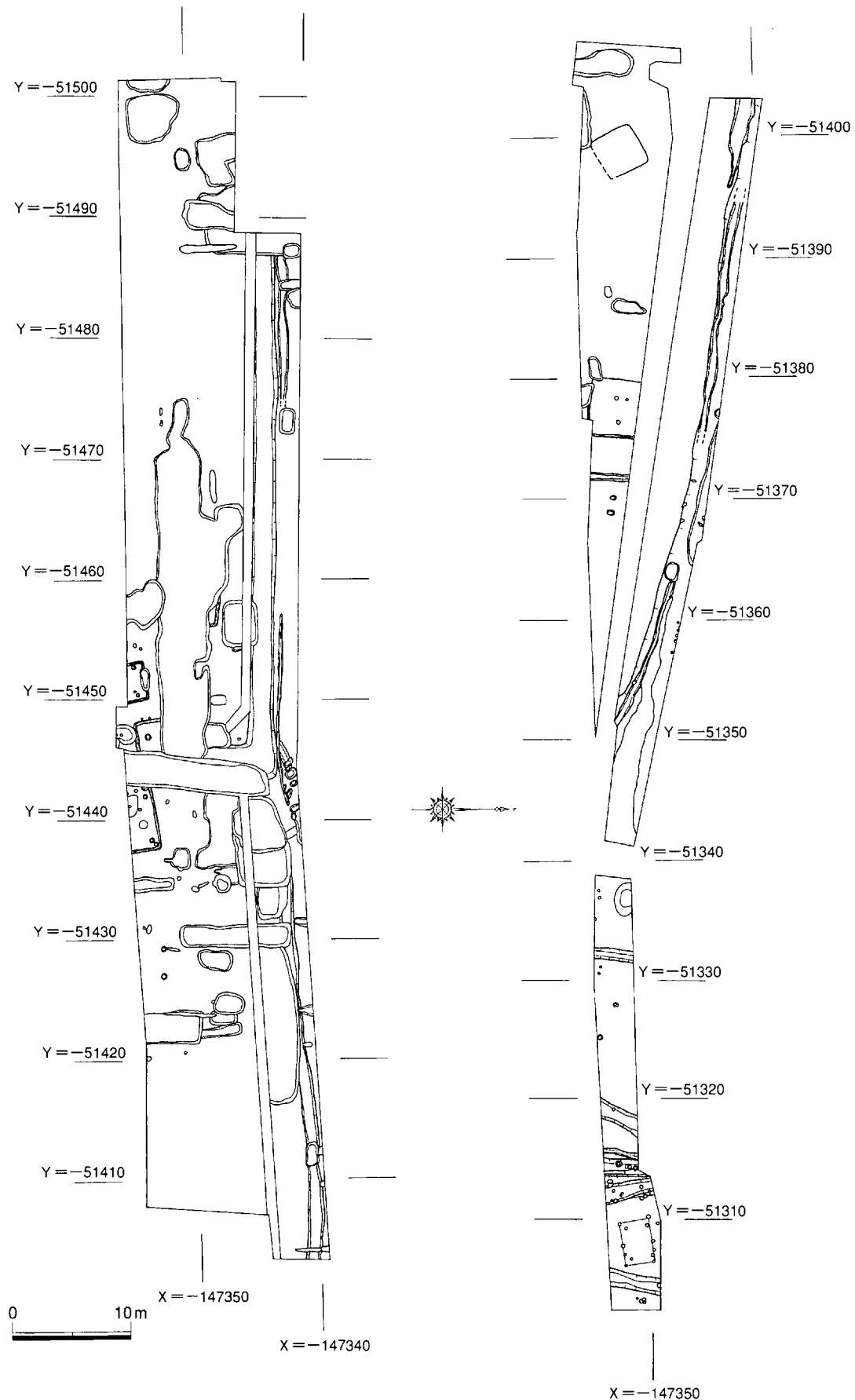
昨年度調査したA区につながる遺構が検出された。

中世の遺構は建物1軒と柱穴が多くみられ、他には土壙などがわずかに確認された。

弥生時代～古代には、昨年度の調査で明らかになったように、当調査区も溝が重複して掘削され、用排水路としての土地利用が窺われる。



第24図 調査区位置図 (S=1/4,000)



第25図 観音堂遺跡・牛神遺跡遺構配置図 (S=1/500)

遺物は各時期のものが出土しているが、量的には少ない。

観音堂遺跡（C区、A・B—C間現道部分）

表土、あるいは造成土の直下に、砂層及び礫層が堆積している箇所が多く、上部は相当削平されているものと考えられる。

また、方形、円形、不定形など、大小さまざまな近現代の攪乱が調査区全面に広がり、遺構の残存状況はきわめて悪い。これらの攪乱には、礫あるいは瓦礫が充填されたものが多く、地元の人によると「約30年より以前は、家屋等を構築する際には基礎に穴を掘削し礫を充填していた。」との言もあり、これらの攪乱がそのような施設であった可能性は高い。

C区からは6世紀代の住居址が5軒、その他柱穴や土壙等が検出されたが、上記の攪乱により大きく破壊されていた。

遺物は、住居跡から須恵器、土師器等が出土しているものの総じて遺物量は少ない。

現道部分も、C区同様攪乱が大きく調査区を覆い遺構を破壊していたが、一部破壊を免れて古代の溝が検出された。方位にのり調査区西端から東へ約45m付近で南に曲がる区画溝である。溝の上部は大きく削平されており、残存状態の良好な部分でも深さ30~40cm程度である。現在の道にはほぼ平行しており、南側を道路の側溝で破壊されているが、現状で幅約2mを測る。

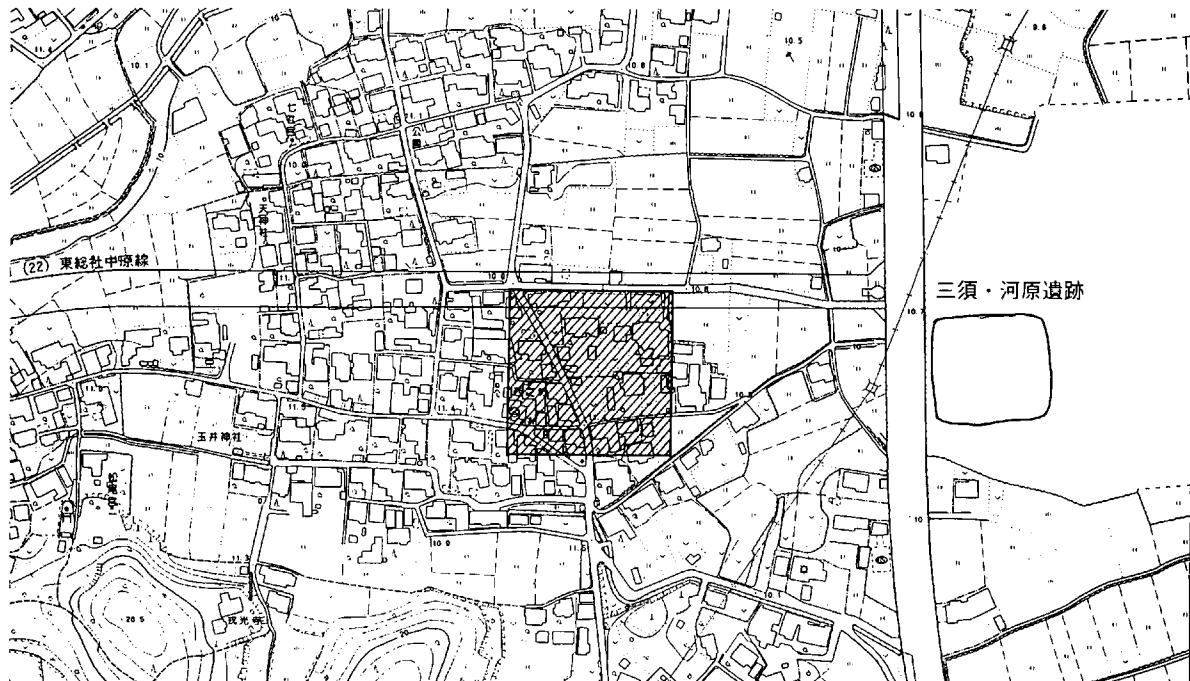
溝内からは、白鳳～奈良時代の瓦を始め、須恵器、土師器等が数多く出土した。

方位にのった区画溝と遺物の時期・内容から、この遺構が幻の三須廃寺を区画する溝である可能性は高いものと思われる。

しかし、国道429号線を挟んで東に位置する三須・河原遺跡からは、建物群と「郡殿」の墨書きした須恵器が検出されており、雀屋郡衙関連の遺跡である可能性が示唆されているが、郡衙本体はまだ確認されていないため、検出した溝が郡衙本体を区画する可能性も念頭にいれ、来年度調査予定の西接調査区を精査したい。

この他中世の溝や土壙も検出したが、遺構は総じて希薄である。

(平井)



第26図 区画溝推定域 (S=1/5,000)

中所遺跡 I 区

中所遺跡 I 区は国道429号線から西へ330m離れた三須集落内に位置する。平成12年6月7日から発掘調査を開始し、8月7日に作業を終了した。調査面積は690m²である。

中所遺跡は現況においても周辺地形より高いことが視認され、微高地上に立地することは容易に予測できた。その後の発掘調査により微高地であることは確認されたが、後世の造成土が厚く堆積し、しかも造成土内の新しい切り合いがいくつも見られた。地元古老人の言によれば調査区周辺は、かつて家屋や蔵が立ち並んでおり、その証言を裏付けるように、100ヶ所以上もの近現代の攪乱が調査区全体域に及んでいた。

検出遺構は、まず古墳時代の竪穴式住居址4、土壙、柱穴があり、調査区の北半で検出した。特に北東部分において遺構が集中するようである。

次の中世段階の遺構は柱穴が多く、攪乱のため建物を構成する柱列の繋がりや配列などの復元を困難にしている。柱穴の中には吉備系土師器椀の小片が出土するものもある。

今後の継続調査により周辺地域の状況がさらに明らかになってくるものと思われる。 (松尾)

中所遺跡 II 区

当該調査區は、旗本三須藤田氏が1824年（文政7年）に、本家藤田氏の井手役所から独立して知行所を新設した場所にあたる。

調査は、工事と排土置場の関係から2区に分け、まず西2/3（a区）を実施した。

調査は造成土が厚く盛られており、造成土除去後も、観音堂遺跡や中所遺跡I区同様、近現代の攪乱を数多く受け、遺構の遺存状況は不良である。

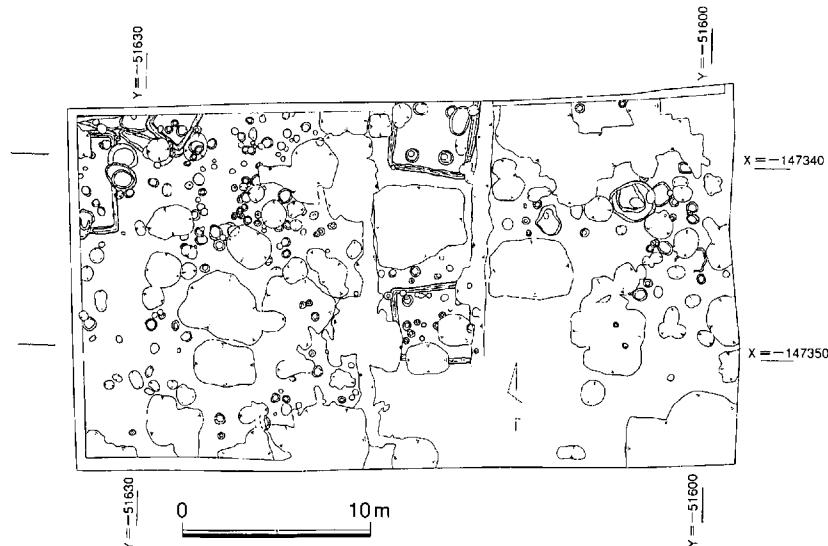
遺構は中世の柱穴が多く、土壙、溝等もみられる。

古代の遺構は少なく、柱穴等が若干認められたにすぎない。

古墳時代の遺構としては6世紀代の住居址が検出されている。

弥生時代の遺構は土壙、柱穴、溝があげられ、このうち1基ではあるが後期初頭のほぼ完形に近い土器を多量に廃棄した土壙も確認されている。

東1/3（b区）は、調査中で詳細は来年度の年報に譲る。 (平井)



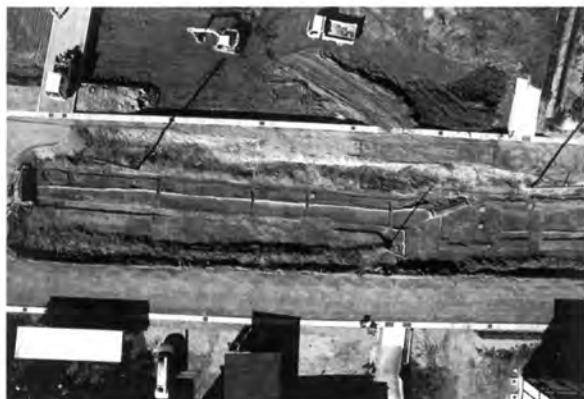
第27図 中所 I 区遺構配置図 (S=1/400)



第19図版 牛神遺跡観音堂遺跡全景（真上から）



第20図版 観音堂遺跡（C区）全景（真上から）



第21図版 観音堂遺跡区画溝（真上から）



第22図版 観音堂遺跡区画溝遺物出土状況(西から)



第23図版 中所遺跡I区全景（南から）



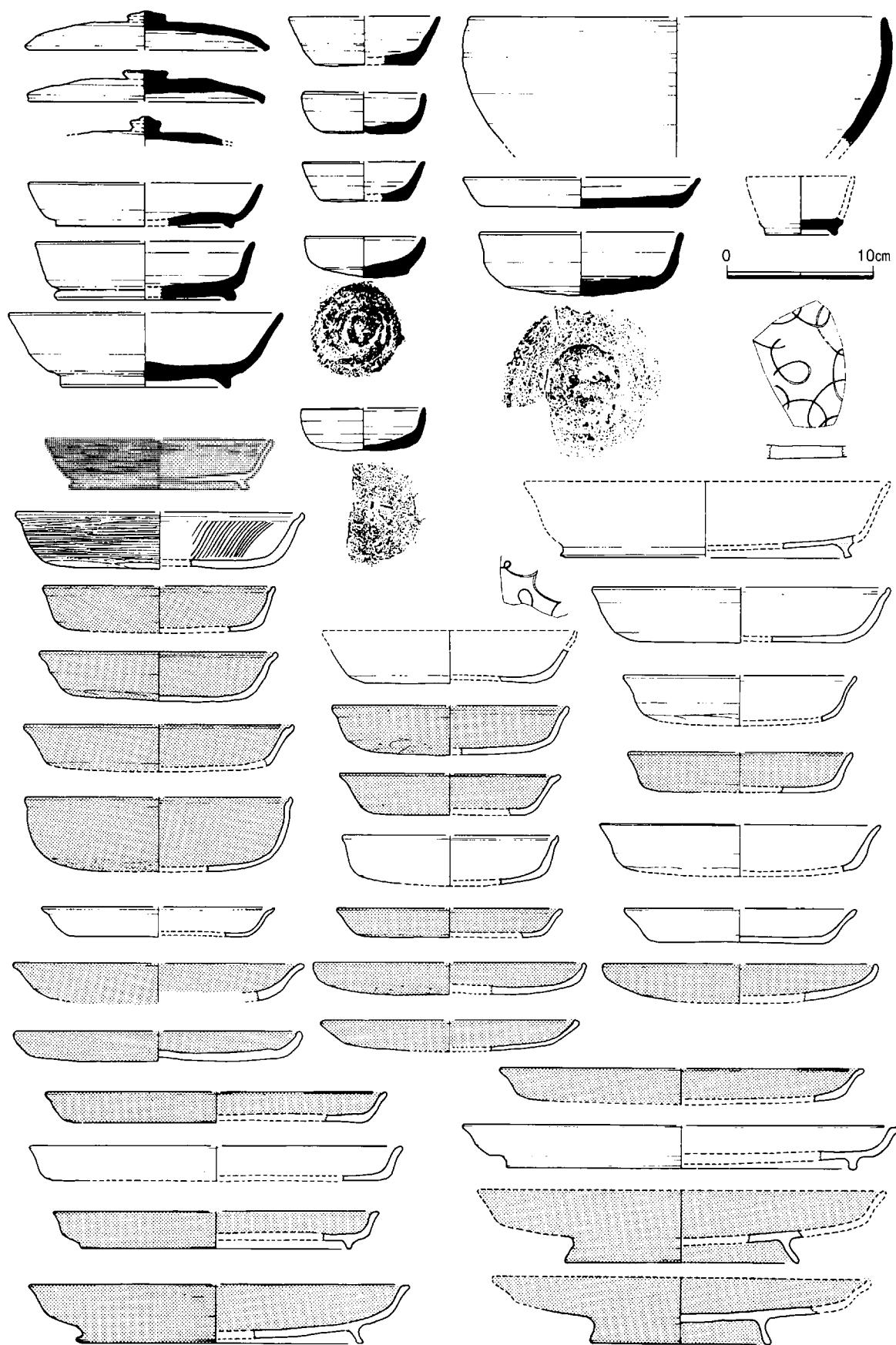
第24図版 中所遺跡I区全景（西から）



第25図版 中所遺跡IIa区全景（東から）



第26図版 中所遺跡IIa区土壤遺物出土状況(南から)



第28図 観音堂遺跡・区画溝出土遺物 (S = 1/4)

岡山納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告

遺跡名 市後遺跡群

所在地 総社市久代974-1ほか

調査期間 平成12年4月3日～平成12年12月22日

調査概要

(調査経緯)

調査地は、総社市西部の久代地内、約13.5ヘクタールである。

調査地の南には真備町との市境となる標高70m級の東西にのびる山塊が位置しており、これより北に向かっていく筋もの低丘陵を派生させている。また北には新本川が西から東に向かって流れ、肥沃な水田地帯を形成している。

このような地形の一画に調査地も位置し、新本川を北にしてのびる低丘陵2ヶ所と、それに挟まれた緩やかな傾斜地である。

周知遺跡は、『吉備郡史』によると古墳十数基にすぎない。しかし、調査地の西側に隣接するウイングバレイの工業団地建設において実施された発掘調査での遺跡発見状況から想定して、古墳のほかにも弥生時代の集落遺跡、古代の製鉄遺跡が存在するものと推測された。

平成11年3月31日、「(仮称)岡山納整センター敷地造成事業に伴う文化財保護に関する覚書」が締結され、これを受けて分布調査および試掘調査を実施した。

分布調査では、「丘陵を開墾している部分で土器片などが散布していることが判明したが、地形の改変も予想されるため遺跡の分布は不明瞭であった。現況では想定される多くの古墳も1基しか認められなかった」(試掘調査の概要報告)というように、『吉備郡史』記載の牛塚古墳を現地に確認したのみであった。このほかには調査地西の丘陵中ほどに位置する古墳7のあたりでかつて埴輪を採集しているにすぎない。

しかし、さきのウイングバレイでの調査状況等から相当数の遺跡が存在するものと予測されることから事業に先きだち、試掘調査を平成11年5月25日～6月28日にかけて、作業員の手堀による調査を実施した。

その結果、東の丘陵で牛塚古墳、西の丘陵で2基の古墳の、計3基が確認できた。『吉備郡史』にはほかにも小王山古墳などがあり、これらについても「開発が開始されると明らかになってくる可能性が高く、完全に消滅しているものとはいえない。」(試掘調査の概要報告)というように、発掘調査において新たに古墳が発見される可能性を充分想定している。

また、集落遺跡では西の尾根で3ヶ所(試掘調査No41・49・55)、東の尾根で5ヶ所(No.1・5・10・13・57)が確認されている。

製鉄遺跡では、1ヶ所(No.19)である。

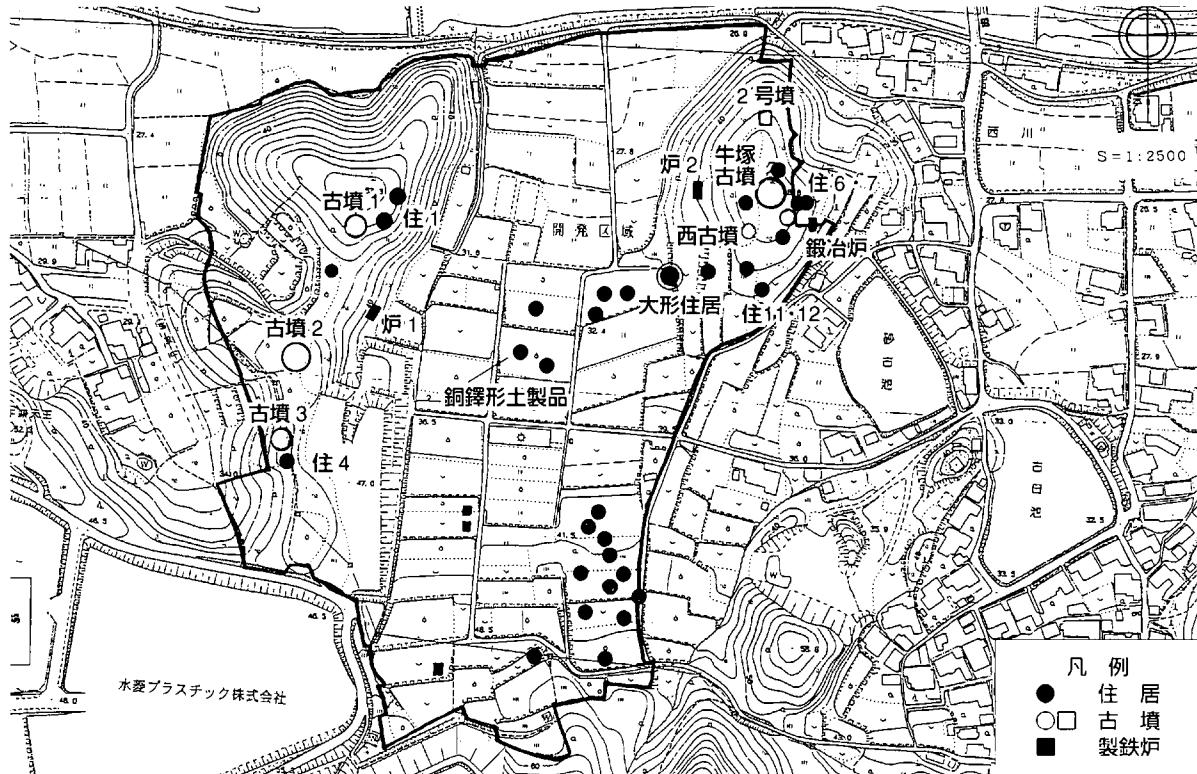
このほか「遺跡の性格は不明だがNo.33・34・38で溝」(試掘調査の概要報告)が確認されている。

試掘調査は開発区域内のうち可能な範囲で遺跡の有無、とくに予定地内に想定される古墳群を確認することが目的であったことから、立ち木が存在するなど試掘調査のできなかつた部分が残された。また、確認される遺跡範囲をより正確に確定する必要もある。遺跡範囲の確定は試掘調査面積に、新たな遺跡の発見は発掘調査期間に大きく影響をおよぼすことからも早急に行わなければならず、さら

に大きく地形の改変された盛土層の非常に厚いところにおいても遺跡の存在する可能性があるため、再度重機による確認が必要となろう。これらについて追加の試掘調査は実施できなかつたものの、工事の進捗状況の中で隨時行うことができた。

試掘調査結果を受けて、事業主と発掘調査の期間・経費等につき協議を行い、調査期間を平成11年11月1日～平成12年7月31日で合意した。

発掘調査は、工事の進捗状況にあわせてブロックごとに行つた。まず、牛塚古墳、同2号墳の調査にはじまり、東の尾根の西側斜面および中央部緩斜面の集落遺跡。引き続いて、西の尾根の古墳および集落、その間にも試掘調査で確認できなかつた丘陵裾部を中心とした確認調査と工事用道路兼周回道路に伴う集落および製鉄遺跡の調査。そして南東端の緩斜面・牛塚古墳まわりの集落と順次進み、とくに発掘調査後半期においては週単位で調査地が移動することも多かつた。



第29図 調査地遺構配置図 (S=1/5,000)

(遺構・遺物)

西の尾根は、3つの高まりとそれぞれの間に鞍部をもち、さらにその高まりから西あるいは北に小丘陵を派生させている。遺跡は、集落と古墳、製鉄遺跡が所在する。

集落は、3ヶ所で、北の高まりに2軒（試掘No.55周辺）、北の鞍部に1軒（試掘No.49）、南の鞍部に1軒であり、住居のほかに貯蔵穴なども検出されている。

住居1は北の高まりの東斜面にある住居で、しっかりと掘り込まれた柱穴が多数検出され、数度の立て替えが行われている。また、住居4に伴う貯蔵穴以外の貯蔵穴や、住居下に検出された貯蔵穴の存在から、消滅した住居がほかにも幾つかあったものと推測される。

古墳は、北の高まりと、中央の高まり（試掘No.43）、南の鞍部にそれぞれ1基ずつである。

古墳1は横穴式石室墳で、わずかに周溝の一部を残すほかは墳丘もほとんどなく、石室石材もわずか1石が残っていたのみである。床面に板石や丸石を敷き詰めており、石室幅0.7m、長さ2.5mを測る。

古墳2は、墳丘が大きく削平され、周溝のみがめぐるものである。直径約18mを測る。家型埴輪が出土。

古墳3も2同様に、周溝のみで、直径9mを測る。円筒埴輪と、須恵器大甕が出土。

製鉄遺跡は、南鞍部の東斜面裾で検出された。製鉄炉1が1基である。

丘陵斜面を掘削して平坦地を築き、中央に炉を置き、両側に排溝坑をもつ製鉄炉。前面はパイロット道路に削平されているが、斜面の傾斜からみてすでに消滅したものと推測できた。炉は60×70cmのほぼ正方形の箱型炉で、わずかに凹む型である。炉内には失敗作？の板状の大鉄塊が残されていた。

このほかに、明瞭な遺構は検出されなかったが、中央の高まりから西にのびる小丘陵上で柱穴と弥生土器を、南の高まり（試掘No41）で古代の遺物と柱穴・段状遺構をそれぞれ出土・検出している。



第27図版 西尾根の遺跡群（上左：住居1 上右：古墳1 下左：古墳3 下右：製鉄炉1）

東の尾根は、牛塚古墳の高まりから南に鞍部があり、さらに南に痩せ尾根がつづく。遺跡は、集落と古墳、製鉄遺跡が所在する。

集落は3ヶ所で、牛塚古墳のまわり（試掘No62）と鞍部（試掘No57周辺）、南の尾根にあり、それぞれ住居が5軒、2軒、1軒である。

住居6・7は、円形の住居のうちに方形の住居を建てるもの。住居11・12は、ごく小さな円形住居。

古墳は、牛塚古墳を中心に、北に方墳が1基、南と東に各1基の、計4基である。

牛塚古墳は、直径約22mの円墳で、2基の埋葬主体のもつ。いずれも箱式石棺で、1つには人骨が残されていた。出土遺物には、製鉄槍先・矛先・剣などの武器と、竹製の櫛のほか、人骨の両腕には貝釧が装着したままの状態で出土している。

牛塚2号墳は、箱式石棺の内部を主体とする方墳。



第28図版 牛塚古墳群（左：牛塚古墳第2主体部 右：牛塚西古墳）

このほかの2基は、周溝のみの検出であり、主体部は削平されているものである。須恵器が出土することから横穴式石室墳であった可能性が高い。

製鉄遺跡は、牛塚古墳の西側と東側斜面で検出された。製鉄炉が1基、鍛冶炉が1基である。

製鉄炉2は、両側に排滓坑をもち、60cm角の正方形箱型炉で、深さ20cmほどの凹型。

鍛冶炉は、30cmほどの椀型円形に堅く焼けた面をもち、周囲に炭層が伴っている。



第29図版 製鉄炉2



第30図版 緩傾斜地の遺構1

東と西の尾根に挟まれた緩傾斜地は、その西半分が氾濫による新しい堆積で、東半分も氾濫堆積層であるが古い時期のものと推測され、東半分にのみ遺構が存在していた。もともとは1つの集落遺跡と考えられるが、調査において南は（試掘No.10・13）と北は（試掘No.1・2）となり、その間には遺構が存在しないことからすでに削平されたものと考えている。また、南の丘陵に接し北に派生する小丘陵が2条認められ、その西小丘陵で製鉄遺跡（試掘No.19）が、東の小丘陵で集落が検出されている。

集落は、北において牛塚古墳の尾根裾～西斜面にかけて分布しており、住居7軒、掘立柱建物数棟、貯蔵穴群、溝などが検出された。また、南において東の丘陵の西斜面～裾を氾濫堆積で埋めた谷内に、住居11軒、掘立柱建物2棟、貯蔵穴、土壙墓などが検出された。

製鉄遺跡は、南から小さくのびた丘陵の東西斜面にそれぞれ1ヶ所ずつ検出された。東斜面のそれは試掘調査で確認されていたものである。

炉は東斜面で2基、西斜面で1基が確認され、いずれも正方形の箱型炉になる。

(まとめ)

市後遺跡群からは、弥生時代の集落と、古墳時代の集落と古墳、古代の製鉄遺跡が検出された。

このほか、遺物としては縄文土器、古代～中世の土器も出土し、土壙墓も検出されたことから、この時期の集落あるいは耕作地等が存在していたものと推測される。

弥生集落は予定地中央から南東の緩傾斜地を中心に分布、さらに東の尾根の丘陵頂部～斜面、西の尾根の丘陵頂部平坦面で確認された。遺構は、竪穴住居、堀立柱建物、貯蔵穴などであり、とくに住居のまわりに溝をめぐらす大形の住居や、貯蔵穴群がまとまって検出されている。この溝をめぐらす大形住居は、集会所的な建物と考えられる。また、まとまった貯蔵穴群の存在は市内においても調査例が少なく、同年代地内の勝負砂遺跡につぐ貴重な資料を提供したものといえる。

さらに、1住居の埋土内から出土した銅鐸形土製品は県内で数例目となり、その祭祀のあり方を考える上で新たな資料が加わった。

古墳は、『吉備郡史』から推測される古墳数にはおよそ7基が確認されたのみであったが、その多くが周溝のみに近い検出状況であったことから、開墾等により消滅した可能性が非常に高い。とくに西の尾根の中央の高まり以南は、近代の耕作地造成に伴いかなりの削平と土砂の移動・盛土作業が行われており、試掘調査で遺構が検出されなかつたが古墳の存在していた感触が非常に高かった。

牛塚古墳では2基の箱式



第31図版 緩傾斜地の遺構 2



第32図版 土壙墓



第33図版 弥生の遺構と遺物

(上：周溝がめぐる大形住居 下：貯蔵穴群 右：銅鐸形土製品)

石棺による主体部が検出され、鉄製武器や竹製櫛などのほかに、ゴボウラ製の貝釧を両腕に装着した人骨1体が出土している。とくに貝釧の出土は県内で4例目となるものである。

製鉄遺跡は、製鉄炉を5基と、鍛冶炉を1基検出した以外は、炭窯などの関連施設もなく、製鉄炉も1ヶ所のみ2基が操業していたほかはいずれも1基という構成であった。このことから、大規模な操業を行っているウイングバレイ本区の製鉄遺跡群のほかに、今回のように小規模な操業も近隣で行われていたこととなり、大規模化の前の段階であるか、その後の段階であるのか、時期の確定ができないことからその評価は大きくわかれることろではある。

また、試掘調査で確認されていた製鉄炉には、堀立柱式の覆屋が付くことが確認され、これまでも可能性は認められていたものの、今回確実に遺構で確認できたことは大きな成果であろう。

調査は最終的に、新たな遺跡が確認されたことや、遺跡範囲も広がるなどしたことから、期間を延長せざるをえず、平成12年12月22日に事業完了となった。

註 谷山雅彦「(仮称)岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報』10 2001)



第34図版 牛塚古墳出土遺物



第35図版 覆屋のある製鉄炉
(前角)

真壁遺跡

所在地 総社市真壁字中溝316番5, 316番8, 317番3, 318番1

調査期間 平成11年4月6日、平成12年1月19日～23日

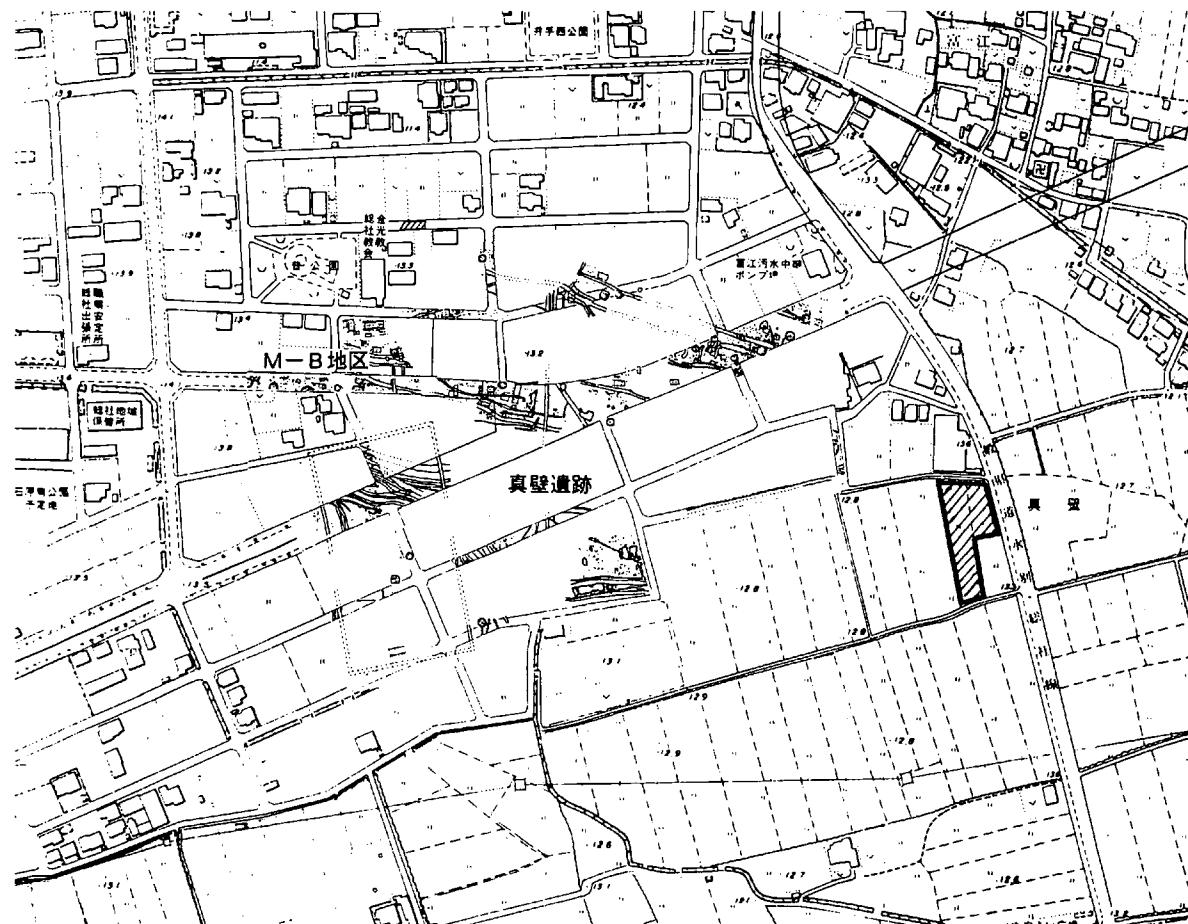
調查面積 約250m²

調查概要

本調査地は市街地の南東部に位置し、一般県道水別総社線に接する。この地の北西部では中央区画整理事業が行われ、真壁遺跡の存在が明らかになった。しかし、区画整理事業はその大部分を終了していたため、遺跡全体の規模などは明確ではない。今回工場を増築する場所も区画整理地に近接するも遺跡が存在するかどうかは不明であった。このため、まだ造成が行われていない畑部分で確認調査を行い、協議することとした。確認調査では安定した微高地と溝を確認した。このため、掘削が基盤層に届く部分の発掘調査を実施することとなった。調査にあたっては、事業者から重機の提供を受け遺構面までは重機で掘削し、後を人力で行った。

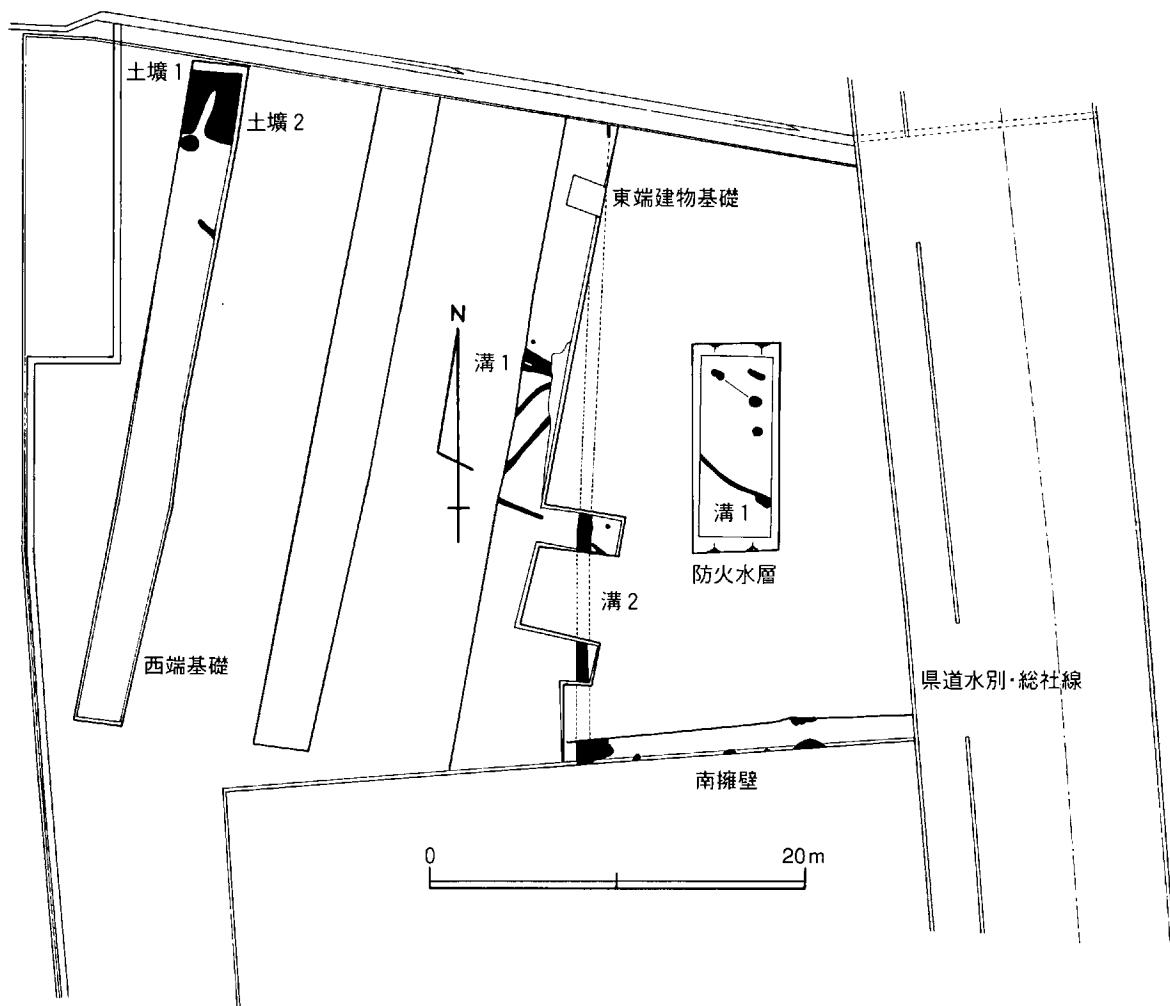
平成11年度では南擁壁と防火水槽部分の調査を行い、平成12年度になって建物部分の調査を実施した。防火水槽部分では、溝1と柱穴を検出した。溝は幅34cm、深さ16cmであった。遺物は出土していない。柱穴は北東部分に集中するが調査面積が狭いため建物などの規模は不明。柱穴の時期は古墳時代と考えられる。南擁壁部分は掘削が浅いので主に検出のみとなった、西端の溝2は幅90cm、深さ35cmで時期は近世と考えられる。(谷山)

(谷山)

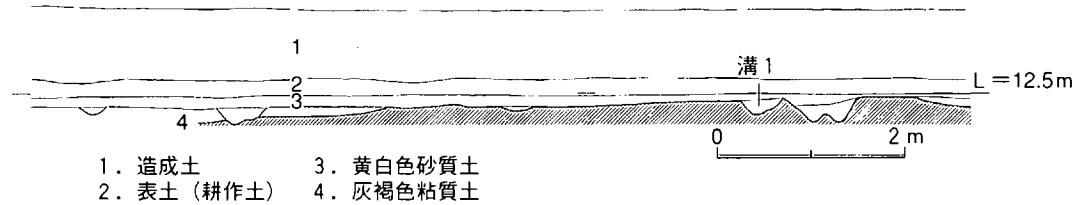


第30図 調査地位置図 ($S = 1/5,000$)

平成12年度の調査は、建物の基礎部分の掘削が基盤層に届くことからこの部分の調査を実施した。その結果、遺構の残存状況は悪く、検出した溝も浅い。北西部の土壌は白色と黒色の砂質土の互層で埋められており、中世以降のものと考えられる。



第31図 遺構配置図 ($S = 1/400$)



第32図 東端建物基礎断面図 ($S = 1/80$)



第36図版 防火水槽調査区



第37図版 防火水槽調査区・溝



第38図版 南擁壁部分



第39図版 増築建物基礎全景



第40図版 西端基礎部分検出状況



第41図版 東端基礎部分検出状況

吉備路観光センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（切土部分）

遺跡名 天満遺跡

所在地 総社市三須825-1 外

調査期間 2000年4月28日・5月1日, 6月5日～8月3日

調査面積 約1,000m²

調査概要

（調査経緯）

昭和61年に、吉備路及び県南観光の拠点として「観光センター」構想が発足して以来、温泉の掘削をはじめ、宿泊施設（国民宿舎）・土産物（特産品）販売・観光情報提供・多目的広場・コンベンションホールなどの施設の整備が計画され、1991・1992年度には公有地化が行われた。これを受け総社市教育委員会では1989年度に確認調査を実施した。また1999年度には「観光センター」の本体部分についての発掘調査を実施しており、弥生時代頃と推定される柱穴・土壙状の遺構、時期不明の柵列状の柱穴、丘陵と水田の境に、地形に沿って重複する溝等が検出されている。

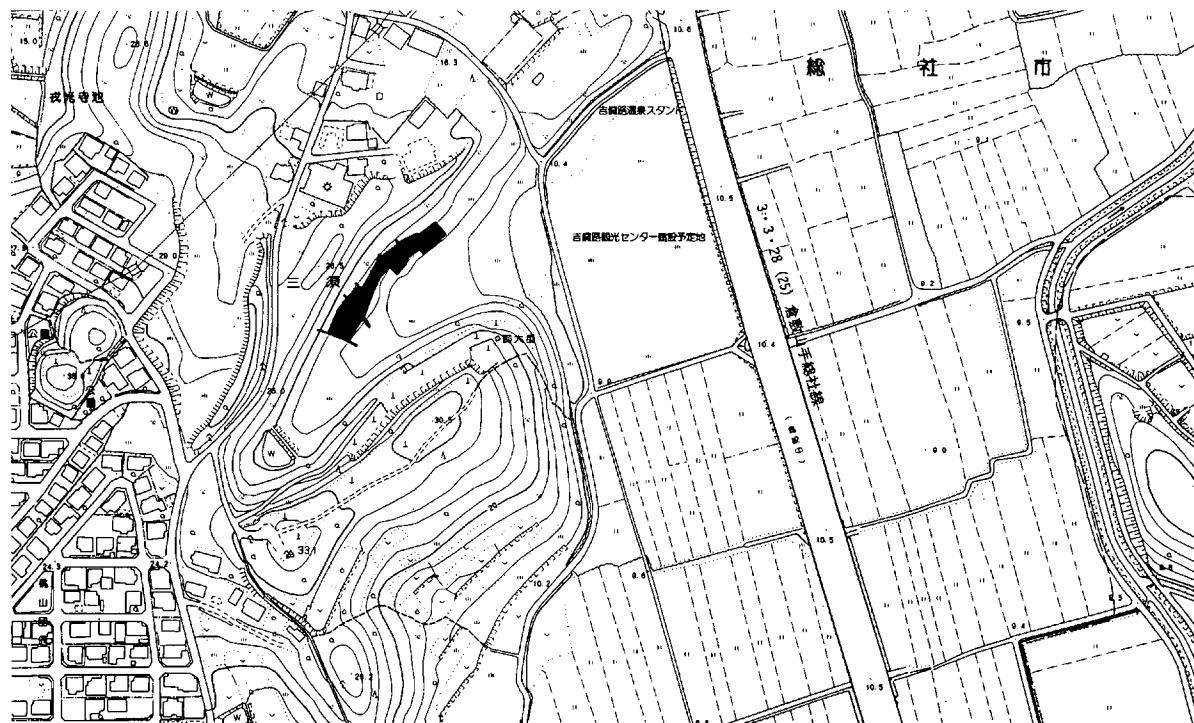
（調査概要）

現況は低丘陵斜面を段々に開墾した畠と果樹園である。調査は、まず遺構の有無を確認するため重機によって確認のトレーニチを設置したところ、切土予定地の北半部分で遺構の存在が確認された。検出された遺構は、鍛冶炉4基のほか、溝・溝状の遺構・土壙等である。

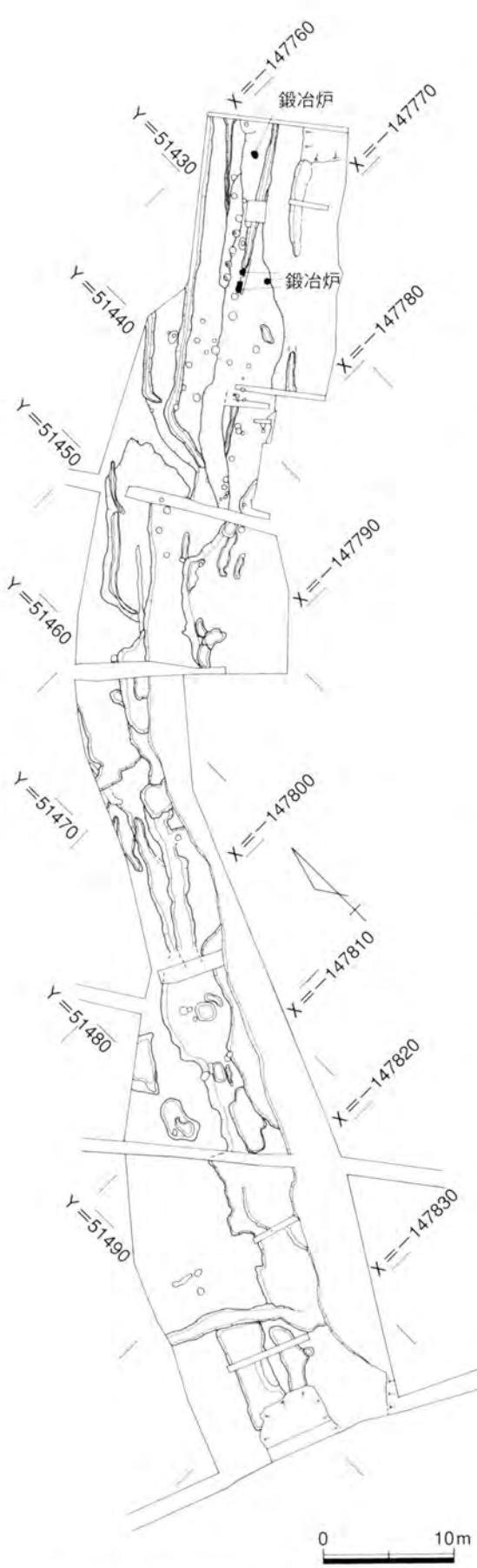
特に、調査区の東端では、上方に排水のためと考えられる溝を巡らせて平坦面をつくり、鍛冶炉が築かれていた。鍛冶炉の周辺には柱穴が並んでおり、覆い屋の可能性も考えられる。

調査範囲より下方は斜面が急に削られており、遺構の存在は確認されなかった。

（高橋）



第33図 調査地位置図



第34図 遺構配置図 ($S = 1/500$)



第42図版 調査区全景 東から



第43図版 鍛冶炉-1 北から



第44図版 鍛冶炉-2・3 全景 西から



第45図版 鍛冶炉-3 北から

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(6)

遺跡名 砂子遺跡（B地区）

所在地 総社市山田

調査期間 2000年6月1日～2001年5月30日

調査面積 9,900m²

平成12年度の調査対象となった砂子遺跡B地区は、平成11年度に調査を実施したA地区から、県道を挟んで南側に広がり、稜線上に砂子山古墳群が所在する尾根の北側斜面裾部にあたる。

調査対象としたB地区については、前年度のA地区での調査結果から濃密な遺構の存在が予想されたため、先ず、5月下旬に掘削予定範囲で重機を用いて試掘調査を行った。

この結果、急傾斜の山裾斜面を削平・造成した狭小な現水田下も含めて、全ての地点で濃密な遺構の存在が確認された。

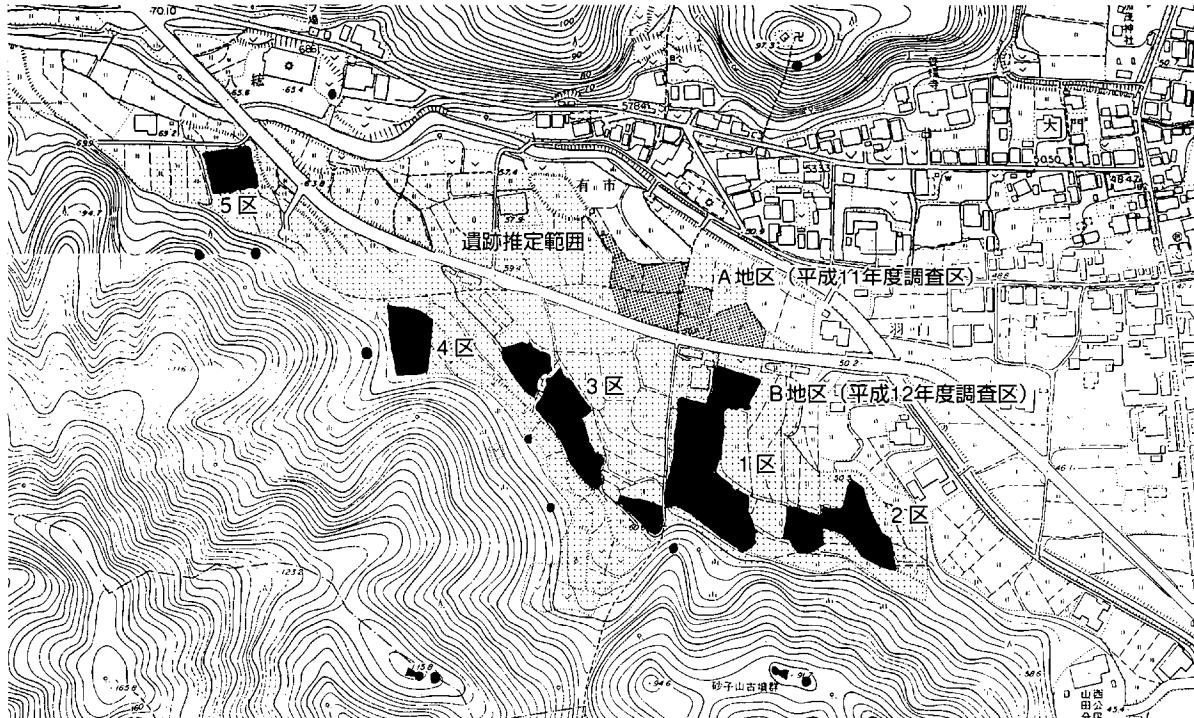
このため教育委員会では事業課と協議し、遺構の保全のため可能な範囲での設計変更を要望した。

しかし、ほ場整備対象地が急傾斜を造成した水田が大半を占めるため、工事完成後の水田面積確保を考慮すれば斜面部の削平は避けられず、大幅な設計変更は不可能との結論に達した。

これを受け、遺構が影響を受ける削平が確定した約8,000m²については記録保存の処置をとる事となり、6月より重機を用いて表土除去を行い、発掘調査を開始した。

その後、調査の進行と同時に、工事設計が未確定であった箇所が確定したことと、工事上の不都合等が次第に判明したことから、さらに削平面積が拡大したため最終的には9,900m²を調査し、採集した鍛冶炉・焙焼炉の土の洗浄等を残し、4月末日に全ての調査が終了した。

発掘調査は便宜上1～5区の調査区を設定して進め、特に遺構が集中する1・2区の調査が終了した3月に、約300人の見学者の来跡を得て現地説明会を開催した。



第35図 調査区配置図 (S=1/5,000)

以下、各調査区毎に調査で明らかになった遺構の概略を述べる。

1区（第35図）の地形は大別すると山裾の斜面部と平坦部に分けることができるが、発掘調査は出土の関係で斜面部の山際から着手した。

遺構は調査対象地のほぼ全面に広がっており、特に斜面部では水田造成時の段状の削平を免れた各時代の遺構が濃密に遺存していた。

斜面部の基盤土は赤橙色の赤土であり、それに掘り込まれた弥生～中世の遺構が重複して検出されたが、主な遺構は古墳時代前期の住居址と、後期の住居址・作業場・建物・溝等である。

この内、斜面の上端で確認された段状の作業場（SX03）の床面に掘られた土壙（第39図）から鉄鉱石が出土した。この土壙中には炭が堆積し、壁面が著しく被熱赤化しており、出土した鉄鉱石自体の表面にも被熱の痕跡がみられる。これらの点から土壙の性格として、鉄鉱石精錬の前段階の鉱石焙焼・破碎を目的とした施設の可能性が考えられた。

さらに、SX03の覆土中に上方から流れ落ちた状態で、精錬炉の炉壁片と鉄滓が纏まって出土したことから、上方の調査区外山林に鉄精錬炉が存在することは確実となった。この鉄精錬炉が近接して存在する点からも、SX03の被熱土壙を鉱石焙焼炉と考えることが妥当性を帯びてくると思われる。

この他に、下方のSH07の床面上の焼土中からは破碎された小指大の鉄鉱石片が出土した。SH07は一辺10m近い方形堅穴住居で、構造的には通常の住居と同様に造り付けの竈と4本の主柱穴を備えているが、その規模と焼土下の床面の著しい被熱痕跡から、やはり鉄鉱石の焙焼施設と考えられる。

また、SH07の周辺の溝中からも鉄鉱石片が多数出土しており、焼土や被熱面と地山の黄橙色粘土を用いた貼り床面が広くみとめられることから、未確認ながら他にも鉄鉱石の焙焼・破碎用の工房が存在していた可能性が高い。

以上の遺構の年代については、土壙中や床上面から完形の須恵器が出土しており、その形態からみて6世紀中頃から後半を中心とした時期が想定できる。

この古墳時代後期の貼り床面の下層には、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴式住居が遺在しており、古墳時代前期の住居址がいずれも焼け落ちて放棄されている点は他の調査区と共通している。

平坦部と斜面部の境には、西側の小谷から水流を集め自然流路を、人為的に屈曲させて掘り直した大溝が東西方向に走っている。この大溝は幅約5～6m、深さ1m前後の規模で、底面から建築材や土器が纏まって出土し、ほぼ6世紀前半から8世紀前半に機能していたとみられる。

この大溝の屈曲した部分の内側には、5基の鍛冶炉と土壙状の炭窯26基（第39図）が集中して検出された。特に鍛冶炉は炭窯や建物を埋めて整地した黄色粘土の貼り床面上に作られている例が多く、ある程度の時間幅を有して繰り返し操業されていたと推定される。

これらの鍛冶炉・炭窯集中域の北側の県道寄りでは、竈を有する堅穴住居址が集中する状況から明らかになった。これに、県道北側の砂子A地区でも県道に近い部分で、同時期の住居址が集中していたことを併せて考えると、現県道下から盛土保存とした1区の西側の平坦部を中心とする居住区域が形成されていたと推測できる。また、住居址の床面上に鍛冶炉を付設する例もあり、屋外の鍛冶炉との役割りの違いが存在したのか興味深い。

次に2区の概要であるが、2区の調査対象地は段丘状の緩斜面の東末端にあるため、山裾の急斜面が大半を占め、調査前は畦畔の比高差の大きい棚田状の水田であった。

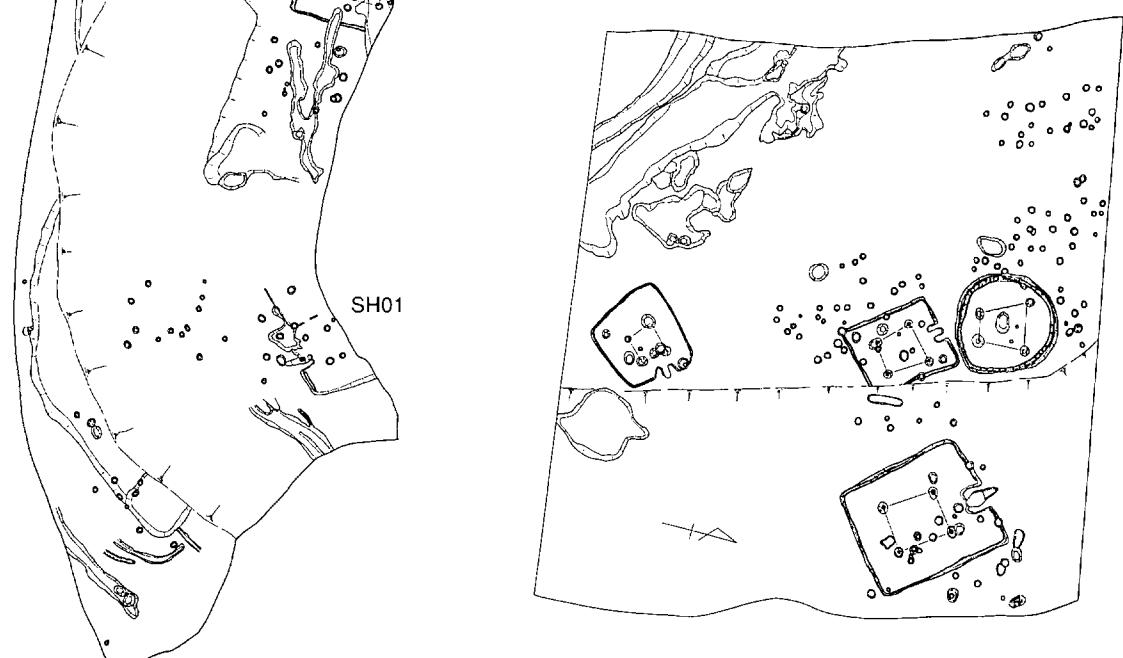
斜面部は1区と同様に、本来は緩斜面であったものが段状に削平されているため、遺存する弥生後



第36図 遺構全体図 ($S=1/400$)



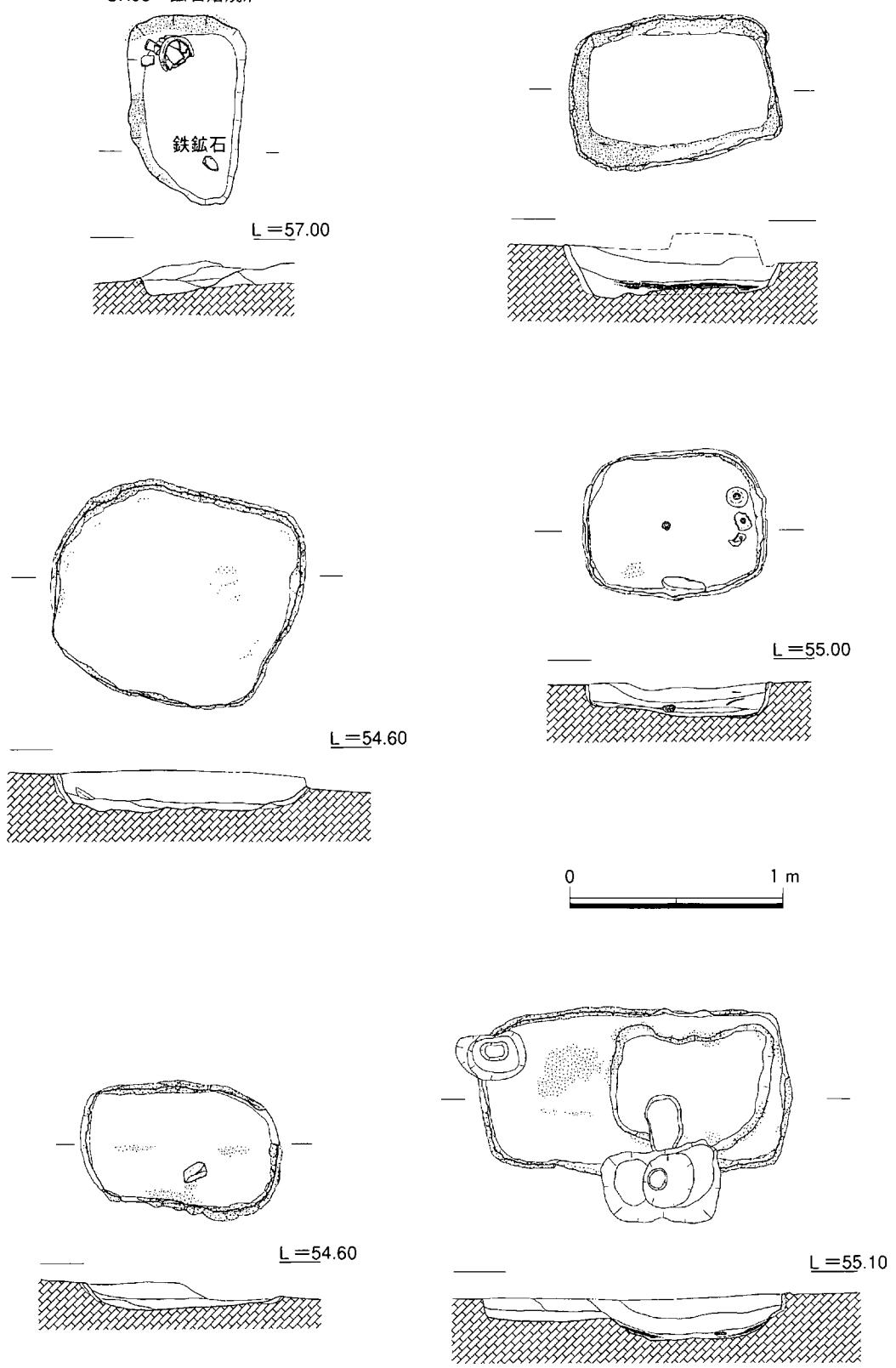
第37図 第3調査区遺構配置図 ($S = 1/400$)



第38図 第5調査区遺構配置図 ($S = 1/400$)

0 10m

SX03 鉱石焙燒炉



第39図 炭窯・鉱石焙焼炉平・断面図 (S=1/30)

期～古墳後期の竪穴住居と段状遺構が等高線に平行した状態で、並ぶように重複して検出された。

この内、古墳後期の遺構は竪付きの竪穴式住居の他に、竪をもたない竪穴式住居（SH-22）の床面上の焼土面から鉄鉱石の小片が出土しており、鉱石の焙焼・破碎のための工房とみられる。

また、古墳時代前期の一辺8mの方形住居址（SH-21）は、同時期の住居の中では群を抜く規模であり、貼り床や火所の状態から長期の存続が窺え、集落の中心的な住居と考えられる。

次に、斜面部の下端には1区から続く大溝を長さ20m程度検出したが、土層観察の結果、大溝の北側の高まりは大半は人為的な造成により積み上げられたものであることが明らかになった。この造成土の断面中には、1区と同様の地山の黄色粘土を用いた貼り床面が少なくとも6面以上認められ、各面に数基の鍛冶炉と鍛冶滓・炭の散布がみられた。

大溝の最下層のグライ化した粘土中からは、古墳時代前期の大量の土師器（第41・42図）が纏まつて投棄された状態で出土し、祭祀行為を窺わせる手捏ねの小型壺が多い点が特徴である。

造成された鍛冶炉面の高まりは、この自然流路を利用し、斜面からの水流を集めることを意図したとみられ、排出滓等の投棄により次第に埋没する溝に対応し造成面を積み上げたと考えられる。この点を示すように、大溝の覆土の下層～上層からは、大量の鉄滓・炭と、須恵器・土師器（第40図）が出土し、須恵器の年代から5世紀末葉～7世紀前半まで操業が続いたとみられる。

また、大溝の下層からは、乳児頭大で重さ約3kgの鉄鉱石塊の他、拳大の鉱石片が多数出土しており、未調査部分も含めた斜面部に多数の鉱石加工場が存在したと考えられる。

以上の1・2区の様相とは対照的に3～5区（第37・38図）では、5世紀末葉～7世紀前半の住居址や鍛冶炉を伴う段状遺構が連綿と続くものの、1・2区と同様の斜面ににも係わらず鉄鉱石の加工施設は確認されておらず、その出土も皆無であり、地点により遺構群の性格に相違がある。

この内、今回の調査で確認した鍛冶炉の中で、最も時期的に古い3区SH01（第37図）では竪前面の床面上に、非常に硬く焼けた鍛冶炉が存在しており、他の住居内炉とは在り方と規模が異なる。

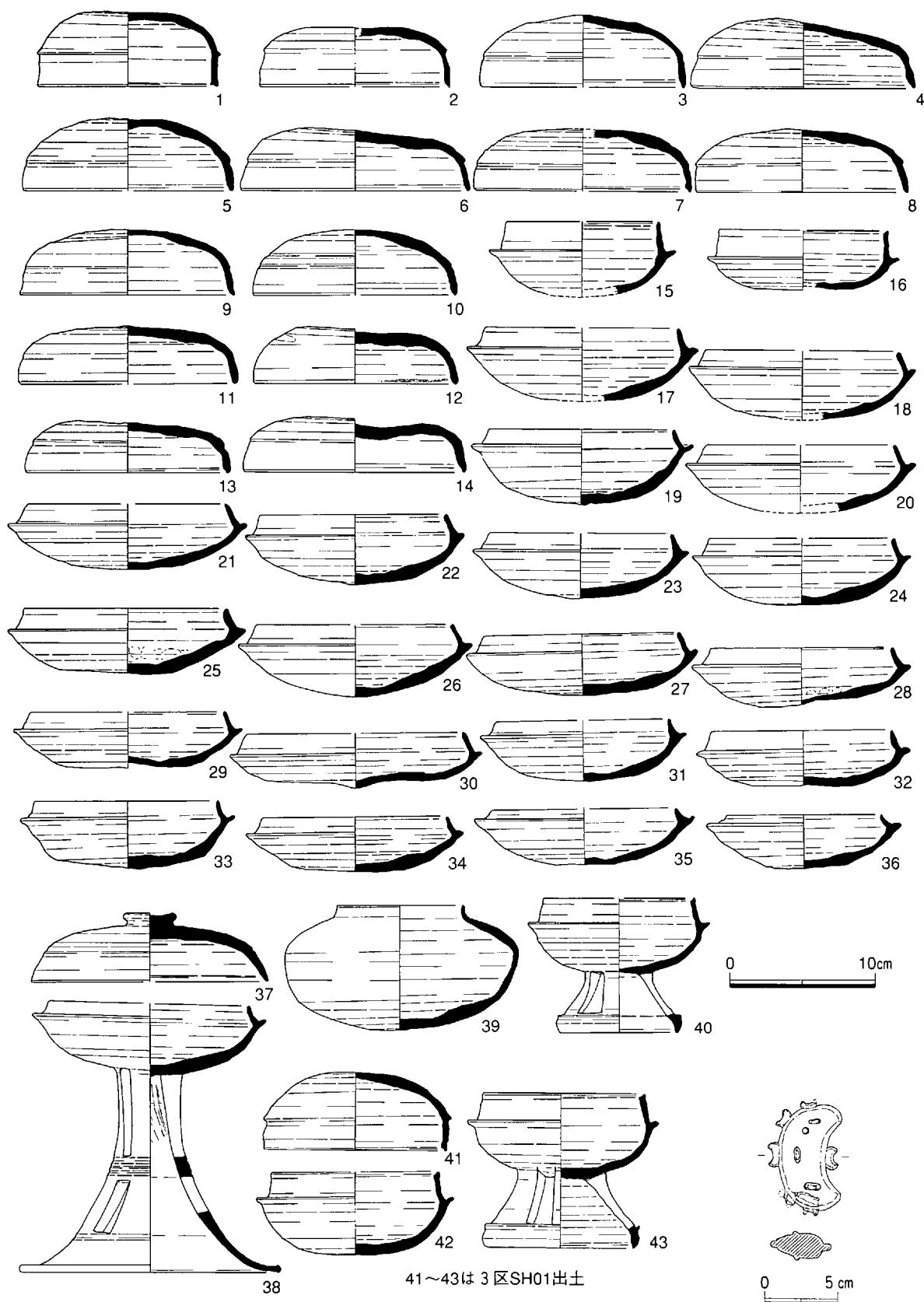
以上が今回の砂子遺跡B地区の調査概要であるが、最後に前年度のA地区と併せて調査で明らかになった事柄について簡単にまとめてみたい。

今回の発掘調査では、結果的に遺跡推定範囲のほぼ1/4を調査し、明らかになった主要な遺構は住居址53軒、段状遺構24カ所、土壙状炭窯45基、鍛冶炉22基等である。時期的にみると、この内、住居址16軒以外は全て5世紀末葉～7世紀前半の所産と考えられ、他の溝・土壙等の遺構もこの時期に属するものが大半を占めている。

また、遺跡の性格としては、この時期の遺構が未調査部分に存在が確実な鉄精錬域、斜面部の鉱石加工工房域、大溝で区切られた鍛冶炉・炭窯域、工人の居住域に大別され、集落全体が連続した鉄の一貫生産を意図した計画的とも言うべき配置がなされている点が特徴である。

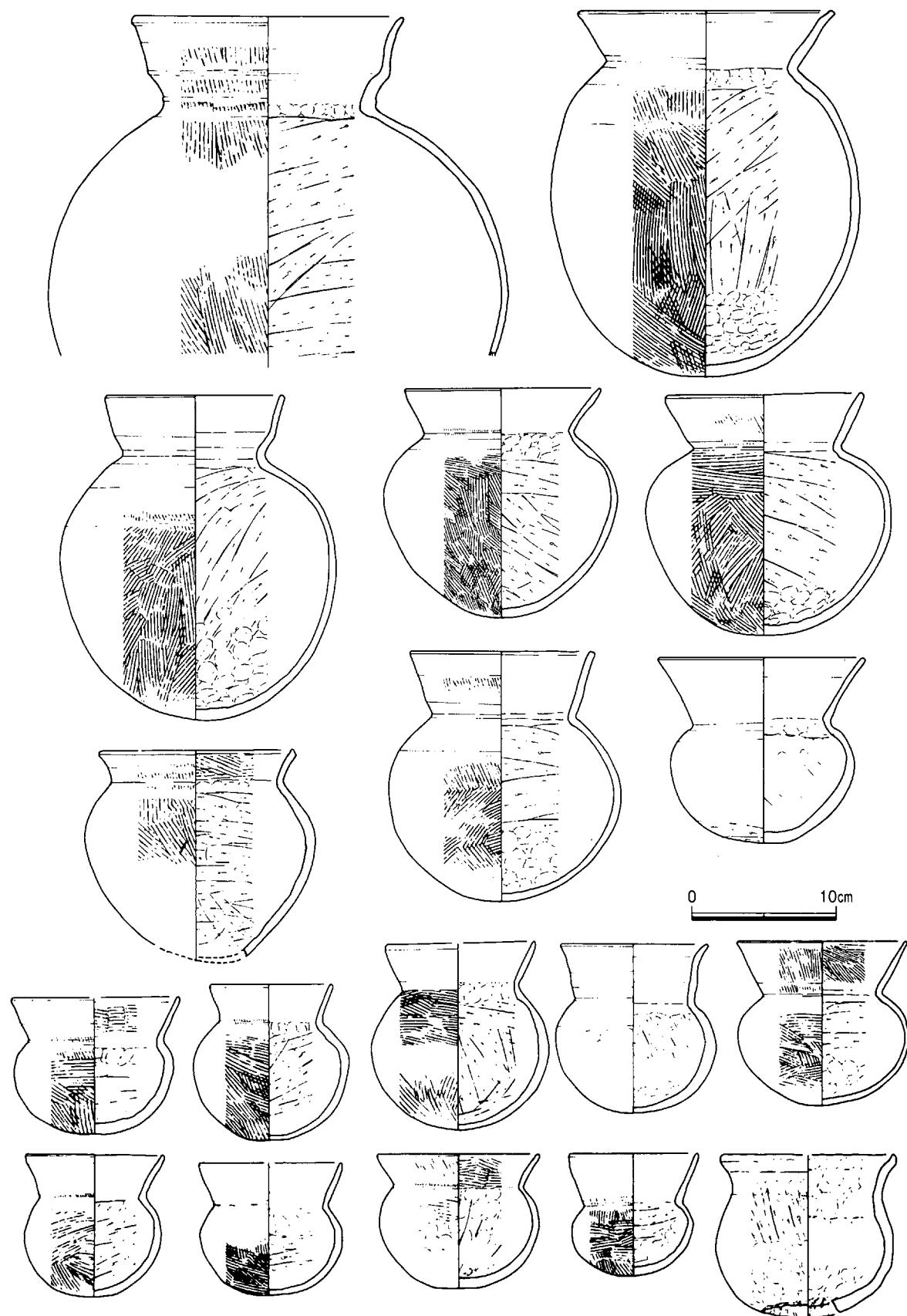
これらの鉄生産遺構については、調査が終了したばかりの現時点では不明な点が多く、採取した覆土の洗浄や、自然科学的分析を経たうえで改めて考察したい。現時点で言及するならば砂子山古墳群を造営した古墳時代前期の集落が後期にも継続している点が重要であり、飛躍的にみると前方後円墳を築く程の有力な拠点集落であるからこそ、最先端の技術である鉄生産を受容・発展できたとの解釈もでき、単に生産技術のみに留まらない諸問題を含んでいると考えられる。このように、本遺跡・遺物の時期と規模・在り方が、初現期の鉄生産を考えるうえで投げかける問題は多く、特に製鉄遺跡が集中する高梁川西岸域の遺跡と併せた慎重な検討が必要と思われる。

（武田恭彰）

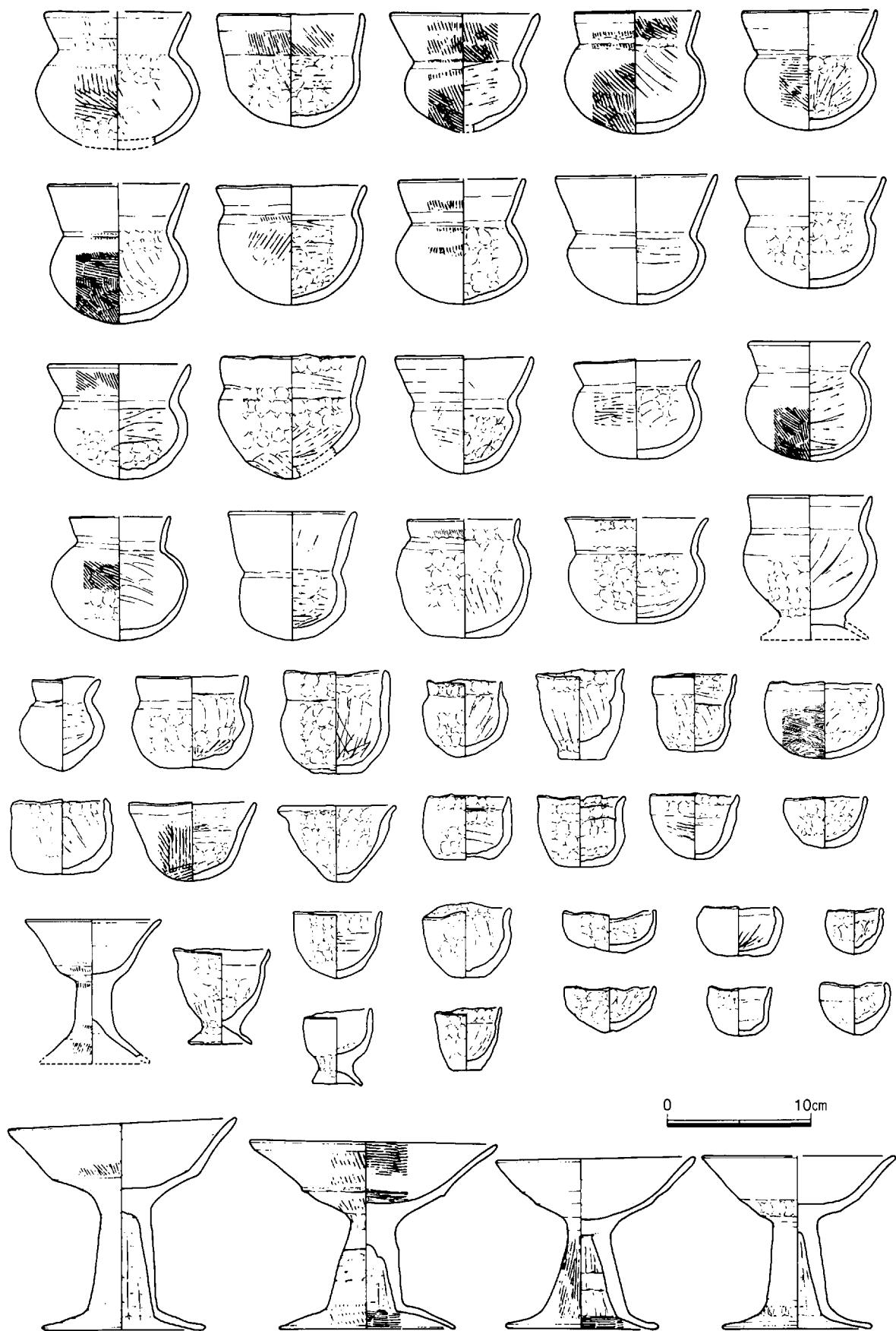


1~40は2区大溝中・下層出土

第40図 2区大溝・3区SH01出土遺物 (S=1/4)



第41図 第2調査区大溝最下層出土遺物(1) (S=1/4)



第42図 第2調査区大溝最下層出土遺物(2) (S=1/4)



第46図版 砂子遺跡遠景（東から）



第47図版 1区全景（北から）

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 石原遺跡、下川田地区、惣善寺遺跡

所在地 総社市真壁・三輪地区

調査期間 2000年10月10～24日、2001年1月15～17日、2001年2月15日～3月30日

調査面積 約2,500m²

調査概要

(調査経緯)

平成6年度からの継続事業である、総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う2000年度の発掘調査は、工事工程の関係と、下川田地区で遺跡の存在が確認されなかつたため、合計約二ヶ月の調査期間であった。

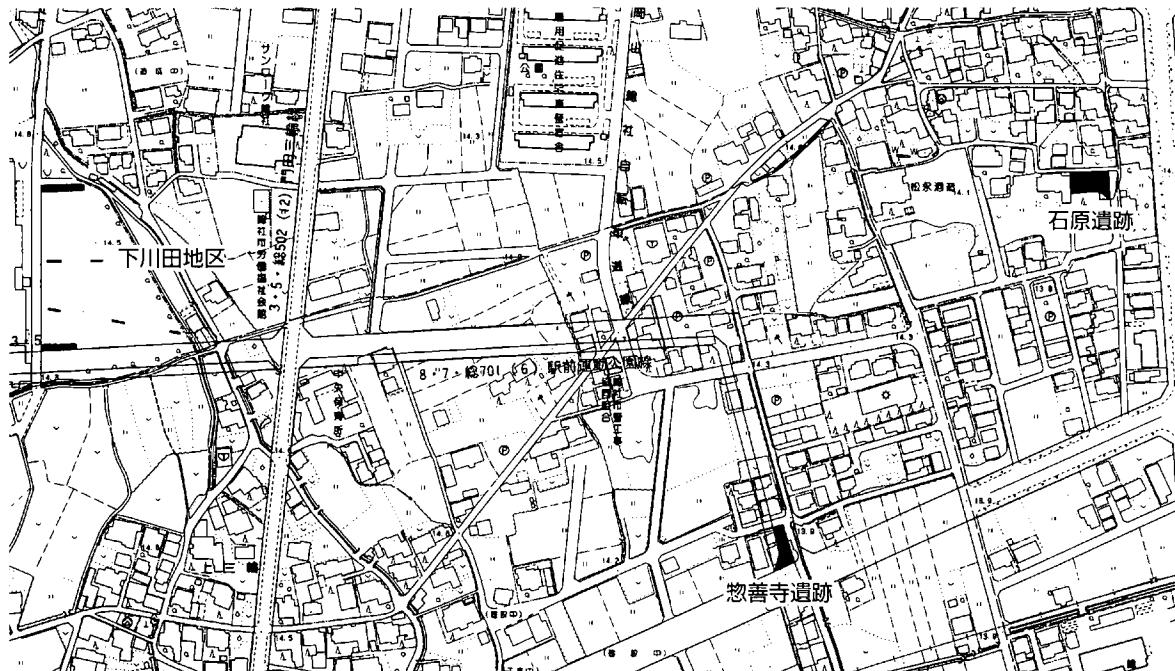
(調査概要)

石原遺跡・惣善寺遺跡は、家屋の移転後に調査を実施した。いずれの遺跡も総社市街地の南端付近に位置しており、微高地上に形成されている。

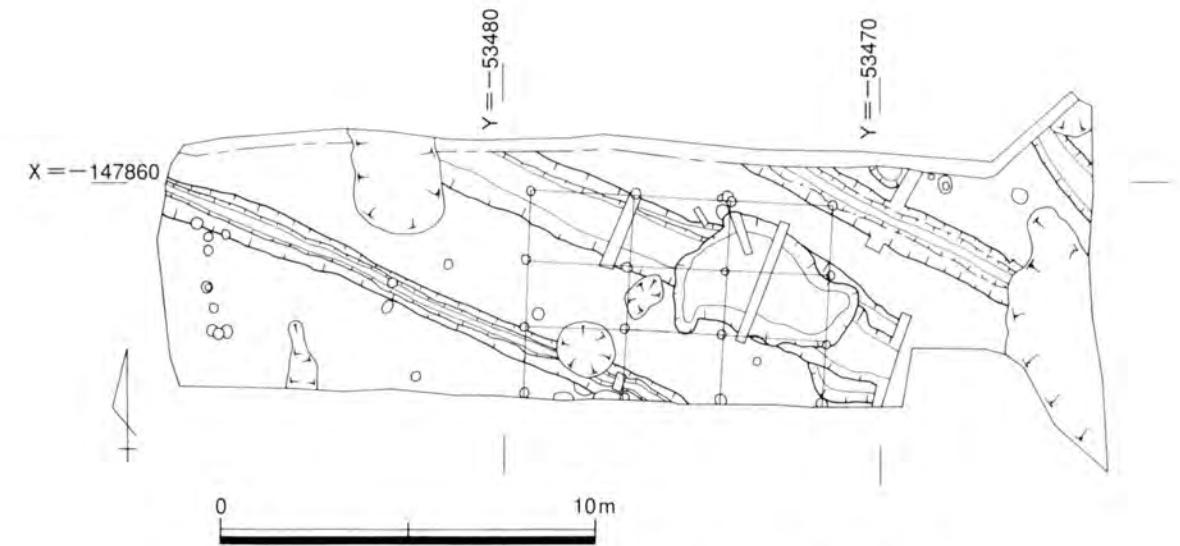
石原遺跡では、北西～南東方向に流路を持つ溝が平行して検出された。溝は、何度か改修されながらほぼ同じ所を流れていることが認められた。また、その溝を切って総柱の建物が造られてれていた。出土した遺物より、溝は古墳時代前半、建物は中世と考えられる。

惣善寺遺跡では、4つの遺構面が確認された。第1遺構面では、北西～南東方向に流路を持つ溝が切り合って認められ、土壙等も確認された。第2～4の遺構面では、比較的多くの柱穴や杭状の痕跡・土壙等が検出された。

下川田地区では、重機によって計8本のトレーナーを掘削し、遺構の有無を確認したが、いずれのトレーナーでも旧耕作土の下は、粘質の土層が堆積しており、遺構の存在は確認されなかった。(高橋)



第43図 位置図 (S=1/5,000)



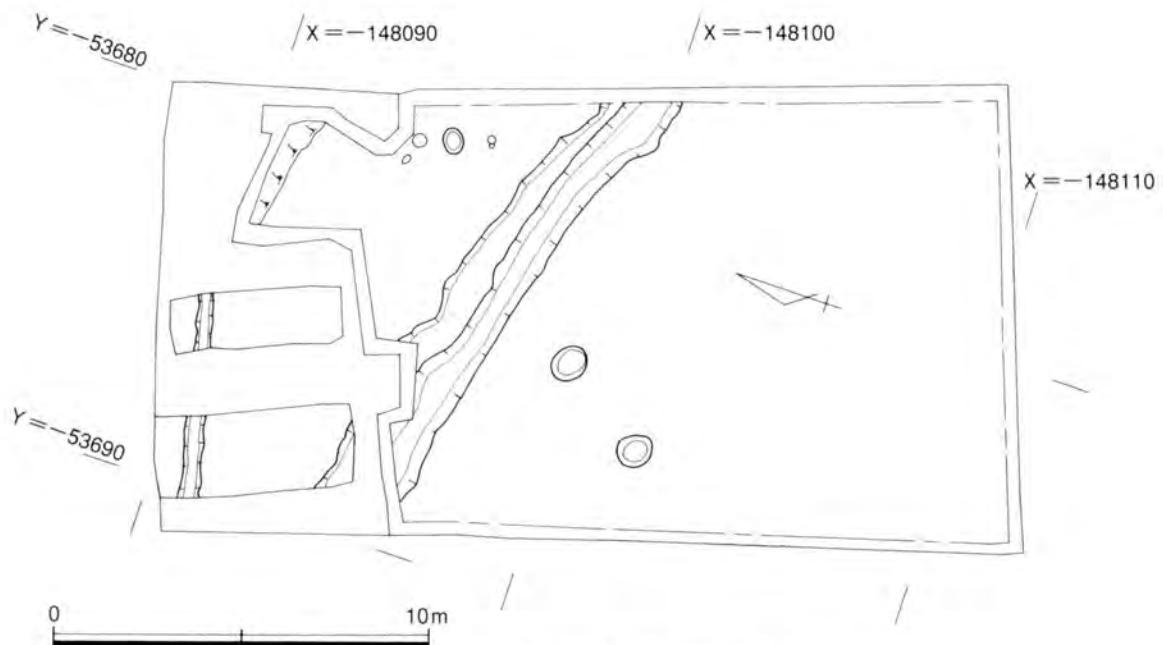
第44図 惣善寺遺跡 第1遺構面遺構配置図 (S = 1/200)



第48図版 石原遺跡全景（東から）



第49図版 溝切り合い状況断面



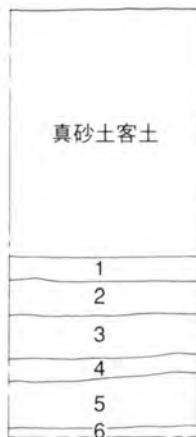
第45図 惣善寺遺跡 第1遺構面遺構配置図 (S = 1/200)



第50図版 物善寺遺跡 第1遺構面



第51図版 物善寺遺跡 第2遺構面



第46図 下川田地区 土層断面図 ($S=1/40$)



第52図版 調査区遠景



第53図版 土層断面



第54図版 土層断面

県営ほ場整備事業原地区に伴う発掘調査概要報告（付・B区試掘調査）

遺跡名 中組遺跡

所在地 総社市中尾889-1ほか

調査期間 平成13年1月15日～平成13年4月17日

調査概要

(調査経緯)

調査地は、総社市北西部の水内地内、影谷川の中流域で、平成12年度工区の約47haである。

影谷川は高梁川に合流するあたりで広く扇状地等を形成するものの、上流に向かっては幅の狭い氾濫原と段丘状地形が主となり、堂砂谷川の流れ込む調査地あたりでやや広くなっているにすぎない。

A区では、工事に先立って試掘調査が実施された。トレーナーを24本設定し、うち2本（A1・A2）から遺構が検出され、本発掘調査となった。B区では、表土の集積工事までであったことから、平成13年度当初で試掘調査となった。

A区は、堂砂谷川により切り開かれた地形で、かなりの急傾斜地である。現況は、水田および畠地で、いずれも高低差のある棚田や段畠となっており、その多くが石垣により築かれている。川に近くなるほど、その洪水堆積礫層となり、1m近い大石も含まれ、その規模の凄さがうかがえ、石垣の石材には事欠かなかったものであろう。

(遺構・遺物)

検出された遺構は、製鉄炉と溝、柱穴である。

A1地点では、平行する溝が2条検出されたほかは、自然流路と柱穴である。

A2地点では、製鉄炉が2基、並列して検出されたが、その平面プランは異なっており、東炉が正方形、西炉が長方形であった。西炉の操業廃棄後、東炉が操業されており、東炉にともなう廃滓坑と柱穴がわずかに残る程度まで掘平を受けており、西炉ではいずれも残されていない。

西炉は40×100cmで、檻の一部と床面がわずかに赤色化しているにすぎず、埋土にも焼土・壁・炭は多く含まれていない。対して、東炉は約60cm角で、壁・床面いずれも固化・赤色化しており、埋土も焼土等が多く認められる。

炉の廃棄後は40cmほどの堆積土、その上に現在の水田土壌がある。堆積土は旧水田層にともなうものと推定される。

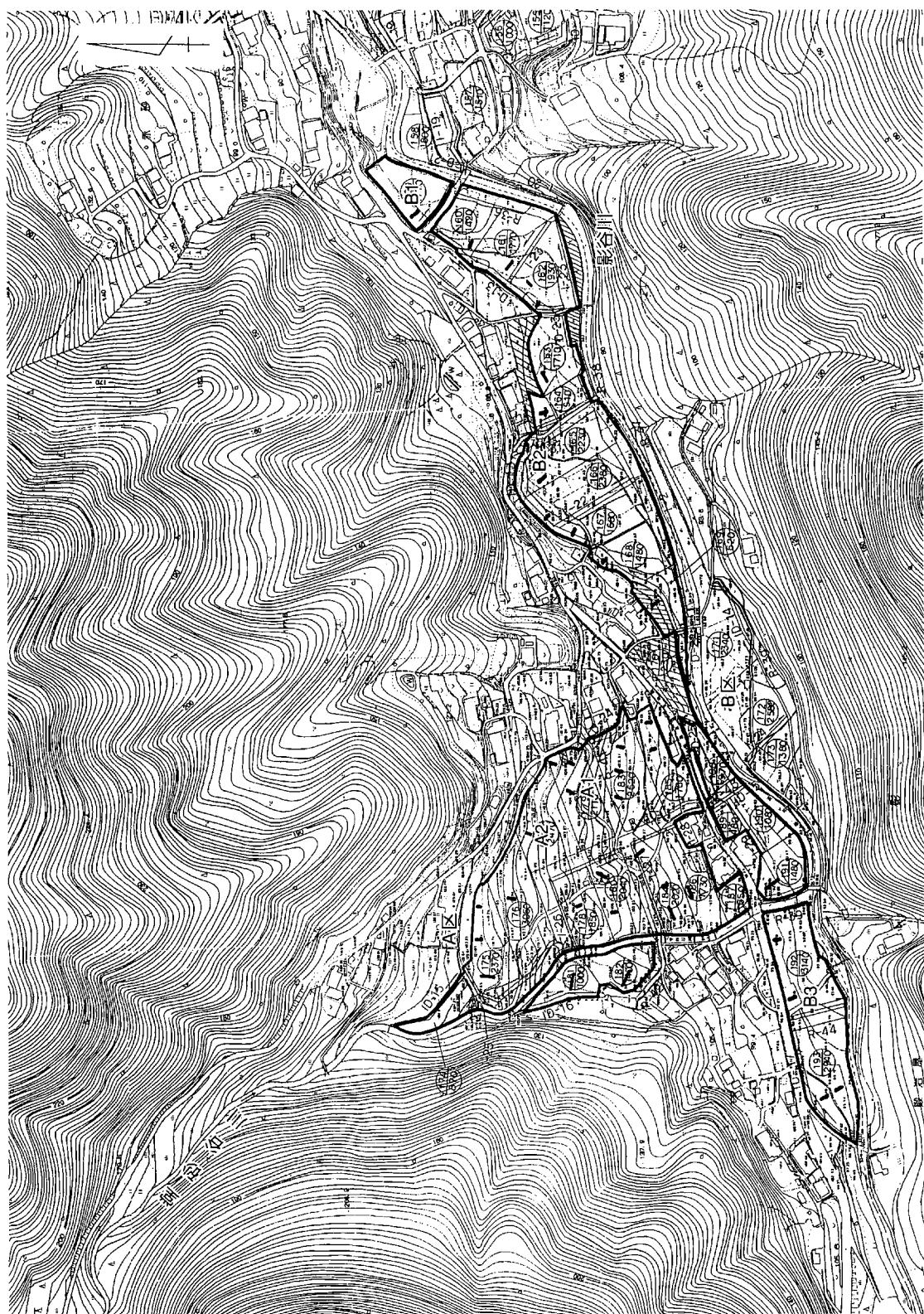
出土遺物は、鉄滓と弥生土器、須恵質土器等である。炉にともなう鉄滓はほとんどなく、山側の旧水田層より出土し、ほかにも炉が存在するもの



第55図版 上：製鉄炉

下：東炉本体

第47図 調査地位置図 ($S = 1/5,000$)



と推測される。また、弥生土器等も、現在の水田景観を形成するにいたった造成土等に混入したものと推測され、遺構にともなっていない。

(付・試掘調査)

B区は、平成13年度当初の工事実施で、前年度に表土のみが集積された工区である。その大部分は影谷川の氾濫原近く、部分的に丘陵先端部や谷奥部があるにすぎない。現況は大部分が水田で、わず

かに畠地がある。

トレーナー（17本）は切土となる部分に設定し、重機で掘削を行った。

遺構は、B 3で、上層断面の観察により旧水田層（旧耕作土・旧床土）を確認。

遺物は、中世～近世の土器片（土師質土器・須恵質土器・磁器）がわずかに出土した。

（まとめ）

発掘調査では、製鉄炉2基と、溝2条ほかである。炉は小さく張り出した丘陵の先端部に築かれ、わずかなスペースからこれ以外に築かれてないと判断した。ただし、山側については、ほ場整備対象地外であることから不明であるが、鉄滓が旧水田層より出土することから、ごく近くに1～2基が存在するものと推測される。

等高線には沿う溝は旧水田耕作にともなう用排水路、やや蛇行する溝は自然流路の枝溝で、自然流路はある時期の堂砂谷川からの氾濫にともなうものと考えている。

遺構の各時期は、遺物をともなわないことから決めがたいが、旧水田層が中世に遡るものと推測されることから溝が中世に、生産遺跡はその層の堆積以前に削平を受けていることから古代にまで遡るものであろうか。

また、試掘調査では、トレーナーの多くが礫層となる河原氾濫原であったが、B 1・2において遺物包含層、B 3において旧水田層が確認された。遺物包含層は周辺の状況から再堆積土もしくは現水田層の造成土と推測され、混入の高い散布地と判断した。旧水田層は現水田が小区画で、隣接地も一段低くなっていることから、平面的には畔壁を検出できる可能性はほとんどなく、時期も近世に入るものか。幾度かの土地改変によりわずかに残された旧水田層で、そのほかではすべて削平されたものと判断した。



第56図版 B 3 土層断面

（前角）

鬼ノ城　登城道および新水門の調査

所在地　総社市黒尾1141ほか3筆

調査期間　2000年9月18日～2001年3月12日

調査面積　約666m²

1. はじめに

総社市教育委員会が、「鬼ノ城」の整備に先立って発掘調査に着手したのは、平成6年度であった。東門跡を皮切りに、角楼跡・西門跡・南門跡を相次いで発掘調査し、北門跡の所在も確認した。調査の結果は、各遺構の遺存度がきめわて良好で、規模・構造の概要を把握するに充分なものであった。こうして外郭線については諸施設も含めて、昭和53年の学術調査⁽¹⁾と併せ、かなり具体的にイメージすることができるようになった。さらに平成11年度には、城内の確認調査が岡山県教育委員会によって実施され⁽²⁾、新たな礎石建物跡や鍛冶場跡なども発見され、城内の遺構についても展望できるようになった。発掘調査に着手して7年、かくして漸く整備の基本構想が具現化できるようになり、平成12年度には基本計画が策定されることになった。

こうした状況をふまえて、12年度の調査の主眼としたのは、登城道ないしは作業道の確認であった。これまでの調査を通じ、すべてではないにしても、城壁の構築に用いられた土砂や石材は、鬼ノ城を中心とした近隣周辺を含めた、いわば現地調達であった可能性がきわめて高いと考えられる。しかし、城門をはじめとする諸施設や版築土塁の構築に必要な木材については、鬼ノ城周辺の瘦悪林地という土質・地層からみて、主要部材となる大木が繁茂していたとは考え難く、他地域からの搬入と考えざるを得ない要素が多分にみてとれる。とすれば、それらの搬入のための作業道の存在は必然的に想定されるところであり、また四つの城門への麓下からの登城道も当然のことながら存在し整備されていたはずである。そうした想定のもとに、西門および南門、とくに西門を中心に調査を進めた。なお、南門への登城道については年度末ごろになって、翌年度から整備実施事業に着手できる可能性がたかまつたため中止し、実施事業のための先行調査に切り替えた。

今年度の調査は、結果的には目的を達成することができなかったが、新たに水門を確認し、さらにその下方で木製品などを検出することができた。

整備委員会は、第11回委員会を平成12年10月25日に、さらに第12回委員会を平成13年3月1日に開催した。諸先生方には、ご多忙にもかかわらず現地でのご指導ご助言をはじめ、整備基本計画案のご検討ご提案など、多大なご支援をいただいた。また文化庁、岡山県教育委員会など関係機関各位からもご指導ご助言をいただいた。銘記し深く謝意を表します。

なお、整備計画の進展に伴い、建築の専門家として国立歴史民俗博物館教授の濱島正士氏を新たに整備委員にご推薦いただき、同氏のご快諾を得て平成13年3月28日よりご就任いただいた。

鬼城山整備委員会

委員長　　坪井清足（元興寺文化財研究所所長）

副委員長　近藤義郎（岡山大学名誉教授）

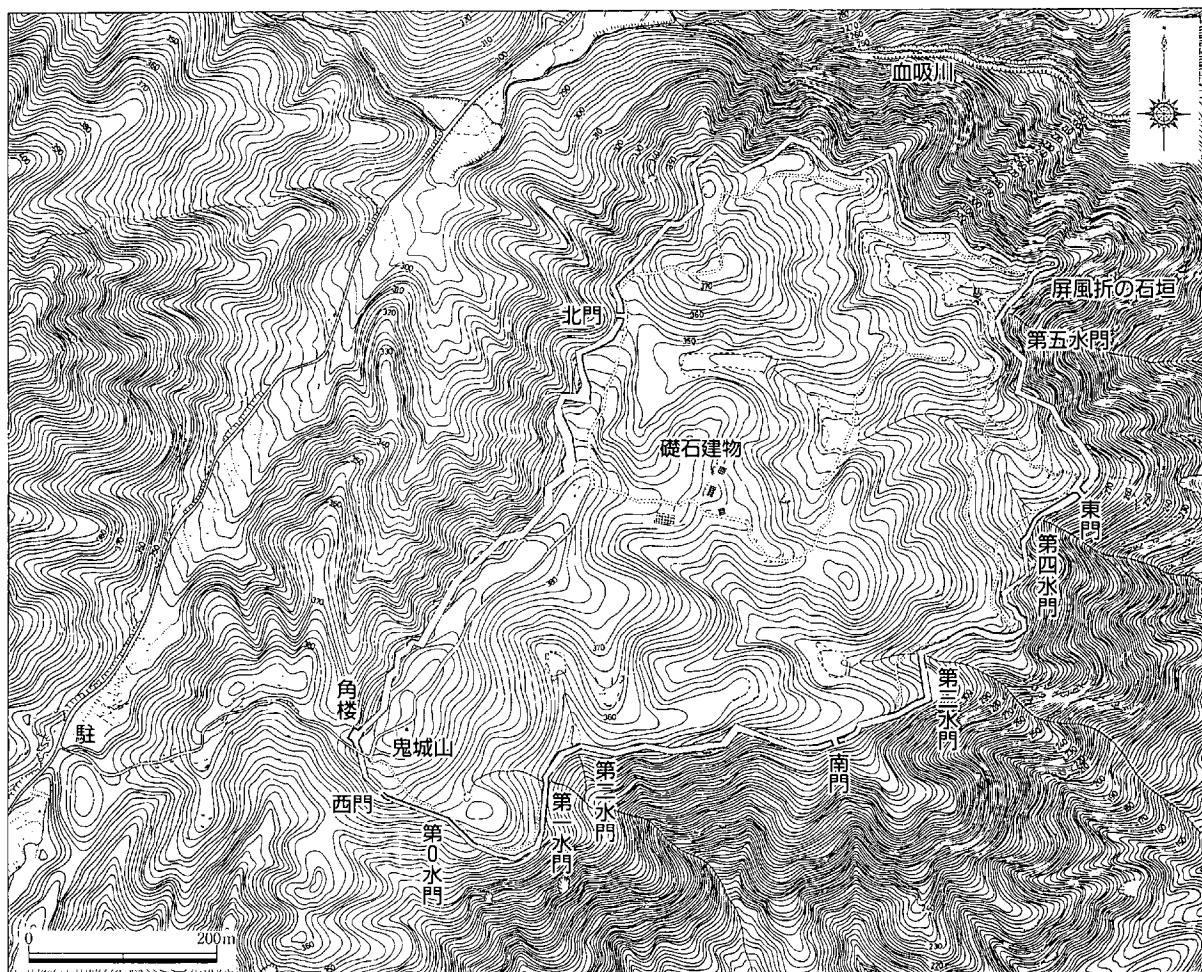
委員　　水内昌康（元岡山県文化財保護審議委員）

高橋 譲（ノートルダム清心女子大学教授）
 狩野 久（京都橘女子大学教授）
 濱島正士（国立歴史民俗博物館教授）
 河本 清（くらしき作陽大学教授）
 葛原克人（岡山県立博物館館長）
 高瀬要一（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景室長）

また、下記の方々には、現地で多くのご指導ご教示をいただいた。記して謝意を表します。

小田富士雄 武末純一 福本 明 岡田 博 龜田修一

本年度の調査は、村上幸雄・松尾洋平が担当し、実測・製図は松尾が行った。なお、執筆は出土遺物を松尾が担当し、他は村上が行った。

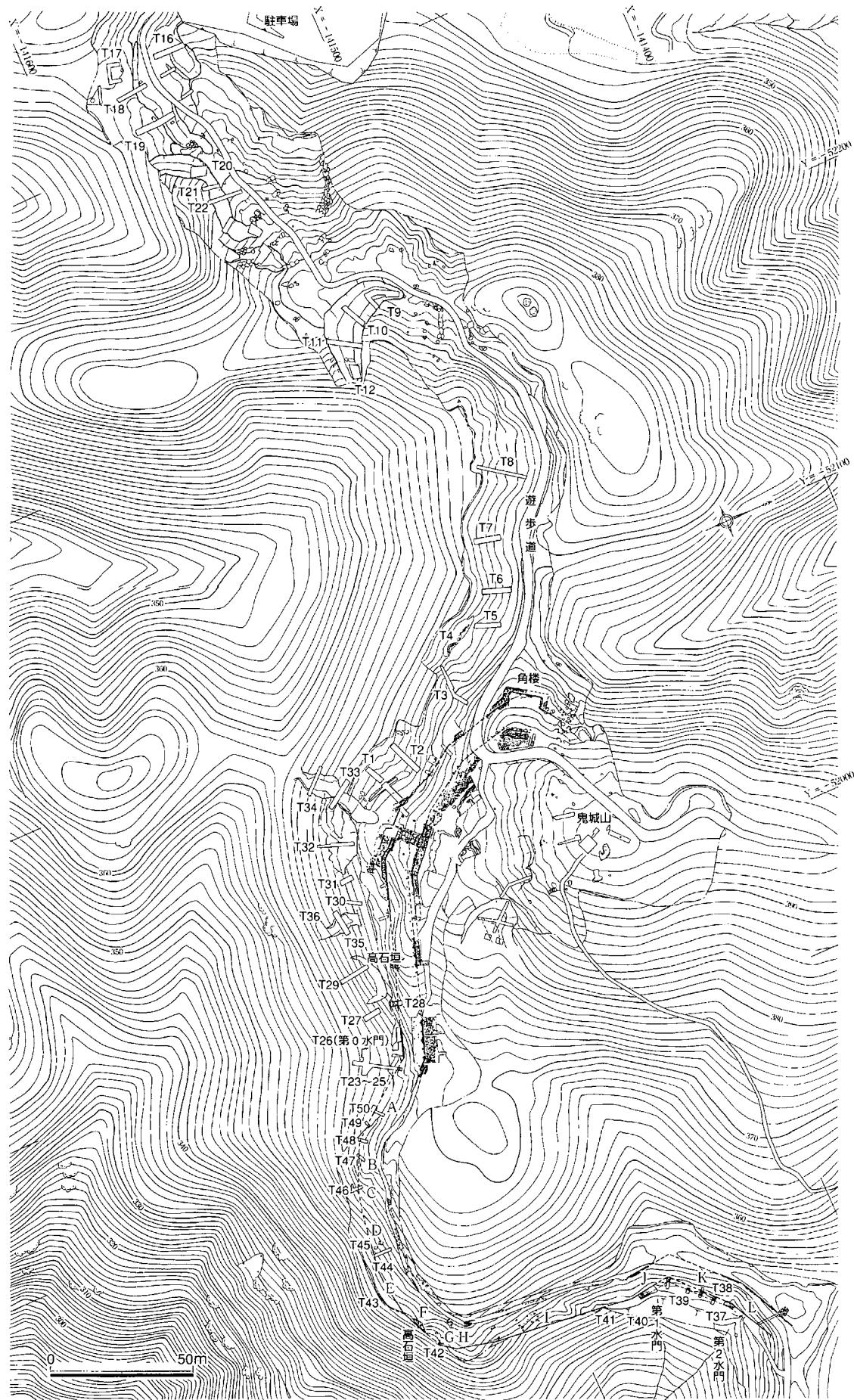


第48図 鬼ノ城平面図 ($S = 1/8,000$)

2. 調査概要

平成10年度までの調査で、城内からみて右側の西門の前面には登城道らしい形跡は認められなかつた。しかし、左側には麓下から登城道の最終地点にあたると考えられる幅2.5mの敷石帯が検出されており、大きな手掛けりになると思っていた。

調査は城門の右側前面から駐車場方向へ順次トレンチで追い、ついで左側は空撮の都合もあって西門から東約100mあたりから城門側へ追跡することとした。この過程のT23で木製品が出土したため



第49図 調査地全体図 (S=1/2,000)

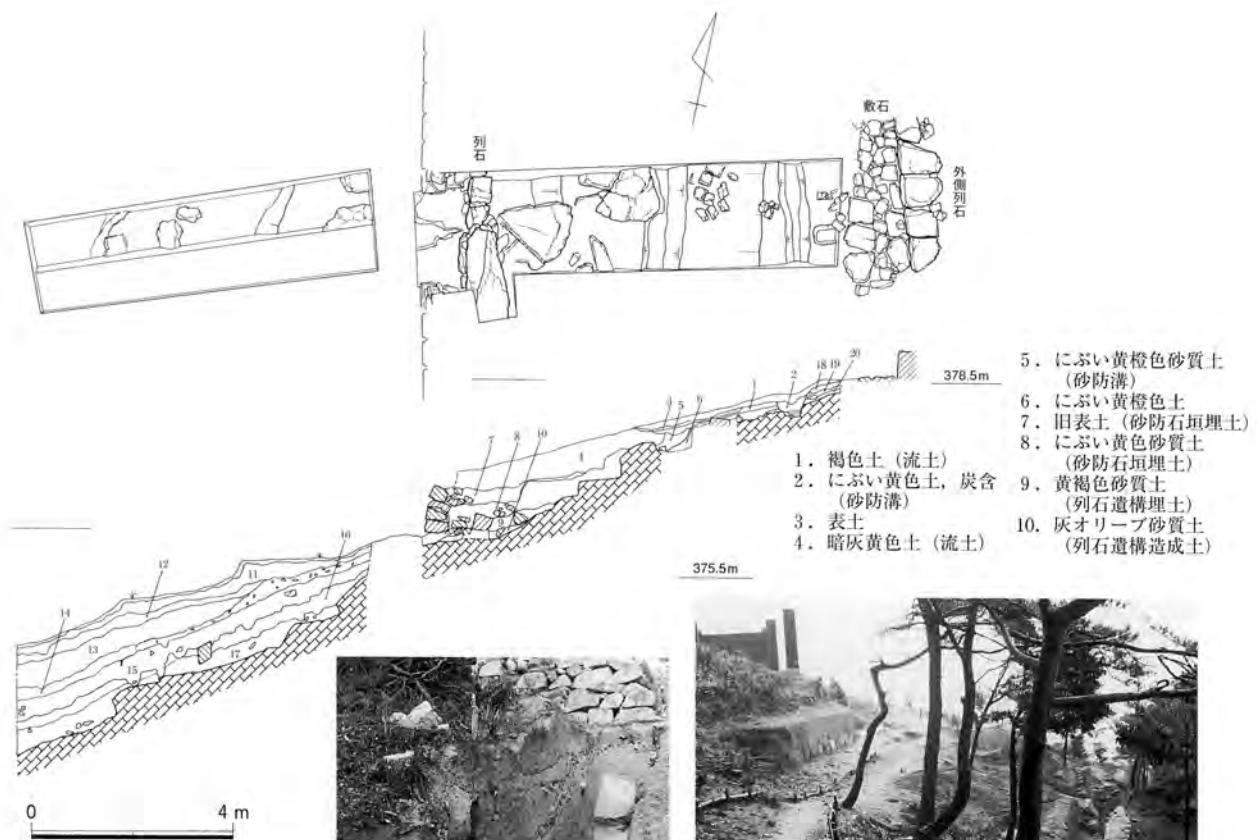
T 13~T 15は欠番 A~L は表 3 参照



第50図 西門付近平面図 (S=1/400)

T26を設定し、新たに水門を確認した。その後、翌13年度から整備事業に着手できる見通しとなったため、翌年の事業を考慮して新水門から第2水門までの間の城壁外側ラインの確定をめざし、トレーニング調査を続行した。なお、この区間の城内側（城壁の内側列石と城内側敷石）については、殆どが遊歩道と重複していることもあり、付替道が早急にできないこともあって、今回は調査を実施していない。以下に各トレーニングの概要について報告する。

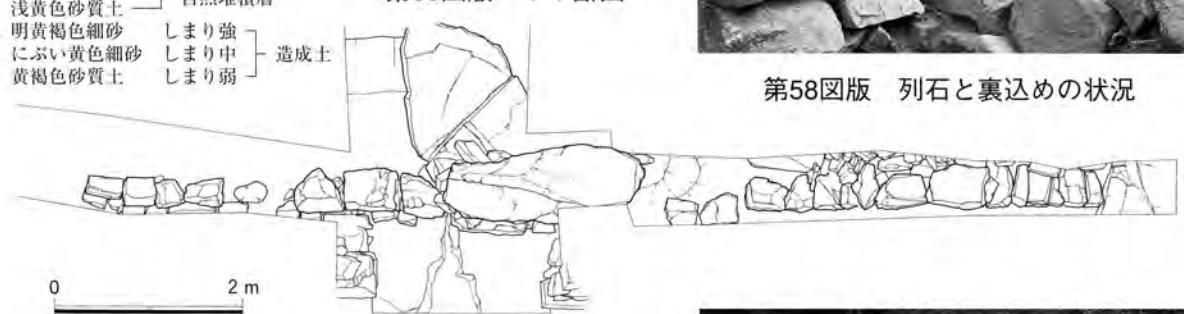
T1 当初西門右側前面で、外側列石から近代の砂防石垣の手前8m余に設定した。石垣は高さ1m



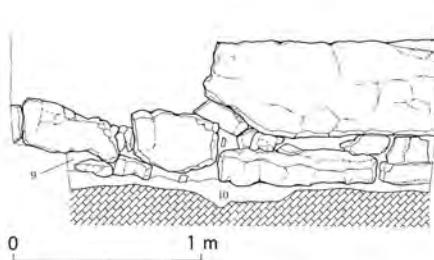
第51図 T1 平・断面図
(S=1/150)

- 11. 明黄褐色砂質土
- 12. 灰黃色微砂
- 13. にぶい黄色砂質土
- 14. 暗灰黄色砂礫土 (造成土)
- 15. 黄褐色砂質土
- 16. 明黄褐色砂質土
- 17. 浅黄色砂質土
- 18. 明黄褐色細砂
- 19. にぶい黄色細砂
- 20. 黄褐色砂質土
- 流土
- 自然堆積層
- しまり強
- しまり中
- しまり弱

第60図版 T1 断面



第58図版 列石と裏込めの状況



第52図 列石平・立面図 (S=1/80, 1/40)

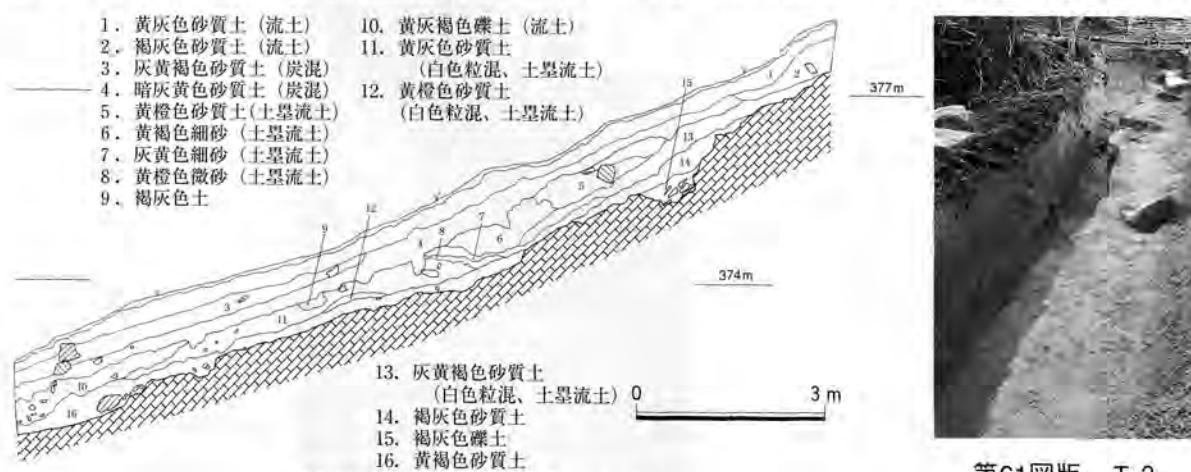


第59図版 列石と砂防石垣

長さ15m余で、左端は露岩に接している。城門に最も近いところであり、道が存在する可能性の高いところである。地山面までは浅く、敷石の転石や砂防工事の際の肥料溝を2条検出したものの、道のための造成面と考えられる面は、すでに削平されているのか確認できなかった。ところが石垣の背面で、一段ではあるが列石らしい石材を検出したのでトレンチ内を掘り広げたところ、花崗岩で100×50×30cm大の長方形石材を2段目に据えていることを確認した。この新たに検出した列石の裏込土の状況と、石垣にそれとは明らかに異なっており、どの程度の時期差があるのかは不明ながらも、列石と石垣に新旧関係のあることは確実である。そこで列石を左右に追跡するとともに、石垣前面に6m余のトレンチを新たに設定した。列石はトレンチから右側へ3m余、左へ5m強が確認され、左端は城門前面の溝状の窪みの右肩口にある露岩のところまで並置されていた。列石は全長で11m弱となり、ほぼ直線状に並ぶ。新しく発見された列石は、上面の平らな板状石の上に少し控えて並べていることに特徴がある。裏込土中から一片の須恵器が出土している。石垣前面のトレンチでは、地山はかなり下降するが14層は他層に比べ小礫が多く混入しており、造成面の可能性がある。

このような状況からみると、城門の構築にあたってかなり広い範囲にわたって造成するとともに、城門前面の地盤の強化と安定、さらに平坦部をつくりだすことを目的に列石が並べ置かれたものと推定される。列石は現状は一段であるが、本来はもっと高く最低でも0.7m以上の石垣であったと思われ、それが近代の砂防工事の際に石材が抜き取られ転用されたものと推定される。トレンチ内の長方形の大型石材が残ったのは、たまたまそれが大きかったからであろう。昭和12、3年ごろのこの地の砂防工事に携わり、現在鬼ノ城の発掘作業に従事している地元の作業員の人によると、砂防工事は人力のみによる作業であり、このように大きな石は扱わないとのことである。当初の高さは不明ながら、位置や前面の造成面らしい土層からみて、この石列－というより当初は石垣が城門前面の地盤の強化、安定と防御のために積まれたらしく、いまは後世の削平、改変等により痕跡さえもうかがえないものの、列石（石垣）と城壁の間を道として利用した可能性は高いと考えておきたい。城門の前面は堅堀状溝（このように仮称しておくが、T9～12、T15～21を設定したところのものとは用途、機能を異にするのかもしれない）があり、城門左側前面は小崖状となっていることを付記しておきたい。

T2 T1では確認できなかったものの、石列と外側列石の間が道として利用されていた可能性は状況的には高いと考えられたので、10mほど西にトレンチを設定した。この地点は斜面ではあるが、ごく小さい谷状部となっている。各土層は地山の傾斜と同じように緩やかな下降傾斜をしており、造成層とみられる層はすでに流失したのか、もともと存在しないのかはわからないが、検出できなかった。

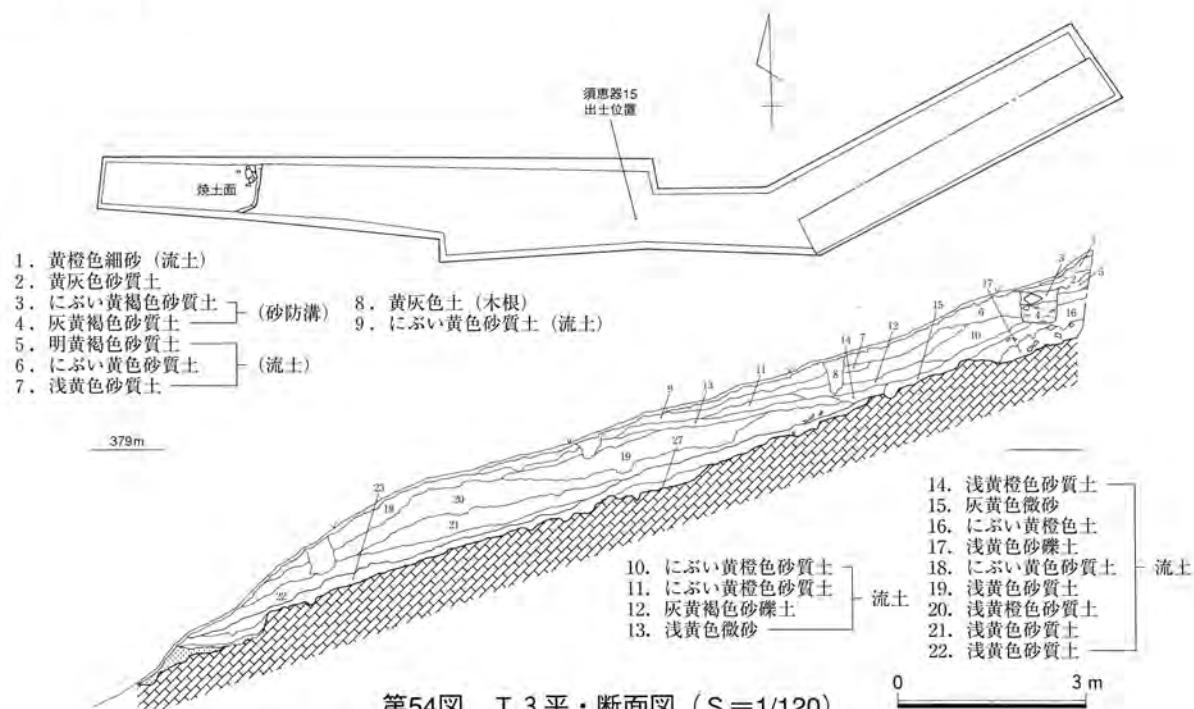


第53図 T2断面図 (S=1/120)

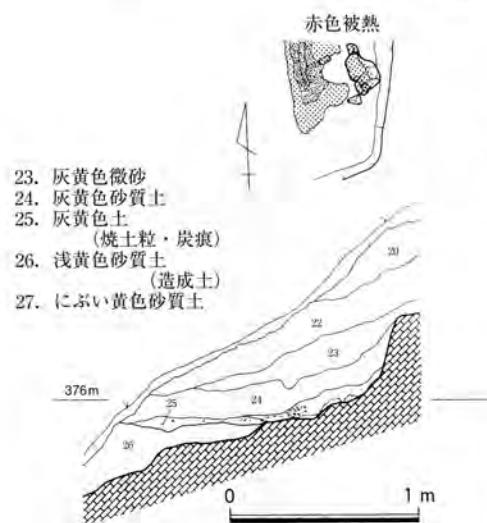
第61図版 T2

上層の土層は、版築土壘の崩落土である。

T 3 T 2 の30mほど北西で、角楼の南の遊歩道の下の斜面である。下刈り後の斜面をみると、斜面の中ほどに標高379mあたりに不自然な小平坦部があるので、長さ15mのトレンチを設定した。地山は緩やかに下降しているが、トレンチの中ほどあたりで、地山直上の20層から高台付の須恵器壺の底部片が出土した。さらに掘り進むとトレンチの端に近いところで、地山を50cmほど掘りこみ、前面を造成した面を検出した。周辺は被熱赤化しており。また表面が高温を受け暗青灰色を呈す焼土塊も数片出土した。上層の土層は、角楼周辺からの版築土壘崩落土である。このトレンチでは、出土した須恵器の時期に地山面まで露出していたことになり、また被熱痕跡のある端部のあたりでは、高温を用いる作業が行われていたと推定される。ただ、その拡がりについては、トレンチを拡張していないので不明である。



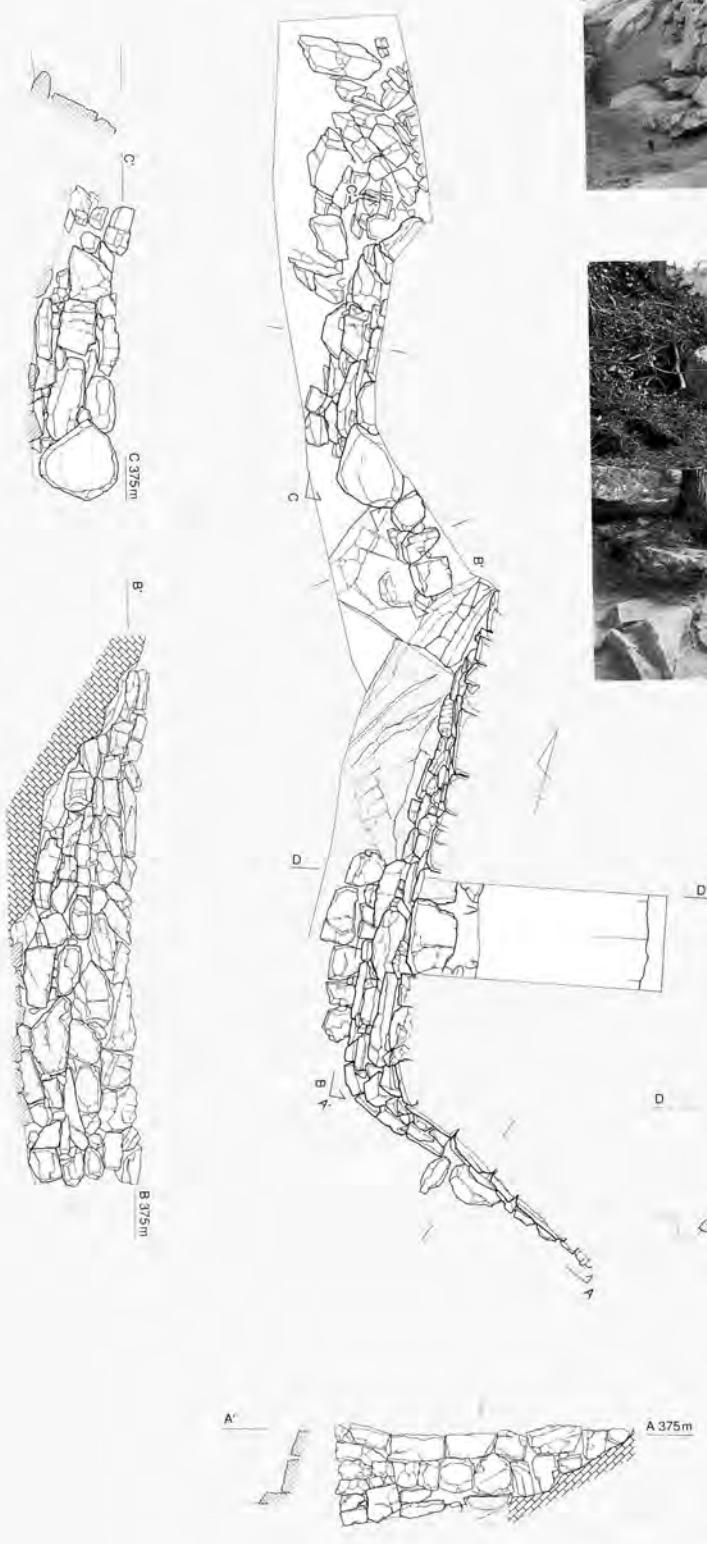
第54図 T 3 平・断面図 (S=1/120)



第55図 T 3 焼土面平・断面図 (S=1/40)



第62図版
T 3 焼土面



第56図 T 4 石積遺構平・断・立面図 ($S=1/80$)

- 65 -



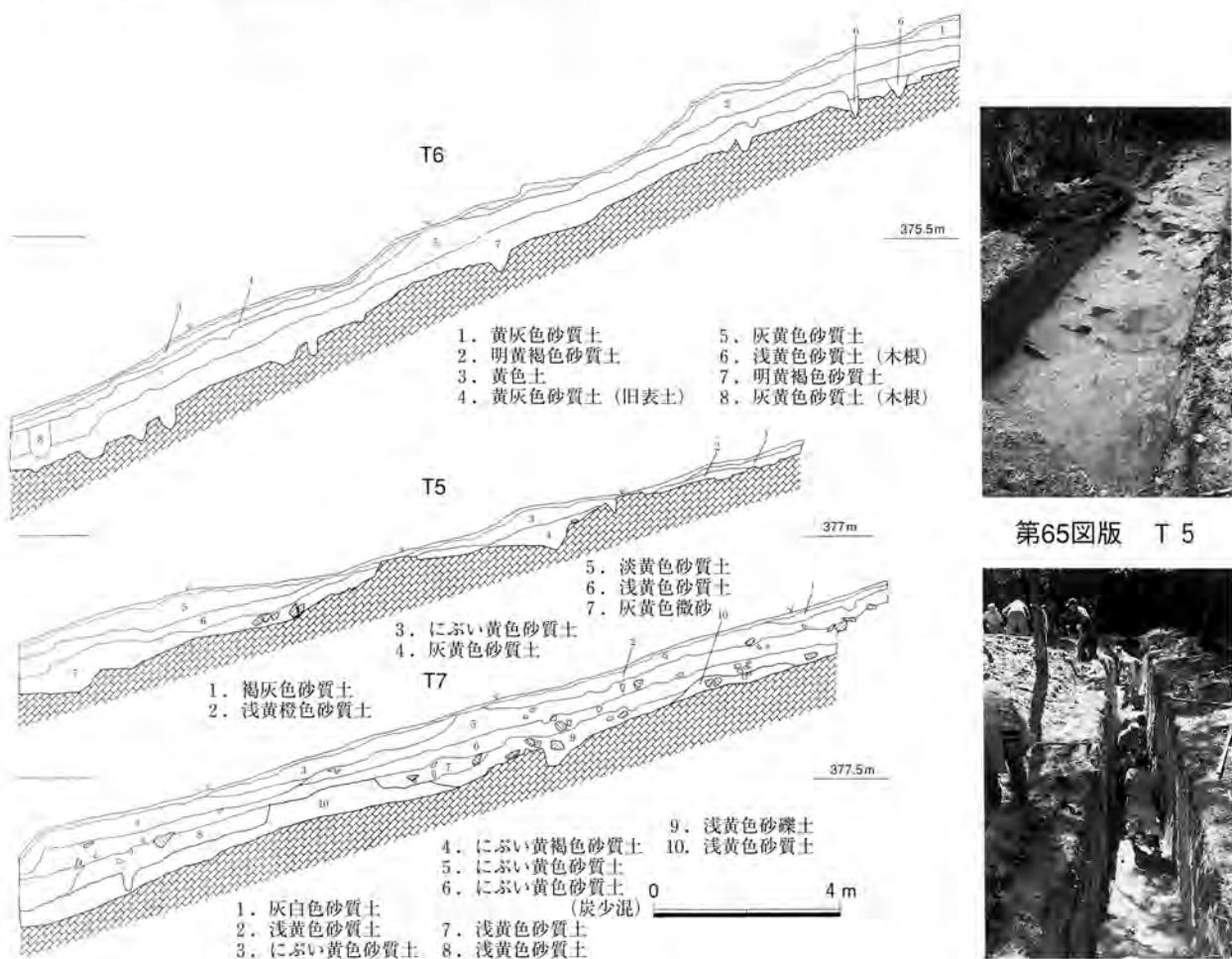
第63図版 石積の南面



第64図版 石積の西面

T 4 下刈り作業中にT 3の下方で、砂防らしい石垣をみつけた。当初はこの山一帯によく見かける砂防石垣と思っていたが、仔細に観察すると何となく上半と下半の石積みに相違があるように思われたので、付近一帯の清掃を行った。

石垣は平面的にみると三箇所で鈍角的に折れ曲がっており、全体で14mほどになるが、西端付近に崩れた石材が散乱しているから、もう少し長くなるかもしれない。高さは最高部で1.1mである。石材の大きさは50cm前後のものが多く、1mを超えるものはない。最下層に上部の平坦な板状石を置き、20~30cmほど控えて上段を積んでいる。石材の大小があるから一概にはいえないが、中央部では上半2段と下半の間に横目地があり、それが全体を通り、上下の石積みに違和感がある。そこで石垣の中央部背面に土層観察のサブトレーンチを入れたところ、土層的にも上2段を境にして上下2層に分かれることが確認された。遺物の出土がないから時期は不明だが、ある時期に下部に石積みが行われ、のちになってそれを利用して積み足されたものと推定される。この石積みの背面には平坦地がかなりあり、距離的にみてもT 3の焼土塊の出土した造成面とは近接しているから、関連があるのかもしれない。T 5~7 T 4の北に隣接し、ここにも小平坦面があるので設定した。下方になるにつれ、堆積はやや厚いが、上方はごく薄い。地山はアブライト岩である。遺構、遺物はない。T 6はT 5の西10mに設定。角楼の前面は南北から二つの谷が入り込んだ鞍部となっているが、その南側斜面にあたり自然堆積層のみである。T 7はT 6の西20mに設定。T 6よりやや緩い斜面で、堆積層中には礫の混入が目立つものの、自然堆積層である。



第57図 T 5・6・7断面図 (S=1/80)

第66図版 T 8

T 8 T7の西20mに設定。長さ20mのトレンチの中央部は、地山まで3mの堆積があった。調査中の休日に、対策は講じていたにもかかわらず、雨水で崩落埋没したため放棄せざるをえなかった。トレンチ上方には標高387mのたかまりがあり、その南斜面に設定したのだが、それにしても堆積土の厚さには驚くばかりである。調査過程のトレンチでは遺構、遺物ともに確認していない。

このT 8から西方にかけての斜面は、南から谷が入り込んだ急傾斜面であり、地形的にみても遺構



第58図 T 9～22配置図 (S=1/800)

の存在は考えられそうなく設定していない。

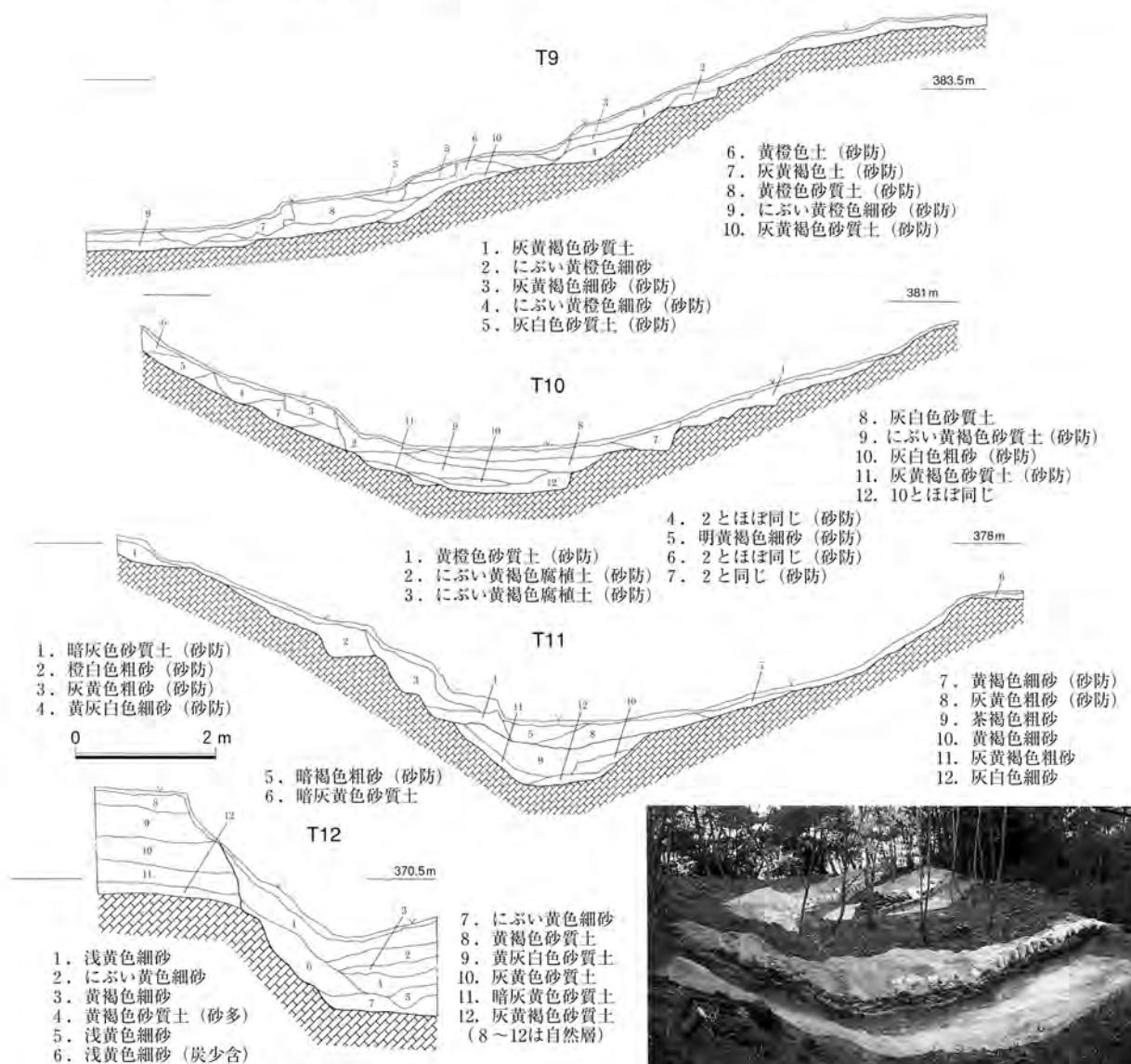
T 9～12 駐車場から急坂を上がりきったところの標高382m付近で、ここから角楼までの遊歩道はほぼ平坦である。この地点から南へ尾根がのびており、頂部平坦面のすぐ下の東斜面に幅広の「く」



第67図版 壁堀状溝の下部



第68図版 壁堀状溝の上部



第59図 T 9・11 (S=1/100) T 10 (S=1/80)
T 12 (S=1/60) 断面図

第69図版 T 9・10

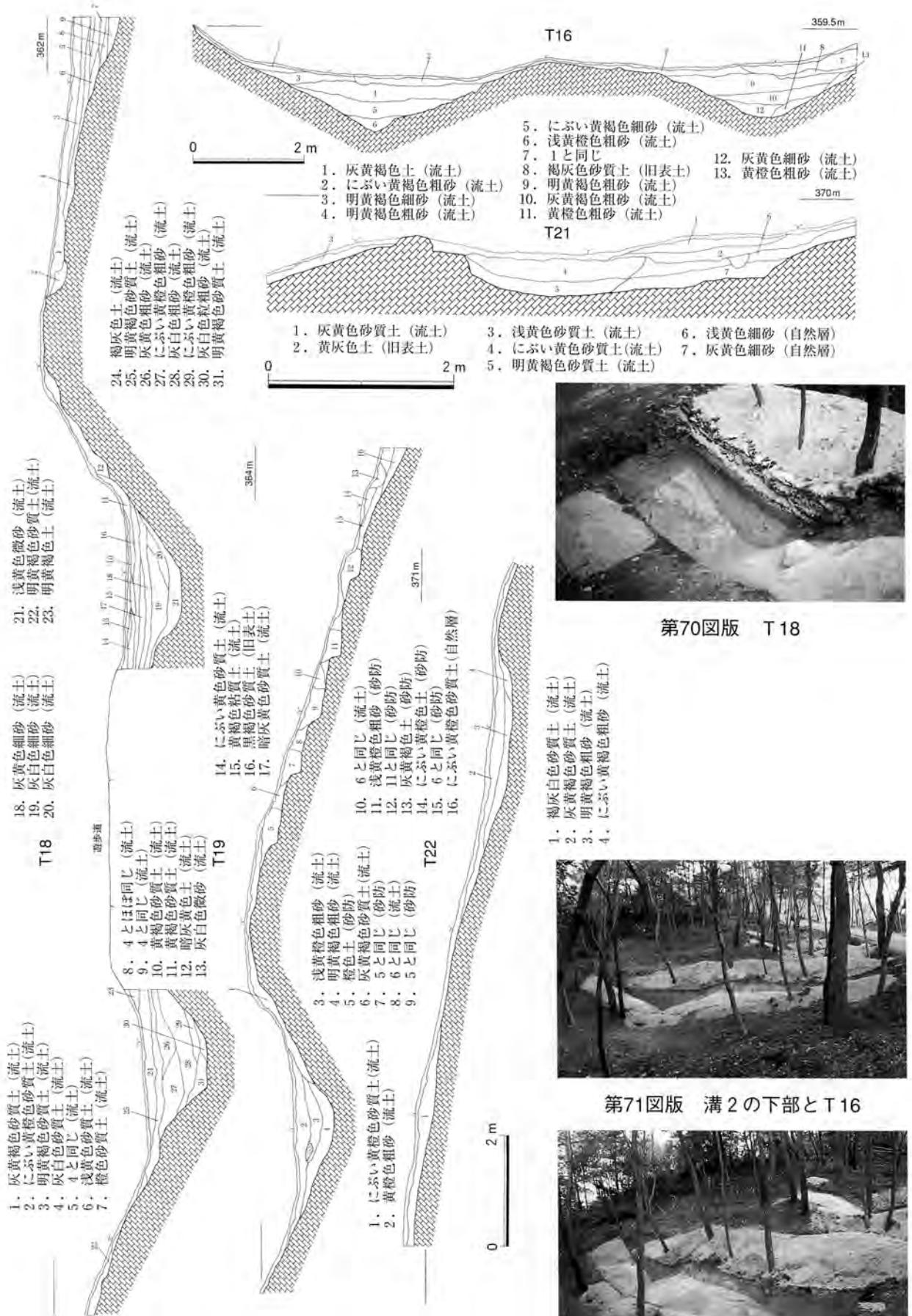
の字状に折れ曲がった大きな豊堀状の溝（適切な用語ではないが、このように仮称しておき、これを溝1と称す。）がある。溝の中には幾段もの砂防土段が設けられている。溝は全長約50m、最大幅約16mの大きなものだが、開口部には露岩があるためかどうかはわからないが、急に狭くなつて幅1mほどしかない。下刈り前の状況は、雑木や下草が繁茂し充分に観察できなかつたが、距離的に近いということと立地からみて、T16～20を設定したところにある豊堀状の溝と一体的機能をもつか、あるいは関連あるものとして、漠然とながら道を想定できるのではないかと考えていた。

T9は上部先端から中軸線を通り、一方の肩部までを含むL字状に設定した。堆積土はいずれも薄く、中軸線の地山は20度ほどの下降傾斜を示す。一方、横断側の地山は肩部あたりは深いが、中軸線に向かってきわめて緩い状態である。中心部近くのT10は、地山面までは緩く弧状になっているが、中軸線部分あたりと肩部では8mの比高差をもつ。T10の下方のT11では、V字状の肩口部を押し広げたような形状となり、中軸線部分は幅狭く深く、比高差は10mを超える。先端開口部となるT12では急激に狭くなるが、掘り込まれた角度は急となる。遺物はいずれからも出土していない。

このくの字状に曲がった幅広の溝は、雨水により削られ自然発生的に形成されたものとは考えにくい。立地するところは頂部から斜面にかけてのところであり、従って上方からの雨水の流量は決して多くない。仮にそうだとしても、溝状をなす現在の形状は不自然である。遊歩道を挟んだ西側に似たようなものもあるが、立地や形状が異なっている。遺物の出土がないから時期は不明であるが、何らかの目的で人為的に掘削されたものと考えるのが合理的である。もし雨水による掘削があるとすれば、その後であろう。

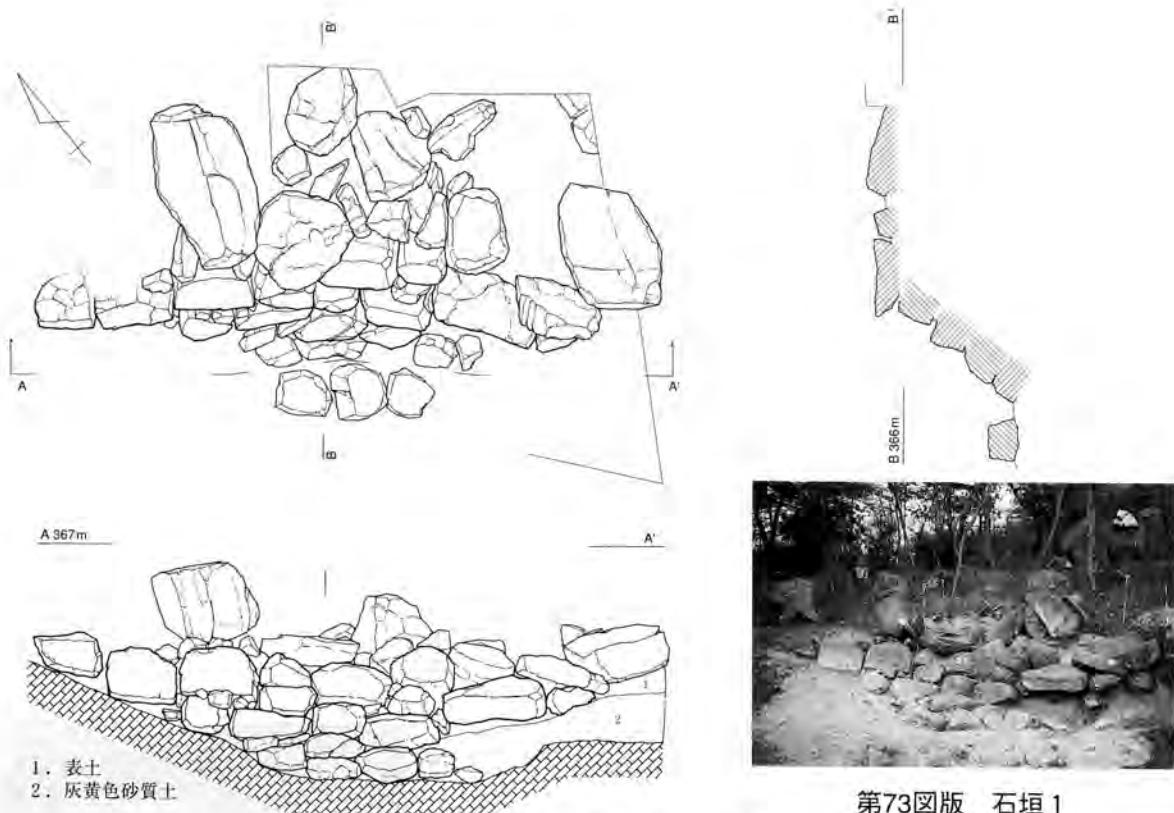
なお、T13～15は欠番となっているが、これは上記の溝1のある尾根の西斜面、T22と小さな谷をはさんで向い合うところで三ヶ所に石垣や石列があり、発掘調査は行わなかつたが、清掃し撮影した時に付番したためである。三ヶ所が接近した状態で、長さ4～6m、2段積みと1段のみのものがある。共通するのは下に平らな石を置き、20cmほど控えて上部を積む手法である。上端に捨石状に石材があったり、転石かと思われるような大きな石材がのっているものもある。上方には大きな露岩群があり、周辺の観察では遺構が存在するとは思えない。

T16～21 T9～12を設定した溝1のある尾根からは、南へ下降する大きな尾根と西の駐車場の方へ下降する小さな尾根がある。西に下降する小尾根には、駐車場から鬼ノ城への急坂の進入路が稜線上を縦走している。この進入路に分断された一条と、進入路右側の南斜面に二条の豊堀状溝がある。駐車場に近い溝2は頭部が三つ叉状になつてなり、最大長約65m最大幅20mもあるが、T9～12を設定したところの溝1に比べると浅い。中間にある溝3は、全長約50m最大幅8m。高い位置にある溝4は全長約25m、最大幅8mほどだが、溝3、4の二条は三つ叉条の溝2に比べ浅く、頭部はあまり明瞭ではない。三条とも幾段かの土段や低い石垣が1、2ヶ所に設けられている。調査前には雑木や下草が繁茂し、この三条の溝があたかも一条のもののように観察され、そのため道を想定した次第である。T15は三つ叉状の部分から進入路の左側にかけて設定したもので、地山は鈍いW字状の断面となり、進入路の南側にもう一条あることから、頭部が三つ叉条になることは間違ひなく、中央部から下で合して一条になっている。開口部は駐車場の工事で削られているが、狭くなる傾向がみられるのは溝1に似ている。深さは1～1.5mである。T18は進入路を挟んでいるが、南側では1.7mほどの深さで、肩口から南斜面は谷頭まで緩い傾斜が続いている。溝3のT19はやや幅広の断面形状となるが、地山の一部は近代の砂防工事で段として削られている。T20の地山は皿状に浅く削られている。他の



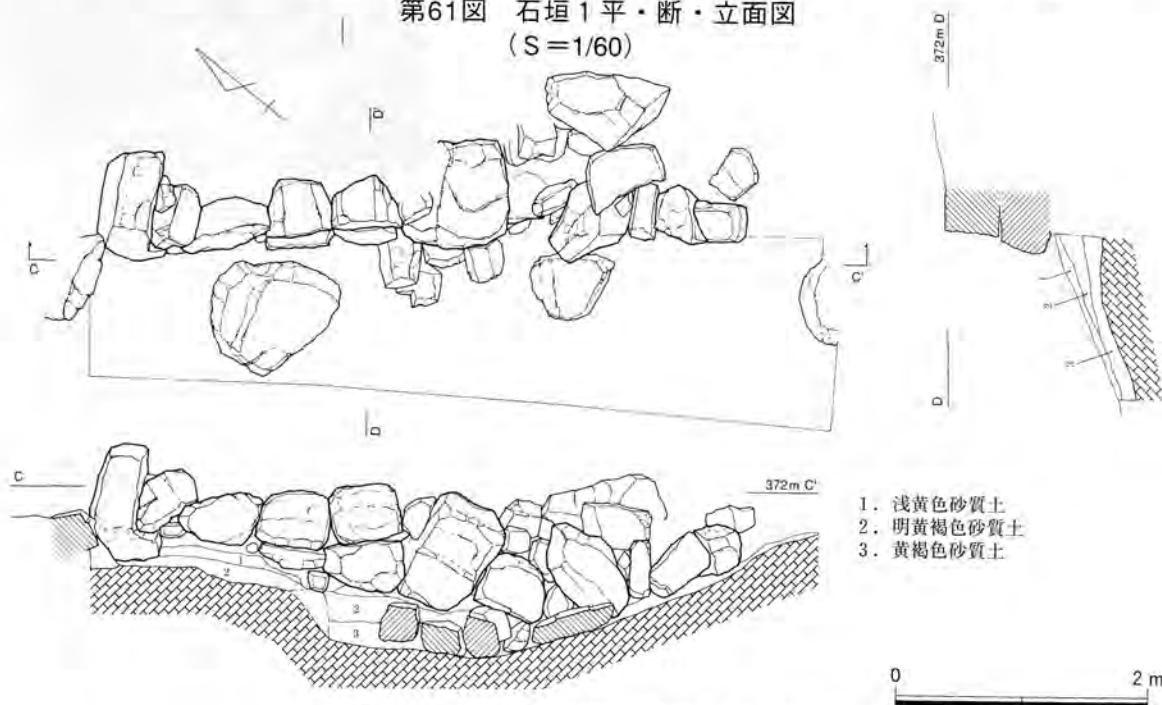
第60図 T 16・18・19・22 (S=1/100)
T 21 (S=1/60) 断面図

第72図版 T16



第73図版 石垣 1

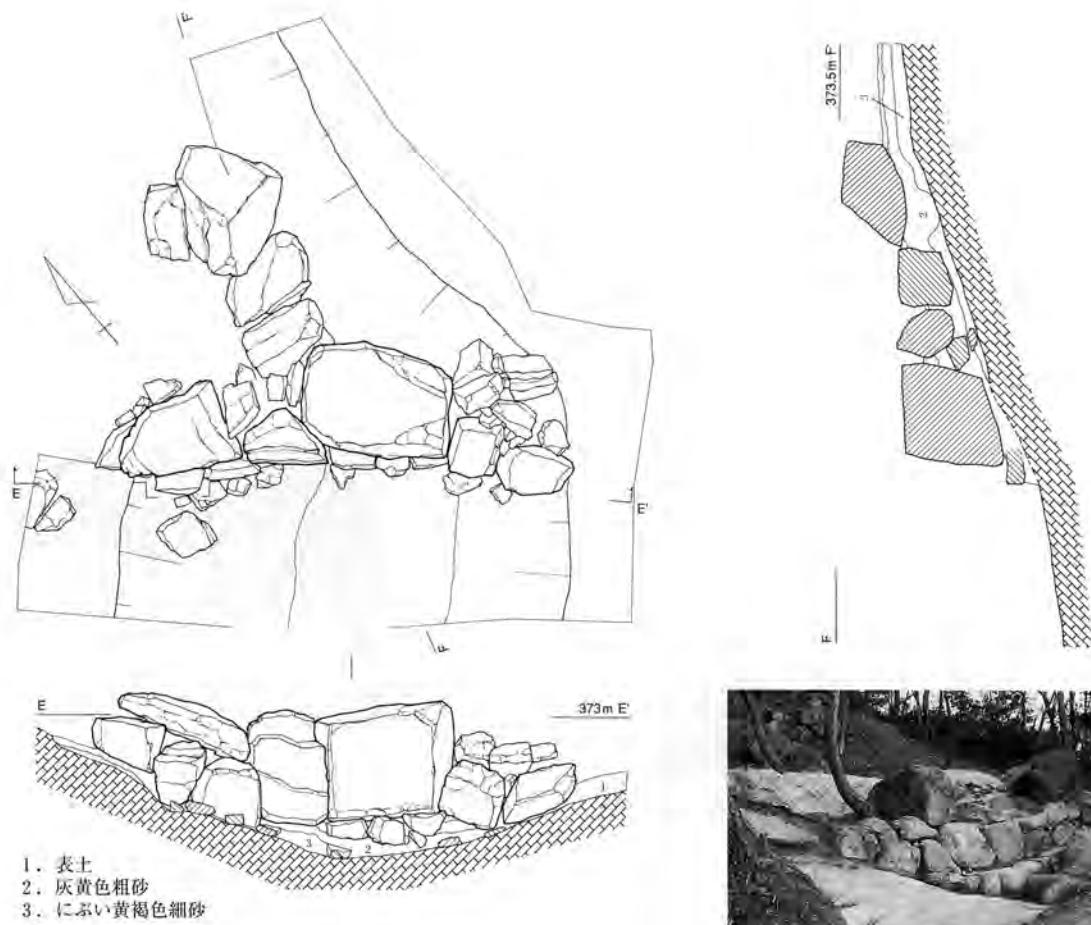
第61図 石垣 1 平・断・立面図
(S = 1/60)



第62図 石垣 2 平・断・立面図 (S = 1/60)

トレンチも同様の傾向にあり、浅い皿状の形状である。T16, 22は小さいがやや平坦な地形が観察されたので設定したものの、遺構、遺物ともに検出されなかった。

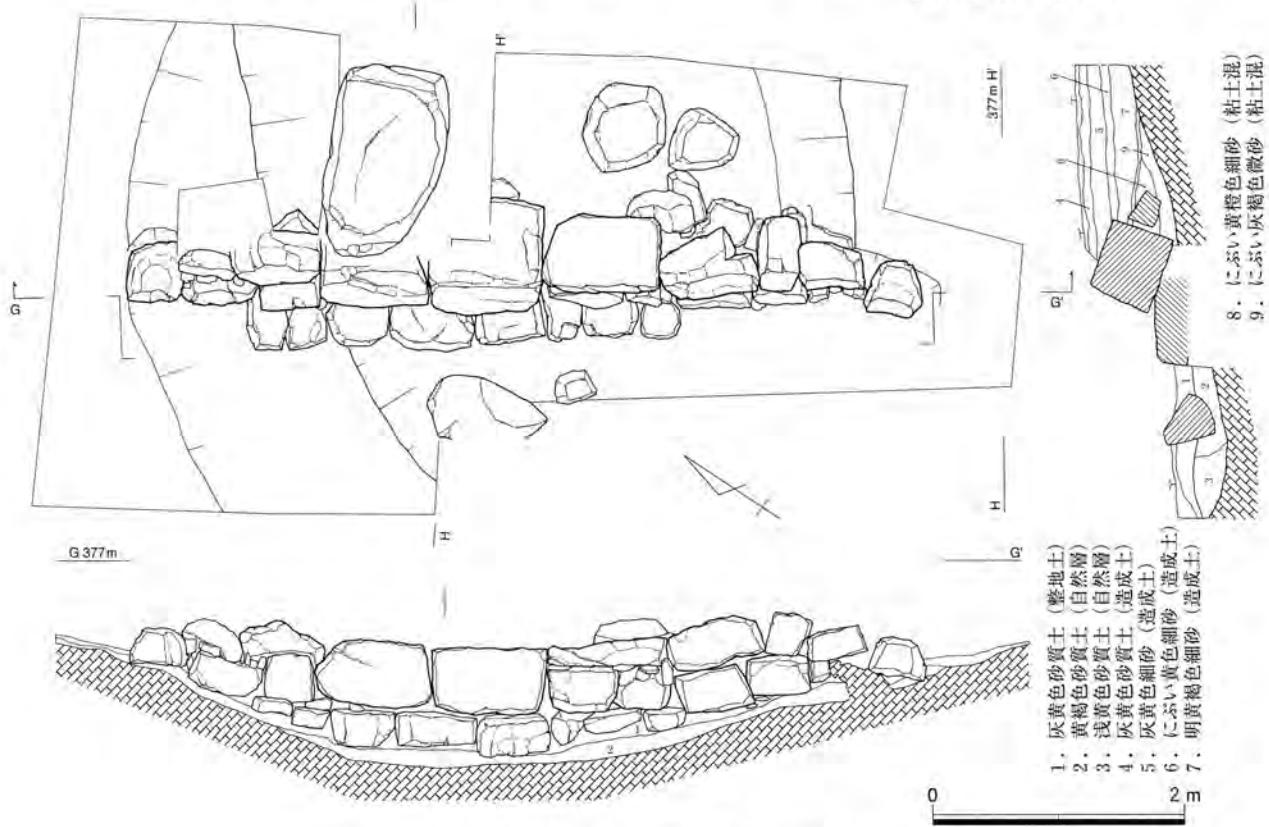
これら三条の溝には1, 2段の小石垣が築かれている。溝内を塞ぐように築かれているが、溝底の形状から当然のことながら、両端は1段、中央部は複数段となる。上端は高さが揃っている。上端から石垣背面には、石垣1のように整然と置かれたらしいものや、石垣3のように中央部が浅く、溝内を横断して列状に置いたものもある。しかし共通するのは、石垣中央部とその周辺の最下石の下には、まず平らな面をもつ板状石を置き、20~30cm控えて石材を積む手法である。板状石を溝中に置くのは、



第63図 石垣3平・断・立面図 (S=1/60)



第74図版 石垣4



第64図 石垣4平・断・立面図 (S=1/60)

溝内とくに中央部が深く削られているため、高さを揃えるとともに石材の安定を図るためであろう。両端は地山を削り整えるか、埋め出している。これに対し、斜面に築かれた石垣は基底面が同じ高さになり床面も安定しているから据え置くのみである。これらの石垣の石材は最大でも50~60cm大のものが数個含まれるだけで、どうにか人力で動かせる程度の花崗岩が多い。

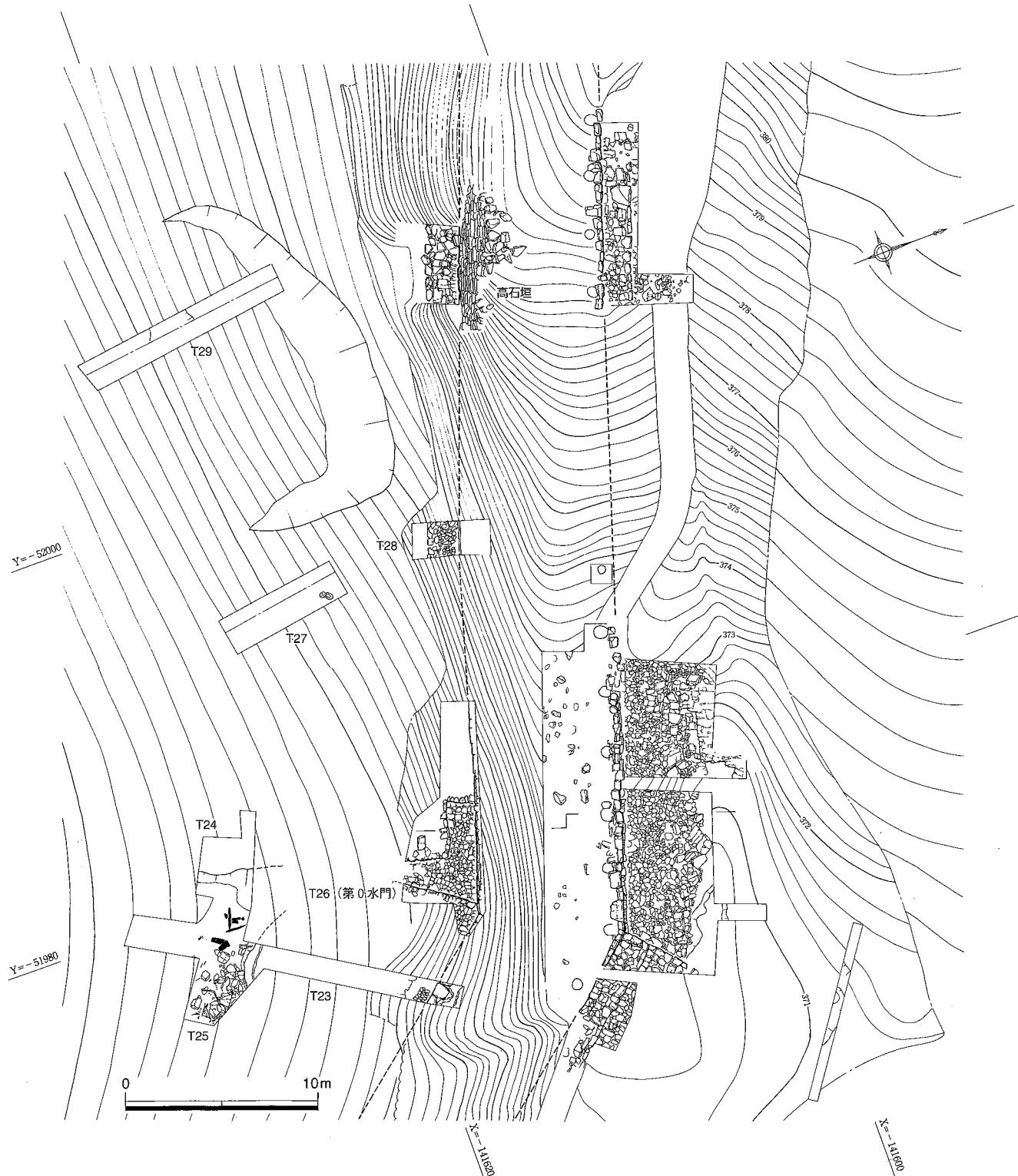
以上、西門の前面から駐車場方向にかけて、道とくに作業道の存在を想定した調査の概要をみてきた。残念だが、道の存在を証明する遺構は検出されなかった。最後に一、二のことについてふれ、まとめておきたい。

一つは、堅堀状溝と称したものである。溝1は規模も大きく、底面の地山の状況や立地からみても、これが雨水によって削られ、いまみるような形状のものになったとは考えにくい。立地からみて、上方からの雨水の流入は殆どない。溝2~4は尾根上もしくはその周辺に所在するから、上方からの雨水の流入は溝1よりは多いであろう。しかしその形状は、雨水流入に起因するとは思えない。かつて筆者は、久米町内において鉄穴流し遺構と称するよく似た形状のものを掘ったことがある。尾根上や斜面を幅広く長く掘削していた。規模において異なるものの、この溝1~4も良く似ており、いつの時期か不明だが、何らかの目的で人為的に掘削されたものと考えられる。その後地山までが露出していたこれらの溝は、雨水によってどの程度かは不明だがさらに削られたのであろう。やがて近代になり、土砂の流失が著しいことから、防止の手当が講じられたものと思われる。溝内にみられる土段や石垣がそれであり、地元では砂防段や砂防石垣と称されており、またその作業に従事した人達も多い。石垣1~4もそうした砂防石垣である。

では溝の形成が自然要因ではなく、人為的なものであるとすれば、その目的はどのようなものであったのだろうか。鬼ノ城が利用された時期は限られており、一つは古代山城として、もう一つは古代の山上寺院関係の時期である。古代山城に関わるとすれば、防御的な目的かとも考えられるものの、溝1~4の位置は外郭線からはかなり離れており、堀切や堅堀のような機能とするには躊躇せざるをえない。もう一つ考えられるのは、土砂採取である。周知のように、鬼ノ城の城壁線2.8kmのうち9割は版築土壘である。たとえ内托の土壘であっても使用量は莫大なものであろう。しかしその原土を採取したらしい痕跡はいまだに不明である。土質が同質であることから、筆者は原土は鬼ノ城およびその周辺からの、いわば現地調達と漠然と考えているが、明確な根拠がある訳ではない。溝1~4に限定することはできないが、これらのものはそうした原土の採取地の可能性はないのであろうか。溝内の石垣については砂防石垣と結論づけたが、問題はその手法である。石垣中央部の地山面に板状石を置き、上段を控えて積む手法である。つまり溝内の中央、水の流れ落ちる部分とその周囲に顕著である。これはいうまでもなく、石垣最下石の安定と流水による石材の崩落防止のためであろう。問題はこうした手法が、石積みの技術史のうえでいつ頃から存在したかである。浅学にして筆者はしらないが、T4の下段の石積みにも関わることであり、T1の石列についても同様である。遺構の性格が異なり、また使用石材の大きさも異なるが、角楼の石垣最下部にも同様の手法を用いている。こうした手法は、若干の相違はあるものの、鬼ノ城周辺で散見されるところである。

最後に、道については今回の調査では検出できなかった。ルートの想定が間違っていたのかもしれないが、今回の調査地の近辺に、もともと存在しなかったとは考え難い。何故なら、角楼という防御を重視した遺構が、背面側から正面側にかわる地点に構築されていることを考慮すれば、いずれこの近辺に存在することは疑いない。機会があれば、再度挑戦してみたいものである。

T23～25 前出の報告書では、城壁区間を角楼周辺から反時計回りに区間呼称を付し、各区間の次区間側を頭部、前区間側を尾部と呼称している。それに準拠すれば、このトレンチは第4壁状区間の尾部から城外へ向けて設定した長さ18m幅1mのものとなる。下刈り後の状況は、第3壁状区間と第4壁状区間の折れの前面にあたるこの地点の城外は、第3壁状区間の頭部のあたりから城外にかけて溝状の細長い窪地状の地形が看取された。平成9年度の第3壁状区間頭部の調査では、水門に関わる明確な遺構は検出できなかったので、水門跡とする報告はしていないが、ここに水門状の施設の存在



第65図 高石垣～第0水門付近平面図 (S=1/300)

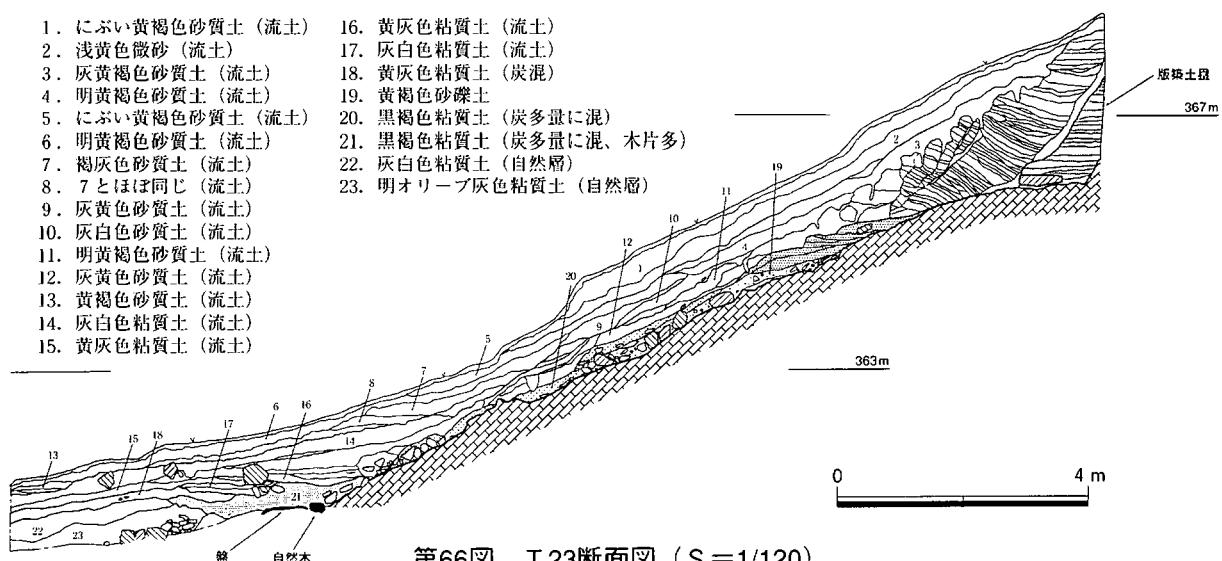
は充分に想定できるところである。こうしたことから、観察された溝状の窪地状部は、位置からみて水門に関わる流路ではないかと考え、トレンチを設定した。鬼ノ城の既知の五つの水門のうち、四つの水門の前面の傾斜は急であり、多少傾斜の緩い第1水門にしても、ここにみられるほど長く緩い傾斜ではない。

調査は、このトレンチの全体にわたって同時に掘りはじめたが、城壁寄りは版築土壘の崩落土の堆積が厚くしかも堅かったが、中央部から下半は流土の堆積が1m前後のため比較的早く地山直上まで達した。土層は上層30cmほどは黄褐色系の砂質土だが、次第に灰色系の粘質土に変わり、場所的にみてもあるいは木製品が出土するのではないかとの淡い時期を抱きつつ掘下げた。この予感は幸い的中し、地山上に貼り付いたような状態で木製品の「盤」が、樹根の下から出土した。トレンチ幅は1mで設定しており、しかも排土処理のこともあって70cm幅で掘下げていたため、急速トレンチ内を全掘したがそれ以上の成果を得られなかったので、流路らしい痕跡のある溝状の窪地状部が含まれるよう両側にT24、25を拡張設定し掘下げた。流路らしい痕跡は、T26から10mほど直線的に下がり、拡張区のあたりで、T25区側は東側へ曲がりながらしばらく続き、やがて自然傾斜と一体となっているようである。全体の長さは15m前後ほどであろうか。

遺物はいずれも地表面にくっつくような状態で出土した。T23区の盤を中心に、その西側のT24では数点の建築部材の端材らしい木片がかたまって出土した。流路らしい水みちの中心部にあたるところである。一方やや東側へ折れ曲がるT25では、加工痕跡のある板状小薄片を含め、数量的にはかなり多く出土したが、大半は樹枝などの自然木で、期待していた土器類はT23～25のいずれからも出土していない。遺物の出土状態からこれ以上は望めないと判断し、また排土処理の困難さもあって、さらなる拡張は行っていない。なおT25の肩口あたりにみられる石は、地山のアブライト層が節理に沿って割れ転落したもので、人為的なものではない。いずれにしても木製品が出土したことは望外の成果であった。

T23の上方にあたる城壁側では、一段一列に置いた神籠石状列石（外側列石）を確認できた。地山のアブライト層を浅く掘り込み、薄い板石のような石材を据え、上部は版築土で積み上げているが、流失のためいま40度ほどの前面角度で残っていた。堅く良く締まった良好な版築土である。間層を挟んで、左上から右下に傾斜する版築土がみられるが、これは版築土壘の上層が大きな塊状に滑落した

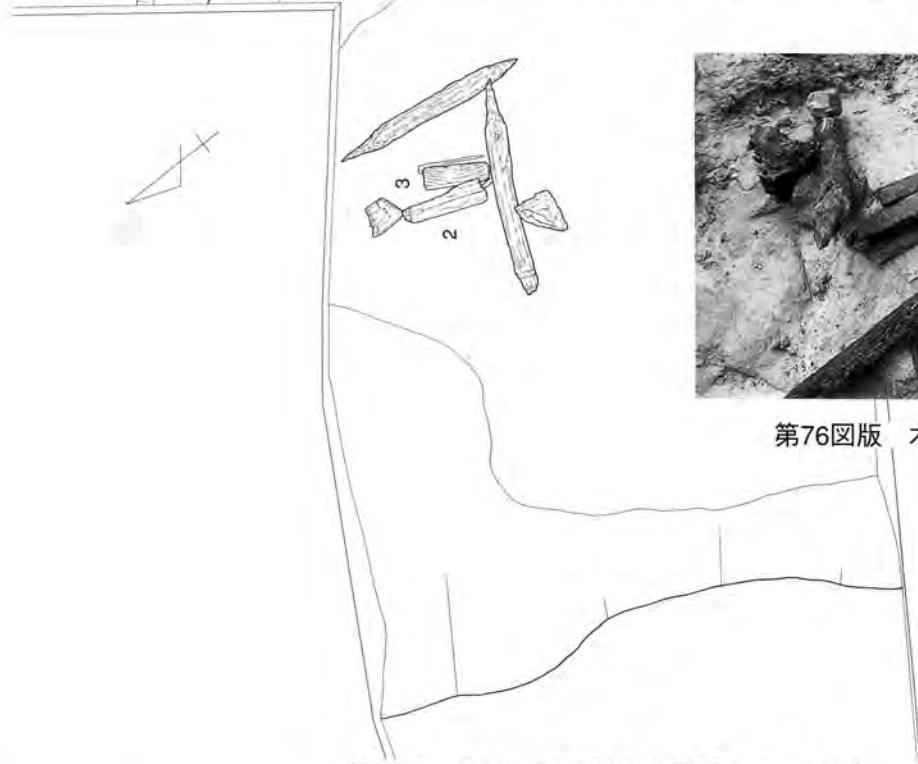
- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. にぶい黄褐色砂質土（流土） | 16. 黄灰色粘質土（流土） |
| 2. 浅黄色微砂（流土） | 17. 灰白色粘質土（流土） |
| 3. 灰黄褐色砂質土（流土） | 18. 黄灰色粘質土（炭混） |
| 4. 明黄褐色砂質土（流土） | 19. 黄褐色砂礫土 |
| 5. にぶい黄褐色砂質土（流土） | 20. 黑褐色粘質土（炭多量に混） |
| 6. 明黄褐色砂質土（流土） | 21. 黑褐色粘質土（炭多量に混、木片多） |
| 7. 暗褐色砂質土（流土） | 22. 灰白色粘質土（自然層） |
| 8. 7とほぼ同じ（流土） | 23. 明オリーブ灰色粘質土（自然層） |
| 9. 灰黄色砂質土（流土） | |
| 10. 灰白色砂質土（流土） | |
| 11. 明黄褐色砂質土（流土） | |
| 12. 暗褐色砂質土（流土） | |
| 13. 黄褐色砂質土（流土） | |
| 14. 灰白色粘質土（流土） | |
| 15. 黄灰色粘質土（流土） | |



第66図 T23断面図 (S=1/120)



第75図版 木製品出土状況(1)



第76図版 木製品出土状況(2)

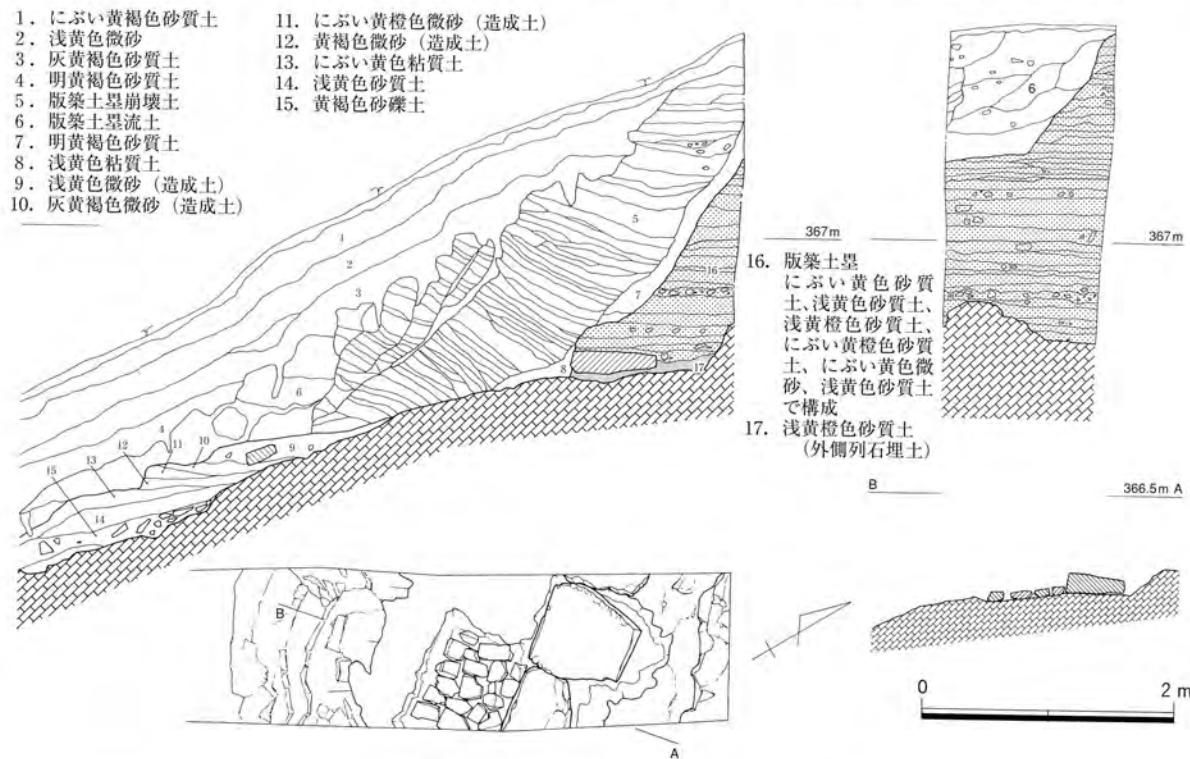
第67図 T23~25木器出土状況 (S=1/40)

ものである。版築土塁を築くにあたっては、列石前面からおよそ4m程を造成し、城塁前面の強化安定と平坦面の確保を図っている。通常みられる城外側敷石は、ここでも1.5m幅で検出されたが、西寄りの列石前面は欠いているが、これは欠落したものではなく、地山が岩盤であることから当初から敷設していないためである。内側列石は欠失しているが、城塁幅は7mとみてよい。



第77図版 木製品出土状況(3)

ところで、木製品等の出土状況はそれらが投棄されたことをしめしており、その時期が問題となる。調査の状況からすれば、地山面にまで達する溝状のものが掘られていたことは確実であり、しかも流土の堆積が殆ど無い頃に木製品や自然木が投棄された状態であった。土器の出土がないから時期を判



第68図 T 23 土壌平・断面図 (S=1/60)



第78図版 外側列石と敷石

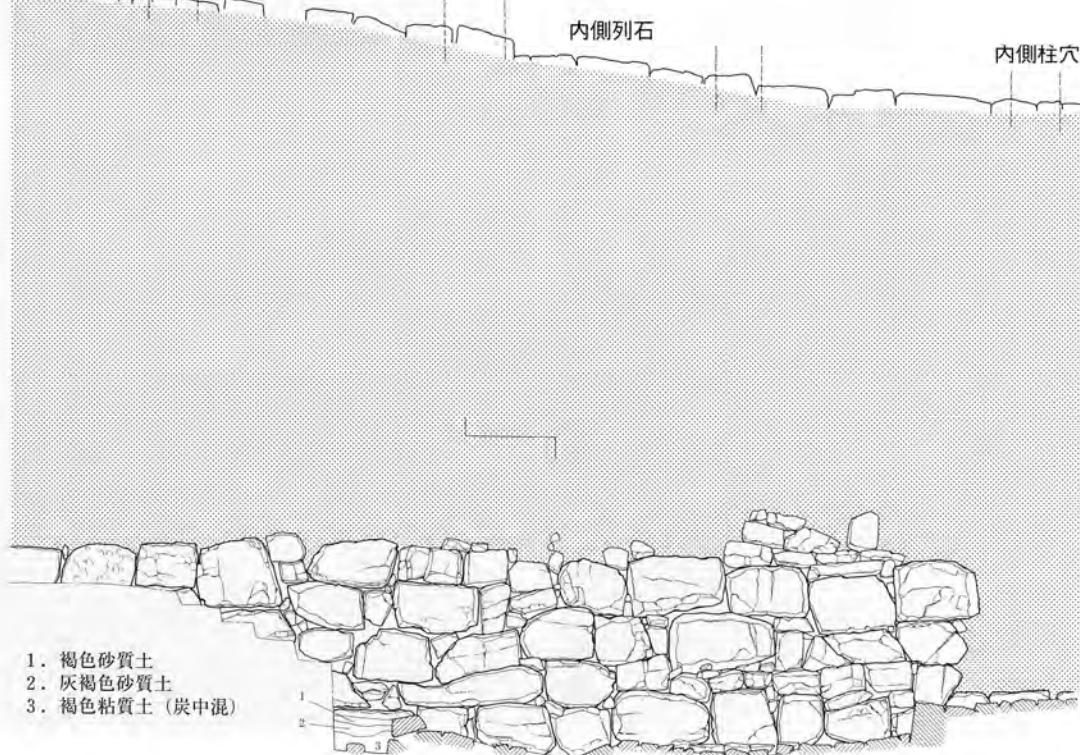
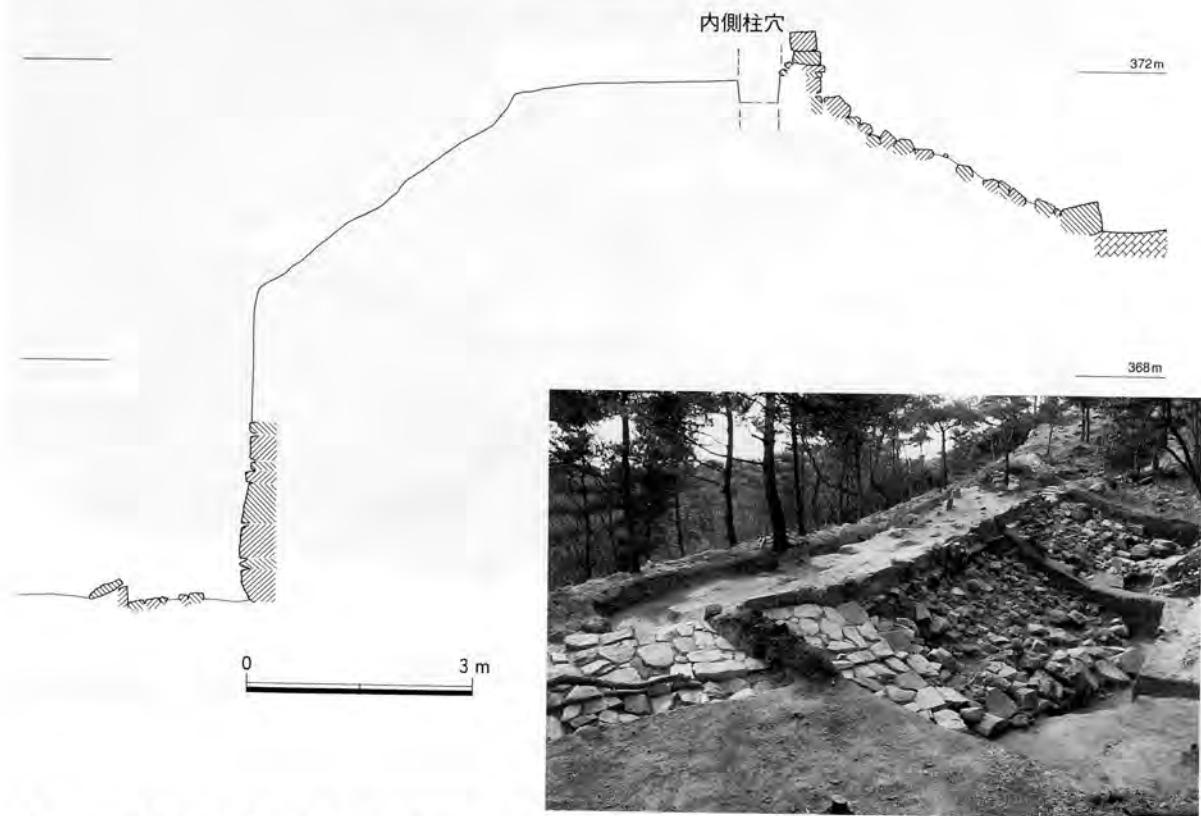


第79図版 外側列石と版築

断することはできないが、この溝状の流路らしきものが、城壘の遺構（水門）と関連するものであれば、その築造後まもない頃ということになろうか。

T26（新水門） このトレンチの背後の城内側は平成9年度に調査し、数段の石積みの上端に板状石を置き、その上に多少控えて内側列石を積んでいること、列石の前面城内側に多数の捨石をしていること、通常みらる城内側敷石がみられないこと、上方からの流水は第1水門のある谷には流下しないこと、城壁外面の三ヶ所の小トレンチで数段積みの石垣があり、天端高はほぼ揃っていることなどが確認されていた。しかし第2～5水門のような背面側の集水口のような明確な遺構は検出されていなかった。

しかしT23～25の調査から、ここに第1水門のような自然通水による水門が存在する蓋然性がきわめて高くなったので、今回の調査では前回に充分な調査のできなかった外面を発掘することとした。検出した石垣は、次区間（第4墨状区間）となる折れの部分から西へ10mほどである。土壘がかなり崩落していて堆積土が多く、排土置場のスペースも充分ではないため、折れから6mほどの範囲を基底部まで掘下げ、それより以西は石材の上端の検出のみにとどめた。石垣は城外から向かって右半分ほどは基本的に4段積みだが、左半分は5段積みである。石材は大半が花崗岩で、100×50cm大を最大とし、基本的に横積みである。各段ごとの高さを合わせるためか、小石材をならべるなどしており、目地は辛うじて通るが、全体的には他の水門のように整然、強固な印象は弱く、やや雑然とした軟弱な石積みにみえる。天端はほぼ揃っているものの、折れから2mほどのところに、小石材が数個据えられているが、どのような目的のためなのか判断がつきかねる。似たような例は、第1水門の石垣上端の石についてもいえる。高さはほぼ2mで、第1水門の高さと近似している。長さは左側端部を未掘のためはっきりしないが、城内側列石とその前面の窪地の状況からみて、12～13m前後と推定しておきたい。鬼ノ城の水門の特徴である石垣上端の通水溝はなく、自然通水のもので、いまも最下段の

第69図 第0水門立面図 ($S = 1/80$)第70図 第0水門断面図 ($S = 1/100$)

第80図版 水門背面側の状況 (平成9年度調査時)



第81図版 第0水門と前面の状況

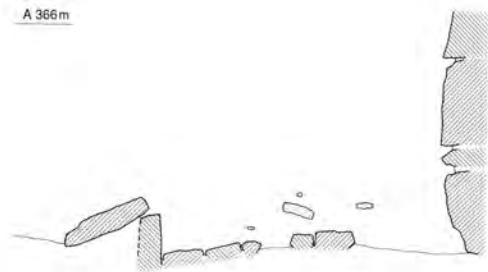


第82図版 水門前面の状況（上から）

2ヶ所から流れ出ている。この高さ2mほどの石垣を水門とする決定的証左は、石垣前面の逆L字状の石囲いによる区画を設けていることである。右側は折れから50cmのところから20度ほど内折して、



A 366m



A'

366m B

第83図版 第0水門(西から)



第84図版 第0水門前面
(東から)



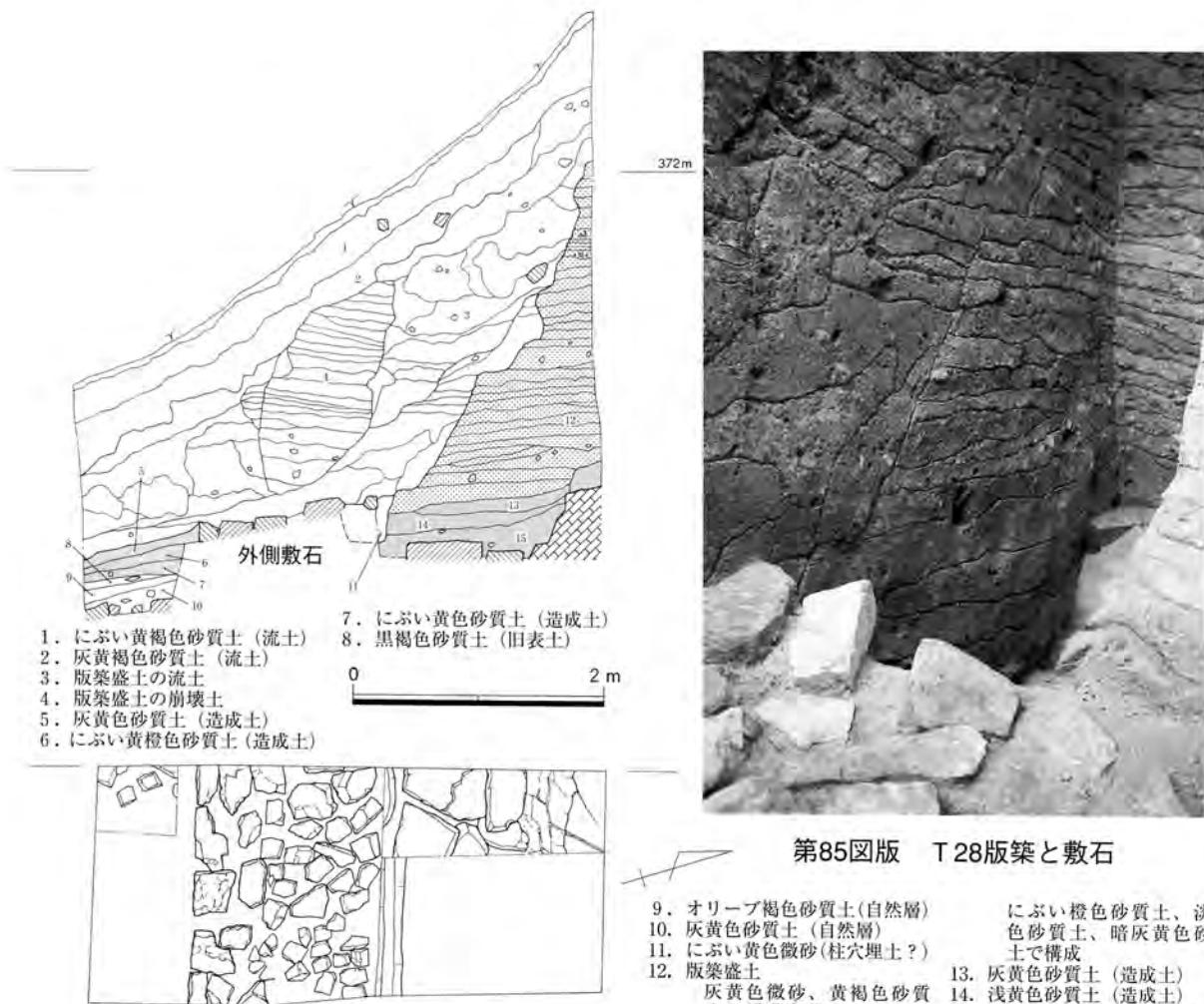
第71図 第0水門前面平・断面図 (S=1/40)

およそ4mほどが斜行する。一方、左側は右側端から5.2mのところから直行して1.5m前面へのび、そこからほぼ直角に折れて右側へ約3mつづき、そこで再び直角に折れ約2m強まで確認したが、ピンポールでの感触では、さらに1m近くのびるようである。囲い状区画に用いられた石材は、板状のアプライトで、左右側とも20cmほどの高さだが、部分的に30cmくらいのところもある。この石囲い状の外側については、右側は平面的に掘り広げていないが、次区間前面は城外側敷石となるとみてよく、左側は基本的には囲い外側には敷石状のものはない。このことはサブトレーンチで確認したが、造成土のみでそれらしい痕跡はなかった。ただ、左側については、すこし離れたところから右側上面と同じようになるらしい石材を確認している。通常敷石帯の幅は1.5mであるから、左側の直行する長さ1.5mと付節する。この石囲いの区画帯の底面には、敷石と同じ大きさのアプライトの板状石を敷き詰めている。部分的に欠落もあるが、かなりびっしり敷き詰めている。だが、底面の敷石のレベルは同高ではなく、かなり凹凸がある。基本的には石垣前面から城外方向へ下降させるとともに、左右から中央に向かって2条下降させており、水みちを意識している。この底面の敷石は、いうまでもなく石垣前面を流水から保護するためであり、20~30cmの高さを確保しているのは、通水量の増加により城外側敷石が洗われるのを防止するためであろう。右側の囲い状の高さが左側に比べ少し高いのは、水門内の自然排水のみならず、高石垣方面からの下降する水量をも意識しており、さらにこの水門から次の第4塁状区間にかけては城壘が下降するからである。なお、石囲い状の区画の中からスポンジ状に軟化した板状木片3点と径20cmくらいの自然木が1本、斜めにつきささった状態で出土した。

いずれにしても、鬼ノ城の水門の前面で、このような排水のための特別の施設をもっているのは、立地に起因するとはいえ、他にない。ここにも築城にあたった人たちの、水に対する細やかな配慮がうかがえる。

なお、この水門は当初第0水門と仮称した。既知の水門が反時計回りに付番されており、また背面側には水門は想定されないから、第6水門と称してもよいところだが、反時計回りの付番ということを考慮した。のち鬼城山整備委員会の了承を得たので、爾後この水門を第0水門と称する。規模は長さ12~13m前後、前面の水門石垣の高さ2m、上部の版築土塁を含めると全体の高さは7.6m幅は7.5mとなり、前面に石囲いの逆L字状排水施設をもち、その下方に流路を掘削した水門ということになる。

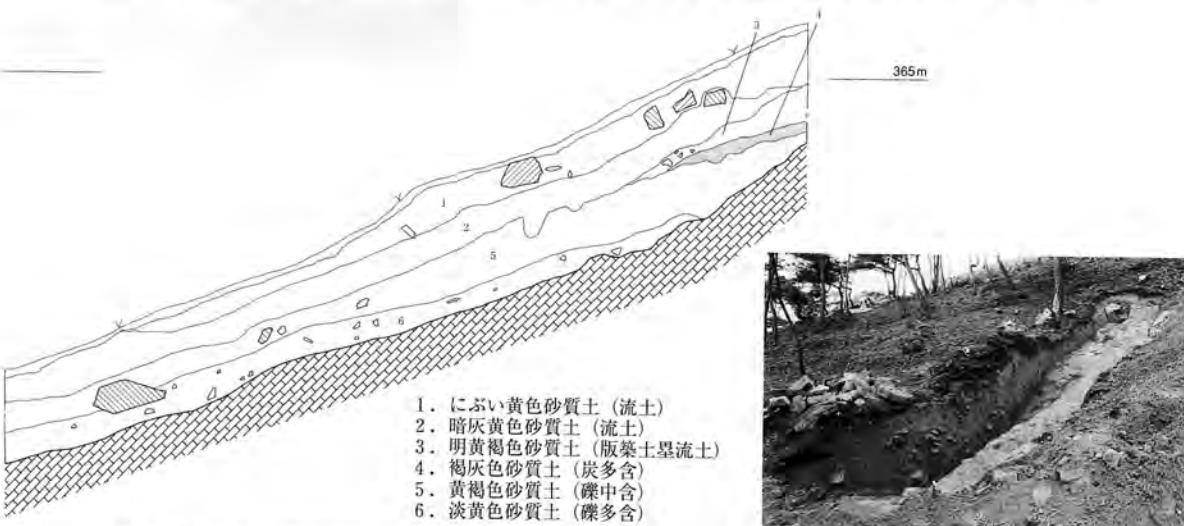
T28 新発見の第0水門から西70mに西門があり、ほぼその中間に現状で長さ8m、高さ6mの高石垣がある。この高石垣と第0水門の間の城壘の構造が、一段一列の神籠石状列石となるのか、あるいは高石垣がさらに東へのびるのか、はたまた低石垣区間となるのか。このことは将来の整備計画事業のうえからも見極めておかなければならぬため、両者の中間あたりに設定したトレーニングである。こここの地山はアプライト岩盤であり、その上を薄く置土して厚さ10cmほどの薄いアプライト材を置いて基底部としている。いわゆる一段一列の神籠石状列石である。版築土はこの上に積まれるが、版築前面は列石より20cmほど前から積まれているから、この列石は埋め殺しの列石となる。鬼ノ城では、これまでの調査箇所でみると、列石の前面は露出しており、このような例は初出である。また城外側敷石の上面は、列石上面より30cmも上位にある。列石上面が埋め殺されて見えない珍しい区間である。敷石幅は1.5mで、これは通常の幅である。このトレーニングでも版築土が大きな塊となって敷石上面に滑落している。トレーニングの奥行、正面の版築は各層が左から右へ下降しているが、これは城壘が第0水門方向へ下降するためである。

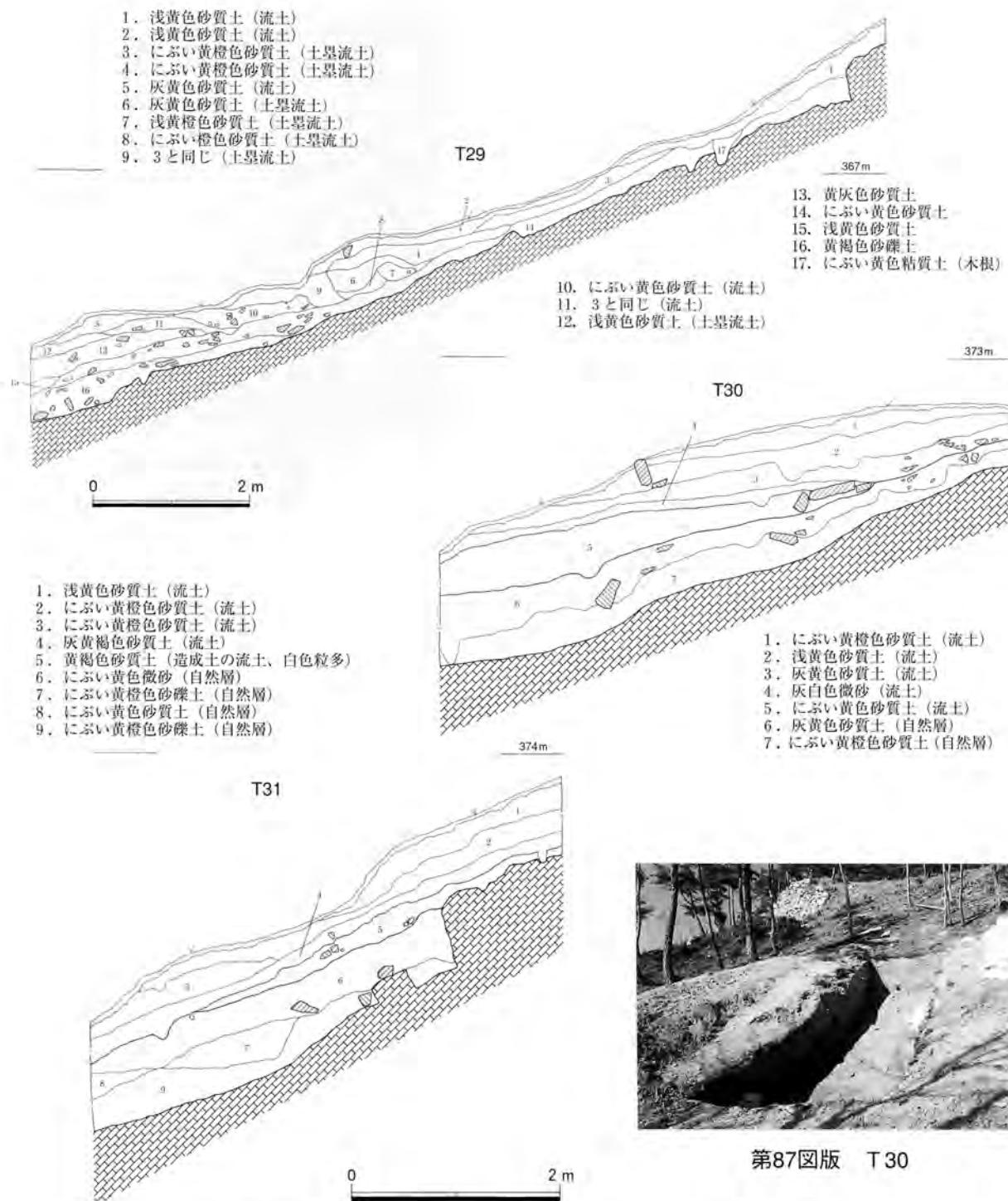


T27 地形図でみるとより緩やかな下降傾斜であったため調査したが、遺構遺物ともになかった。

T29 高石垣の下方にあたり、18m幅ほどで斜面を掘り込んでいたが、ここも遺構遺物ともなく、いつの時代に削平されたのか不明である。

T35, 36 溝状の凹部が等高線に直行してみられたので、二ヶ所にトレーニングを設けたが、遺構遺物ともない。下方には露岩がいくつもあり、地形的にみると自然流水によるものと思われる。





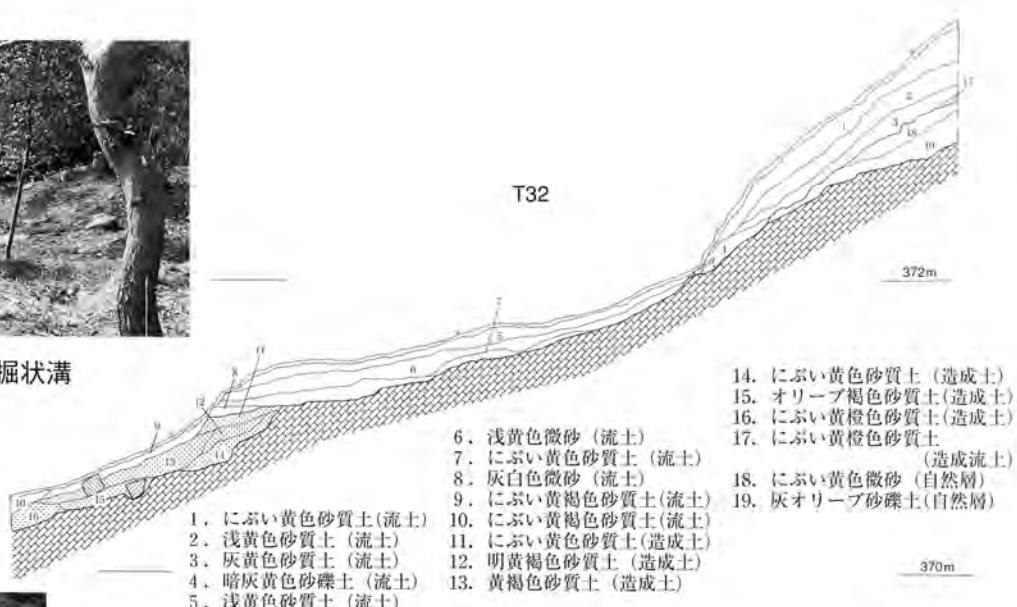
第74図 T29 ($S=1/80$), T30, T31 ($S=1/60$) 断面図

T30 平成10年度の調査で、西門の城外側敷石の前面に幅2.5mの敷石帯が検出され、麓下から西門にいたる登城道の最終地点ではないかと想定されていた。傾斜や方向を見定め、道が存在するとすれば、その可能性が高いと考えられる地点に設定した。しかし道らしい痕跡もなく、また造成した形跡もなかった。付近は近代の砂防工事がさかんに行われたところであり、地形の改変も著しいところである。幅2.5mの敷石帯も表土直下からの検出であり、すでに削平消失しているのか、あるいはもともと存在しないところなのか、いずれとも不明といわざるをえない。

T31, 32 T30は幅2.5mの敷石帯が直線的に南東へ下るという仮定からの設定であった。しかし城

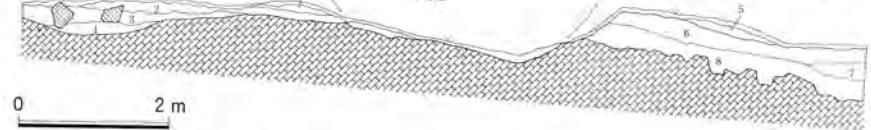
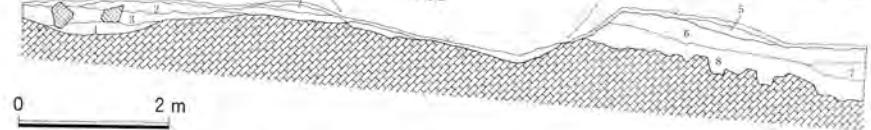
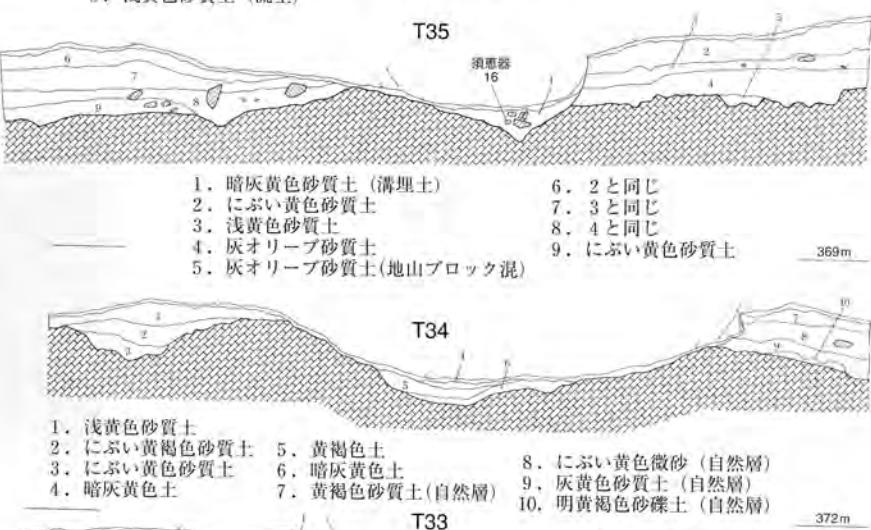


第88図版 竪堀状溝



第89図版 T33

1. 灰黄色粗砂(流土)
2. にぶい黄色粗砂(流土)
3. 黄褐色砂質土(流土)
4. 暗灰黄色砂質土(流土)
5. にぶい黄色砂質土(流土)
6. 黄褐色砂質土(自然層)
7. 暗灰黄色砂質土(自然層)
8. 灰黄色砂質土(自然層)

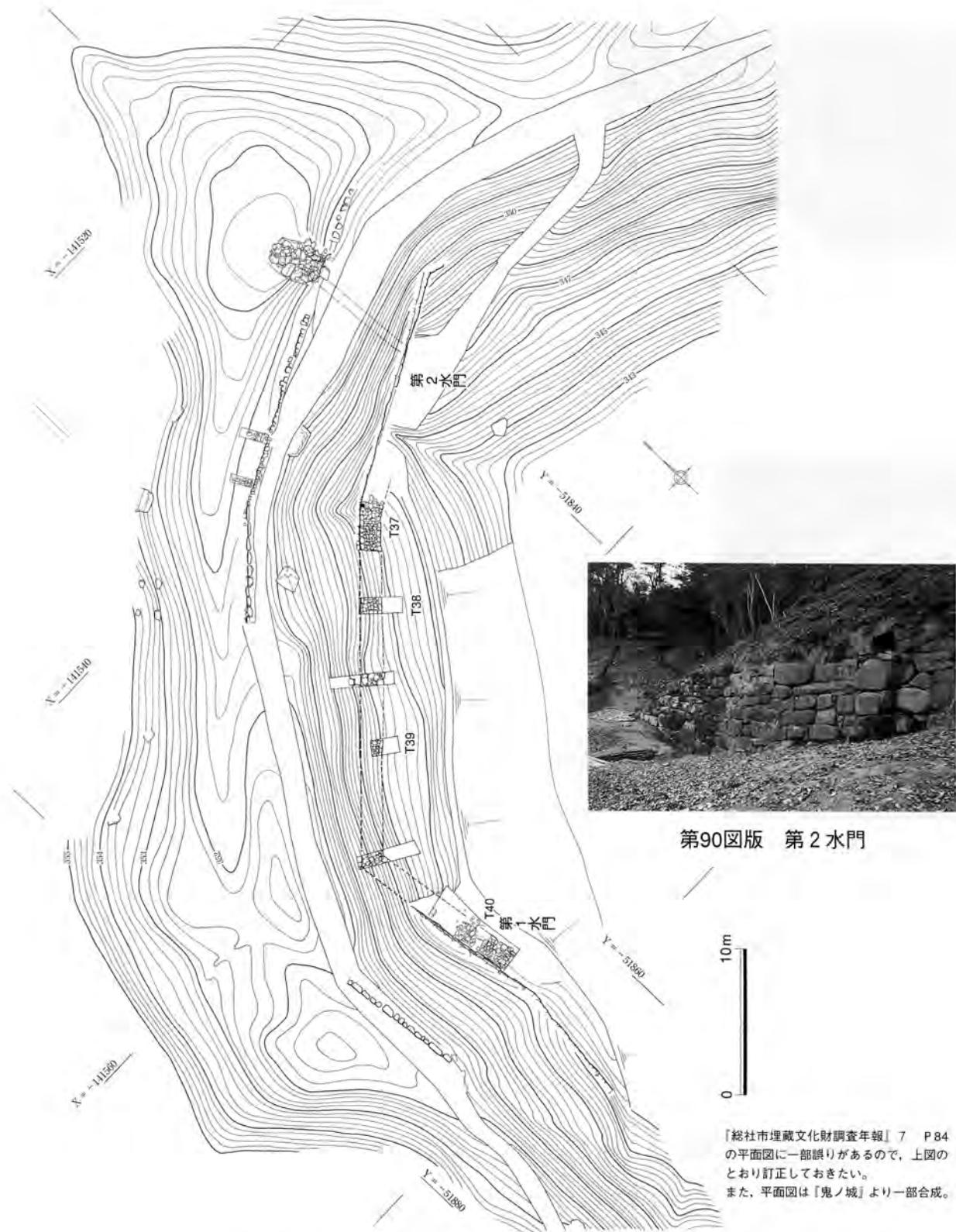


第75図 T32~34 (S=1/100), T35 (S=1/80) 断面図

門前面に幅広い平坦面があり、つづら折れ状に曲折することも考え設定した。しかし道らしい痕跡は掘下げた地層からは認められなかった。この平坦面と城門前面は5mの比高差があり、小急崖状を呈している。

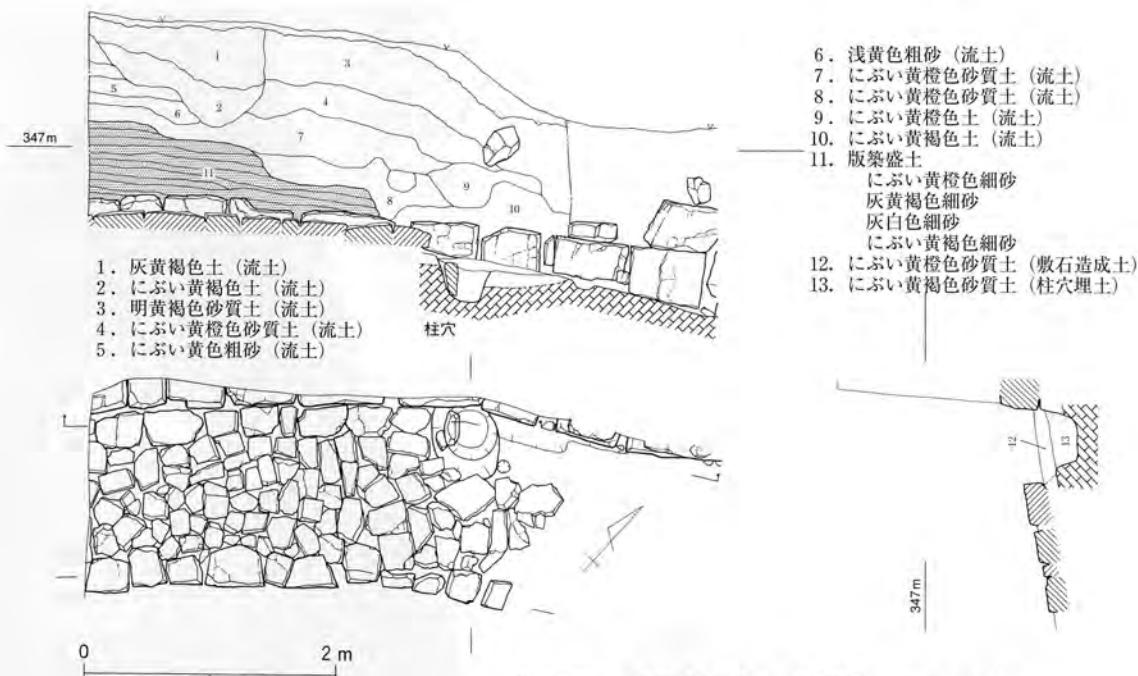
T34, 35 城門前面の長さ約30m幅5~8mの竪堀状溝内のトレンチである。T9~12のものと比べると全体的に浅いが、開口部が急に狭くなる形状はよく似ている。T33からは径30cmの柱穴を2穴検出した。一つは溝外で、もう一つは溝内にあり、心心距離で200cmである。想定される方向に拡張したが、この二穴以外には検出できなかった。

第0水門から第2水門の星状区間の状況については、内側列石が数個散見されるのみで、外側列石は殆どが埋没している。このため昭和53年次の調査では、全体の地形や僅かに露呈している内側列石等から推測されている。今回の調査は、各区間の状況を把握するためのものであるが、内側列石は遺存数も少なく、大半が埋没しているであろう外側列石の確認にあたった。



第76図 第1, 第2水門トレーニチ配置図 ($S = 1/400$)

T37 第2水門外面石垣に向かって左端から、前区間の列石に変わった地点である。列石を検出するとともに、前面で幅1.5mの城外側敷石を検出した。敷石は隙間がないくらい丁寧に敷き詰めているが、第2水門側の端部には多少の欠落がある。列石から水門石垣に変わる小さな折れの前面に敷石の欠落しているところがあり、そこで径30cm深さ20cmの柱穴を検出した。他区間にみられる版築用の柱穴である。柱穴の上面は通常敷石が敷かれているが、ここでは欠落の可能性が高い。版築土墨は列石



第77図 T37平・断・立面図 (S=1/60)



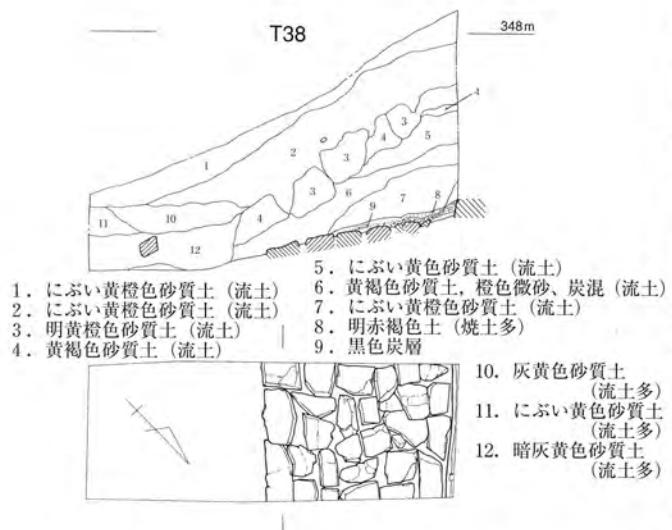
第91図版 T37

上面から、高いところで60cmほどしか残っておらず、全体に崩落が著しい。なおこのトレンチのT38寄りの敷石上面に数cmの炭層がある。

T38 T37の3mほど第1水門寄りで、平成8年度のトレンチとの中間である。列石と良好な状態の敷石を検出したが、上面が被熱赤化していたり、数cmの厚さで炭層が検出されたりした。この状態は平成8年度のトレンチ調査と同じである。なお、堆積土中から鉄斧が出土した。

T39 T38から10mほど第1水門寄りである。列石までの間は土壘崩落土の堆積が厚いため断念し、敷石前端線を追うことにした。ここでもT38と同様に敷石上面に数cmの炭層がある。これらT37~39の調査状況からすると、少なくとも14m以上の範囲にわたって、敷石上面に数cmの炭層が拡がっていることとなる。

T40 新水門調査で、その前面に水処理施設が存在することから、あるいは第1水門の前面にも、



第78図 T 38平・断面図 (S = 1/60)



第92図版 T 38

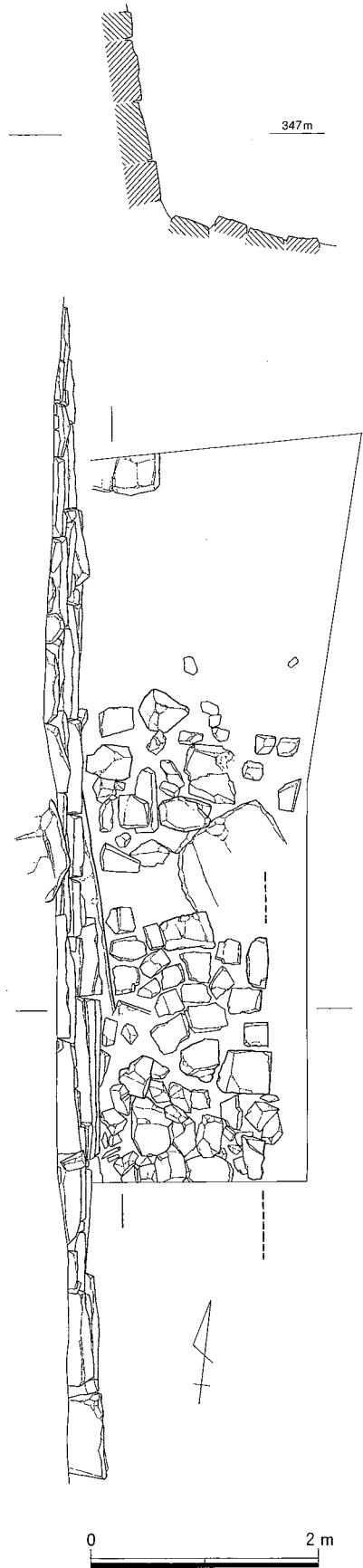


第93図版 T 39



第94図版 T 40（南から）

第95図版 T 40（北から）



第79図 第1水門T40平・断面図
(S=1/60)

との思惑から調査した。第1水門の前面では、第0水門前面ほどの緩やかな平坦面はない。結果的に思惑外れとなつたが、それでも中央部の左前面には幅1.5mの敷石が残っていた。右側はそれらしい石材はあるものの、あまり明瞭ではなく、欠落したのであろうか。

いずれにしても第0、1水門とも他の水門と立地が異なるとはいえる、このように丹念な施工が行われているのには驚くばかりである。

T41 直線的に55m続く区間である。外側列石は殆どが露出しており、中には転落したり傾いたりしているものもある。土壘の流失は著しく、また外側列石前面の敷石も地形傾斜が急なこともあってすべてといって良いほど欠落している。

T42 第7、8壘状区間の折れの確認が目的である。第8壘状区間の内側列石は4石残っており、また平成8年度の調査で二重構造の城内側敷石を検出している。ここは鬼城山から東南へ派生する尾根稜線に近いところで、版築土壘も高いところでは2m以上残存していた。神籠石状の外側列石を確認でき、また敷石もよく存在していた。折れは稜線を少しはずれたところで確認できた。また第7壘状区間には長さ6.6m高さ4mの高石垣があるが、第8壘状区間寄りの石垣の右側は土砂が大きく流失しており、石垣の規模が現状のままなのか、もう少し長かったのは、露岩も多くまた危険な地形状況のため調査できず不明である。なお、この石垣の左側は外側列石を検出できた。

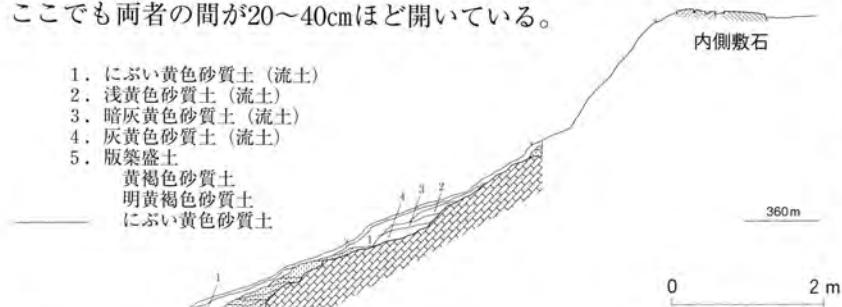
T43 第6・7壘状区間の折れの検出を行い確認した。第7壘状区間尾部の外側列石には、露岩をそのまま列石がわりに利用しているところもある。敷石の残存状況は良好である。ただ第6壘状区間頭部から数mの間は、列石と敷石の間が20cmほど開いている。敷石が欠落したとは考えられない状況で、築成時からの状況とみられ、何を意図していたのか理解できない。

T44 第6壘状区間の真ん中あたりで、鬼ノ城発見の端緒となったところである。外側列石の石材は、鬼ノ城外郭線の中でも大きいほうで、この城の外側列石を代表する区間である。地山はアPLIT岩盤で、列石の奥側は意図的らしく岩盤を階段状にしている。敷石は欠落している。

T45 数個外側列石らしい石材があるが、ほとんどはアPLITの岩盤をそのまま利用している。このため、細かな折

れがあるのかどうかははっきりしない。敷石は欠落している。

T 46~50 列石、敷石とも確認できた。版築土は上面が流失しているものの、列石上で90cmほどの高さでほぼ垂直に残っている。T 47, T 48もほぼ同じ状況である。T 49の列石は粗雑な石材で、地山の岩盤をそのまま敷石に代用している。T 50では列石、敷石とも確認したが、ここでも両者の間が20~40cmほど開いている。



第80図 T 44断面図
(S = 1/100)



第96図版 T 44



第97図版 T 45



第98図版 T 44断面



第99図版 T 42



第100図版 T 43



第101図版 T 43



第102図版 第8区間高石垣



第103図版 T 43



第104図版 T46



第105図版 T47



第106図版 T48



第107図版 T49



第108図版 T50

高石垣 第3塁状区間中央部にあり、現状目視長さ7.8m高さ6mだが、石垣材らしい石材が下方にかなり散乱しており、本来の長さはもう少し長かったのではないかと考え、左右側の上端石材のみを確認することとした。左側へは6mほど石材があり、右側では長さ7.3m高さ1.6mくらいまで確認できた。左側で検出したものは、本来この石垣の一部と考えられるが、右側については一体的なものなのか、あるいは別の低石垣程度のものなのかは今回の調査では不明である。なお、ここでも石材はかなり落ち込んでいた。

表3 調査区各区間の長さ

区間	折方向	角度	長さm	備考	前報告の名称
A	外	33	35		4
B	内	24	15.3		4?
C	内	11	10		5?
D	内	8	24.5		6
E	内	17	13.8		6?
F	内	15	17	高石垣あり	7
G	内	33	6		8
H	内	17	8.6		9
I	内	9	54.6		10
J	内	13	14.7	第1水門	11
K	外	54	25.2		12
L	外	16		第2水門	13

鬼ノ城の城壁線が直線を単位とし、地形に応じて内外に折れ曲がっていることを前提にすれば、各トレーニによる調査の結果から、城壁区間の状況は次の表のようになる。

調査トレーニは幅1mほどのものもあり、角度・方向・距離等に微調整を要するものもある。

いずれにしても、昭和53年の調査は、発掘を伴わない表面観察による考察であり。今回の調査成果と大差なく、その的確な考察に改めて敬意を表したい。



第109図版 第3区間高石垣



第110図版 第3区間高石垣左側



第111図版 第3区間高石垣右側

3. 出土遺物

平成12年度の発掘調査の概要は西門への登城道の確認と、平成13年度以降の整備事業にむけて第0水門から第2水門までの城壁前端を確認することであった。出土遺物は総じて少ないが、T23～T25から木製遺物がまとまって出土し、新たな知見が得られたため木器から順に説明したい。

T23～25の木製遺物

第3墨状区間と第4墨状区間が接続する付近は、地形的にみると谷部に位置している。第4区間の尾部からこの谷部に向けてT23を設定したところ、T23の下位約11mの位置より自然傾斜が終了し、谷頭が形成されていることが明らかになった。城外からの出土という事と、水分に富んだ土壤環境により、奇しくも保存状態の良好な木製遺物に恵まれ、この地点から盤を始め、板状の木器、自然木、土師器小片等を検出した。出土遺物はT23の断面図によると18層・21層から出土し、その状況は地山直上か、極めて地山に近い位置である。木製遺物はコンテナ約15箱分が出土し、その内人為的な加工が認められる遺物を主に抽出したが、全ての樹種鑑定は行っていない。

以下の説明にあたります用語を統一しておきたい。図に向かって上位を前部、下位を後部、左右に従って左側面、右側面、また平面を上面その反対を下面と仮称しておく。

1は盤である。T23の下位に形成されている谷頭の地山直上から出土した。出土状況は盤の下面を上に、後部を山側に向いている。

盤は全長71cm、幅22.6cmを測る。長方形材の上面をくり込んで成形しているために、断面舟形状を呈する。全体の形状はほぼ完形であるが底部に8×8.5cmの菱形状の欠損があり、下面の左側面は材の剥離が認められる。

前部の短辺は楕円形に成形し、後部の短辺も前部ほどではないが丸みを帯びた直線を指向している。左側面は上部幅0.3～1.8cm、側面を約2.5cm面取りし、対する右側面も上部幅0.4～2cm、側面は3.8cmを測る。いずれも上面、側面とも平坦に仕上げている。

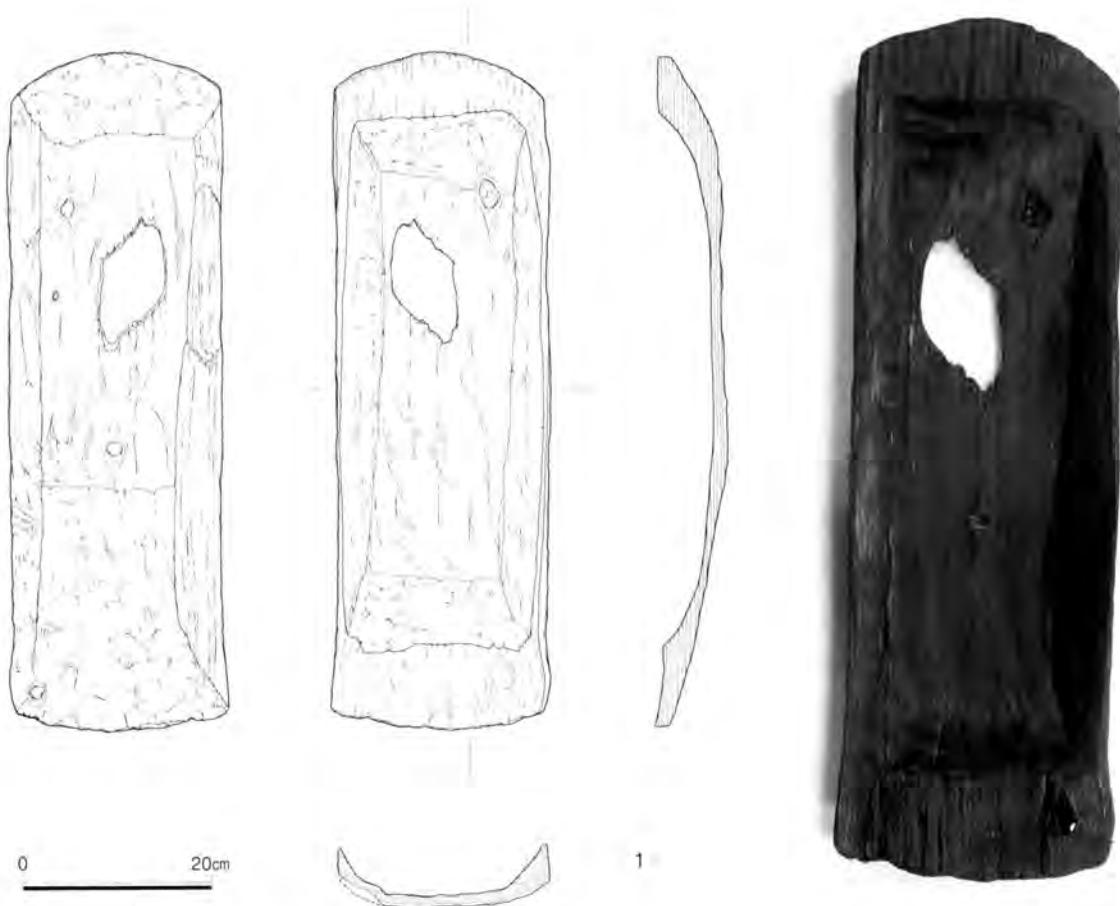
くり込み部は長方形であり、各辺を計測すると前部の上面幅18.4cm、底部幅14cmであり、後部の上面幅19.5cm、底部幅14.2cmを測る。また左側面は長53.8cm、底部長42cm、右側面長56.2cm、底部長42cmである。

長軸の断面形によればくり込みにより底部を形成しているが、漸移的に底部へと移行し、最深で5.5cmを測る。短軸では底部と内側側面との境が明瞭で幅14cm、厚1.2cmである。

このくり込み部分についてはいくつかの加工痕が観察できる。まず、底部には幅約2cm程の単位で長軸方向にケズリを施し平坦に仕上げている。左右の内側側面では底部との境に連続的なケズリ痕が確認でき、また内側右側面には刃幅1～1.5cmの先の平坦な工具痕が4ヶ所認められる。くり込みの前部には1単位が幅約3cm前後の楕円形状を呈したケズリ痕が残存し、特に左側面際には刃を浅くえぐった切り込み痕が明瞭で、この状況によれば側面のケズリの後に前部を削っている。後部においても加工痕は顕著に残存していた。

右側面との境には角を形成するために削り取ったやや粗めの加工痕がみられる。ここにおいても刃幅1.5～2cm程の先の平坦な工具痕が確認でき、前部と同様後部にも楕円形状のケズリ痕が認められる。

下面の成形は底部と前後部と左右側面に分かれる。底部は37×15.5cmを測り、加工痕は幅2～3cm



第81図 出土遺物(1) (S=1/8)

第112図版 盤

程度の単位で長軸方向にケズリを行い平滑に仕上げている。前部は端面を1.4cmで面取りし、底部にかけての長さ8.3cm間を斜方向に成形する一方で、後部は端面を厚1.5cmで面取りし、底部にかけての長さ25.3cmを緩慢な傾斜をもたせ成形している。仕上げ調整に際してはいずれにも前述の梢円形状を呈したケズリ痕が認められる。下面の右側面は3.3cmで直線的な面取りが行われており、対する左側面は大きく剥離し観察できない。

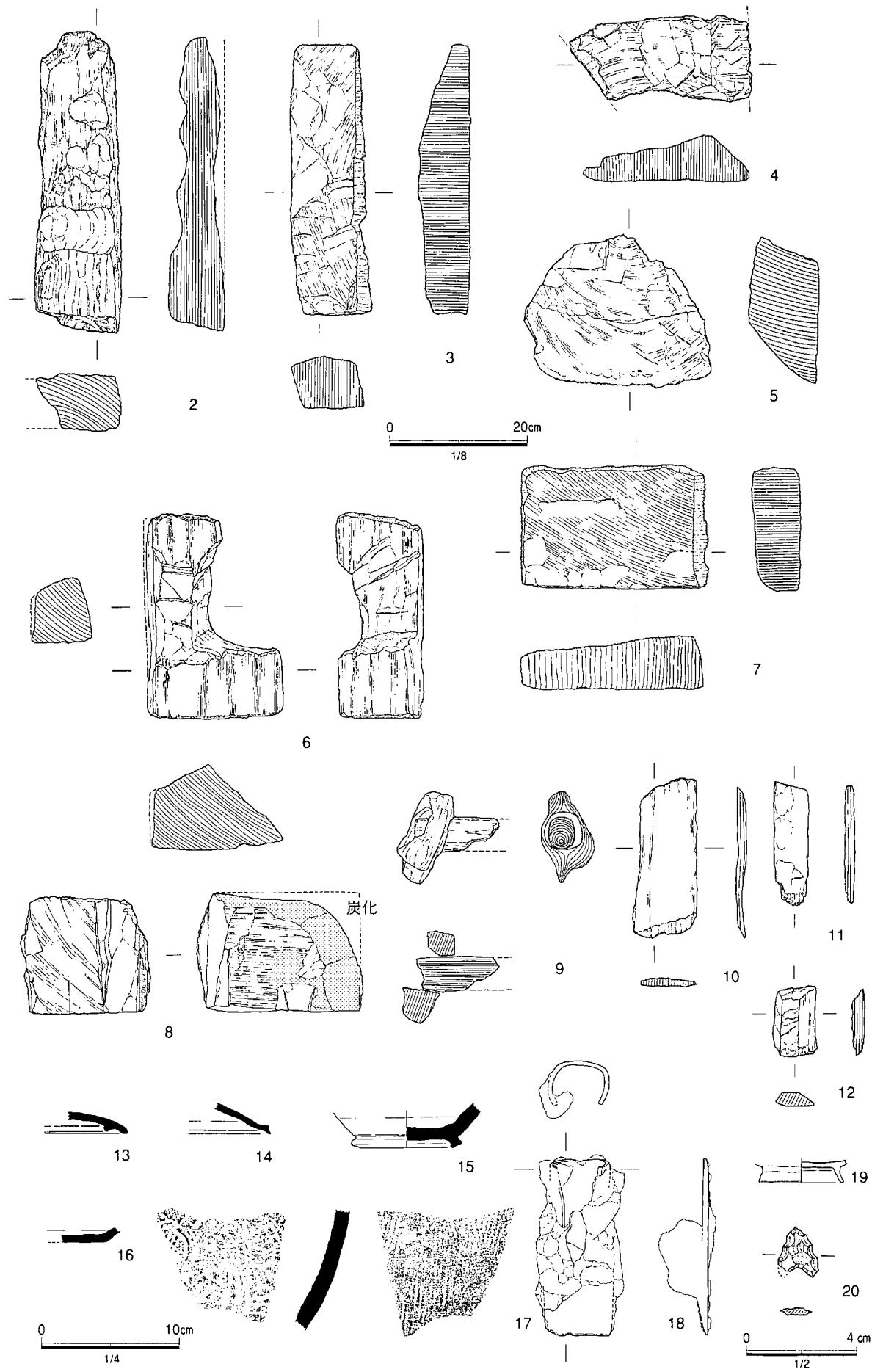
以上、盤に認められる加工は最終調整を示すが、その痕跡をまとめると

- A. くり込み部の側面には幅1～2cm程度の刃先の平坦な工具（平ノミ？）を用いている。
- B. くり込み部の底部と内側側面には幅0.5～1cm幅の連続的な加工痕が認められるためAよりも刃先が小さい工具を用いている。
- C. くり込み部の前後部ないし下面には幅3cm前後の梢円形状の加工痕が認められる。

年輪によって木取りを確認すると上面が木表、下面が木裏となり、板目材を使用している。材質はヒノキという結果を得た。

2は長方形材で全長約43cm、幅12.5cm、厚8cmを測る。図にむかって前部と左側面および下面是材の一部がすでに剥離している。上下面並びに後部右側面は平坦に成形された状況が窺え、上面には長軸に直交して幅5.7～8.2cm、深さ1～1.3cm程の浅いほり込みが認められた。上面が木表で下面が木裏を示し、2の材はモミである。

3も長方形材で全長38.5cm、上面幅9.2～下面幅8.5cm、最大厚7.4cmを測る。各面には端正な成形が施されており、上面にはいくつかの加工痕が認められるが、荒削りされて凹凸が激しく中央付近の頂



第82図 出土遺物(2) (S=1/8, 1/4, 1/2)



第113図版 木器 6



第114図版 木器 9



第115図版 有袋鉄斧 18



第116図版 木器 2



第117図版 木片



第118図版 木器 3



第119図版 木片



第120図版 木器 4



第121図版 木器 5

部が削り残されている。年輪径が大きいため推定される原本の直径は1m近くになると考えられる。3は木材を輪切りにして使用しているので、右側面が木裏、左側面が木表となり、材質はモミを使用している。

4は方形材で全長25.7cm、最大幅12cm、最大厚6.6cmを測る。上面は山形状になりケズリ痕が明瞭に認められる。向かって右側面は鋭角に尖り、左側面は工具によって深く削りが及び、段状になっている。なお前後部は剥離し原形を留めない。4は下面が木裏、上面が木表である。

5は不整形な楔形を呈し、全長25.1cm、幅21cm、厚10.2cmを測る。上面は平坦に仕上げており、幅4.5cm程度のケズリ痕が明瞭に見られる。また斜めに成形されたカット部分は刃幅2.2cmの加工痕が残存し、下面是上面よりも平坦に仕上げられていた。5は上面が木裏、下面が木表である。

6はL字形を呈した木材で全長14.7cmである。図に向かって縦長に細長い部分の断面は厚4.6cmで不整な台形を呈する。また基底部は幅9.8cm、厚6.1cmを測り、形状は不整形で先端が楔状となる。

加工痕は細長い棒状の部分に顕著に認められ、刃幅1~2.5cmの刃先の平坦な痕跡が残存し、中でも2.5cm幅の加工痕が最も多い。6は板目材を使用し材質はヒノキである。

この木材の用途としては木を切り出し、運搬する際に材木の端部に、運搬用の穴をあけた目途穴の可能性が考えられ、現地において不要な部分を切り落とした廃材が⁽⁶⁾6であろう。

7は長方形を呈した加工材で全長13.5cm、幅8.9cm、最大厚3.8cmを測る。表裏は端正に仕上げており、一部凹状を呈した加工痕がみられ、四方の側面はいずれも切り取りが明瞭である。7は上面が木裏、下面が木表である。

8は方形状の木材である。小口面は8×8.3cmの方形を呈し側面長12cmを測る。側面から小口面にかけて部分的に炭化しており完存していない。小口面は左右の斜め上方から中央下部にかけてケズリが行われ、中央近くには長さ7.5cm、幅0.2~1.1cm程度の細長い削り残しが認められる。また、側面はていねいに調整されたと見られ平滑な仕上がりとなっている。さらにノミで打ち込んだのか楔状のくり込み痕が2ヶ所観察された。この木材は方形を呈し加工材と言い得るが、使用目的や部位については定かではない。部分的に炭化している事から廃材となって以後は火にかけられ処理されたらしい。8の材質はカヤである。

9は2部材の接合を示すもので、ここでは便宜的に棒状の材を挿入された側を（図に向かって左）A材、棒状の材をB材としたい。

A材は全長6.6cm、最大幅3.8cmで、内径は2.7cmの円形である。全体的に不整な橢円形を呈するが、B材とのとりつき部分には瘤状の盛り上がりが認められる。B材は全長6cm、最大幅2.5cm、径約2.1cmの棒状の材である。A、B材が接合された角度は110度で、これらの接合材は今のところ何らかの柄ではないかと考えている。9の材はヒノキである。

10~12は板状の薄片である。いずれも0.6~1cm程度の厚みで、小口に斜め方向のカットが確認でき、こうした薄片は出土遺物のなかでも多く認められた。

土器、その他

13は須恵器杯Bの蓋で、西門の内側敷石周辺から表採した。また、14の杯Bは溜井の上方より表採したもので器壁は薄い。15は壺で、T3の23層のほぼ地山直上から出土した。底径6.6cmを測り高台はハの字に取り付く。なお、T3の下位には地山の高位を削り、谷側に造成面を広げた遺構があり、部分的に被熱痕跡を確認している。16は皿で、T35で検出した自然流路の埋土から出土した。

17は須恵器甕でT 1の列石の裏込土から出土した。この遺構が鬼城山と併行する時期のものか、後世の遺構かは意見の分かれる所であるが、平石を寝かせた後に石材を配列し、石材に傾斜を持たせている特徴がある。こうした技法は石垣⁽⁴⁾にも認められるため、17の須恵器片をもって直ちに時期を決定することは避けておきたい。

第1～2水門間に設定したT 38の埋土からは、18の有袋鉄斧が出土している。鋒膨れが著しいため全てを計測できないが、全長12.6cm、刃部幅4.9cm、最大幅0.8cm、袋部外径約4.4cm、厚0.3cm、内径約3.8cmを測り、重量は383.8gである。板状の刃部は先端が尖り、袋部は鉄板を両側から折り曲げて成形している。⁽⁷⁾

19は吉備系土師器椀で、第3塁状区間の城内側から表採したものである。20はT 6の上位から出土したサヌカイト製の石鎌である。最大長18mm、最大幅14mm、最大厚2mm、重さ0.4gを測る。なお、トレンチの下方からは図示できない土師器小片も出土した。

木製遺物の時期

今回の発掘調査により出土した遺物は大半が木器に占められるため、これらの時期について付言しておきたい。

木製品が出土したT 23の層位は有機質に富む21層で、層厚約10～40cmである。この層の堆積状況を今一度見てみると、T 23の上位には岩盤上に外側列石が配列され版築土塁が構築されている。そして、この岩盤の前面約2.8mには厚40cmの造成が行われ、造成土の下層には多数の炭を含んだ20層が堆積しており、自然傾斜が終了する谷頭の位置まで及んでいた。20層は木製品を包含する21層との連続性や、上面からの堆積が把握できるので、木製遺物は層位的にみて鬼城山が機能していた時期の遺物と解せる。また、盤を始め多数の木器や自然木のほとんどが、地山かそれに近い位置で出土しており、ローリングを受けてはいるものの古代の土師器小片が共伴している。これらの事実を総合すると、木製遺物の時期は鬼城山に伴う遺物であることは疑いない。

4. まとめにかえて

道について

今年度の調査の主目的であった登城道や作業道については、残念ながら期待した成果をあげることができなかった。しかし城門にいたる登城道や城内の諸施設のための資機材の搬入等の作業道、城内の各所にいたる城内道が存在したことは自明の理であろう。

各地の古代山城をみても、登城ルートが想定されたり、またそれに基づいて大野城のように城門に進入口の地名が付されたものもある。しかし実際にこれらの発掘調査が行われたことはなく、わずかに鞠智城堀切門で両端に側溝をもち、それらを含めて最大幅3.0mの道が確認されているにすぎない。⁽⁸⁾

成果は得られなかつたものの、調査区の近辺に道が存在したであろうことは、外郭線全体の中での位置や西門、角楼の存在からみても蓋然性は高いと考えられる。また補足的にいえば、鬼ノ城の駐車場の手前400mほどのところにある新山集落の一帯は、平安時代に新山廃寺の所在したところであり、集落南面の狭小な谷には大門跡と称される3×3間の山門跡の礎石がいまも水田の中に残っている。⁽⁹⁾ここにいたる古道が平安時代になって漸く開削整備されたのか、それともそれ以前からの道を踏襲、整備したのか、興味を惹かれるところである。地元の横田武夫氏によれば、角楼のそばを通るいまの進入路は、かつての小さな山道を30数年前に拡幅したことである。現在鬼ノ城城内への進入路に

なっている道が、かつての鬼ノ城へ通じる道と重複していた可能性はすべて否定されたとは思えない。

いずれにしても、城門への道の追跡は城門の性格を考えるうえで重要なことであり、機会があれば再度挑戦したいと思っている。

豎堀状溝

中世山城でいう豎堀とは立地、形状、規模とも異なり、不適切な表現だが適確な表記ができないので、このように仮称した。いってみれば、稜線上や斜面に掘削された大溝のようなものであり、今回の調査区には三ヶ所にある。駐車場のすぐ上とそこから角楼までの間、それと西門の前面である。調査概要の項で述べたごとく、それらが雨水の掘削により自然に形成されたものではないこと、いずれからも遺物は出土していないなど、人為的であったとしても時期や目的がはっきりしない。この三ヶ所のうち前二者と城門前面のものは、立地からみてどうやら性格が異なるらしい。前二者については時期を決めうるものがないが、後世の掘削とする理由は鬼ノ城の再利用が限られることからも、成り立ちにくいと想われる。それは規模からみても、かなり大量の土砂採取を目的とする掘削らしいから、状況的には鬼ノ城期の版築用土砂の採掘痕とするのが妥当かと想われるが、いずれにしても決め手を欠く。また仮にそうだとすれば、版築用土砂は膨大な量を必要としたであろうから、こうした形状のものがもっと多く存在しなければならず、それも今後の課題である。

西門前面のものについては、南門前面にも同様のものが確認されている。より急峻な斜面に西門前面のものより幅広く深く掘削している。付言すれば東門前面は岩盤でありこのようなものはみられず、北門前面は小さい谷が入り込んでいる。こうした状況から考えると、西門、南門前面のものに、防御的要素を認めることも可能なようであり、また道と重複している可能性も皆無ではないようにも考えられる。

新水門について

西門跡から反時計回りに約70m進んだところの、第3壘状区間頭部で新たに水門跡が確認された。平成9年度の調査について2度目となったが、既知の五ヶ所の水門に加え、これで鬼ノ城の正面側の六ヶ所に水門が築かれていたことになる。確実な水門跡の数としては、古代山城で最多である。ここはすでに前出の報告書で「水道とのかかわりのある遺構ではなかろうか。」⁽¹⁰⁾というすぐれた見解が示されていたところであり、それが実証されたことになろう。基本的な構造は他の水門と同工だが、通水溝をもたない自然通水のもので、第1水門跡と同種である。驚くことは、水門前面の石囲いによる区画をつくっていることである。他の水門については前面を調査をしていないが、第3・4・5水門は前面の傾斜がきつく、捨石による保護対応はみられるものの、第0水門例のようになるとは考えられない。第2水門は前報告書にそのような報告はないが、第1水門前面は敷石が部分的だが認められる。

この六ヶ所の水門に関わる流水面積をみると、第0水門のおよそ2,300m²を1とすれば、第1水門が6.9、第2水門が9.9、第3水門が28.3、第4水門が47.3、第5水門は18.1となる。なお、第1～3、4水門については城壁線が反時計回りに下降していることから、この数値が増えるかもしれない。いずれにしても、流水に対する細心な配慮というべきであろうか。

他の古代山城跡では、水門前面の調査例は少ないが、このような例は報告されていないようである。こうした装置は、水門の立地、構造に起因することはいうまでもなかろうが、鬼ノ城築城者の並々ならぬ設計意識とみることができよう。

木製品、樹枝等の出土について

第0水門下方で木製品等が出土したのは、僥幸というほかない。城内には八ヶ所に池や湿地があり、非常の際には貯水池として利用されたことであろうことも説かれている。⁽¹¹⁾またそうした湿地などでは、木製品や建築部材の出土も鞠智城例をみるとまでもなく、充分に予測されるところであり、出土遺物によつては鬼ノ城の解明がより進展する可能性を秘めている。しかし現状は、平成11年度に自然保護団体からの貴重な植物があるとの要望によつて、残念ながら調査は凍結状態になつてゐる。文化財の保護活用と自然環境の調和を図りつつ、共生する方向を協議によつてみいだし、一日も早く解決が図られるよう努めたい。

註

1. 坪井清足ほか『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980
2. 報告書は未刊だが、概要については下記のものがある。
岡田 博「はじめての城内発掘」『特集謎の古代山城「鬼城山」の解明に向けて』教育時報 平成12年7月号 岡山県教育委員会
岡田 博「国指定史跡鬼城山確認調査」考古学研究会 岡山例会 2000年10月
3. 村上幸雄『稼山遺跡群』Ⅲ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年
4. 註1と同じ
5. 図示した断面図の木目の表現は、木取りの方向等を表しているもので、厳密な木目は表現していない。
6. 鬼城山整備委員 濱島正士氏に御教授いただいた。
7. 18の有袋鉄斧は保存処理終了後、再度図化したい。
8. 西住欣一郎、矢野裕介、古閑敬士『鞠智城跡』第21次調査報告 熊本県文化財調査報告 第191集 熊本県教育委員会 2000年
9. 葛原克人「新山庵寺」『総社市史 考古資料編』総社市 1987年
10. 註(1)書37頁に葛原克人氏の見解がある。
11. 葛原克人「第三節古代山城跡」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
葛原克人「第一節古代山城の築城」『岡山県史原始古代1』岡山県 1991年
ほかで同様のことが述べられている。
12. 『鞠智城跡』第19次調査報告 熊本県文化財調査報告 第169集 熊本県教育委員会 1998年
『鞠智城跡』第120次調査報告 熊本県文化財調査報告 第181集 熊本県教育委員会 1999年
また新聞報道によれば、上記の木製品等の出土した貯水池跡から木材と石で開んだ水くみ場も発見されている。読売新聞 熊本北部 2001. 3. 22

報告書抄録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
卷次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	11
編著者名	村上幸雄, 谷山雅彦, 平井典子, 武田恭彰, 前角和夫, 高橋進一, 松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363
発行年月日	西暦2001年9月30日

総社市埋蔵文化財調査年報 11

2001年9月30日 印刷

2001年9月30日 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

